

滋賀県基本構想審議会委員の皆様への ヒアリングより (2022年5月23日～6月23日)

第2期基本構想実施計画の策定に向けて、25名の審議会委員の皆様へ、以下の
ようなことを中心にお話をお伺いさせていただきました。
この冊子は、お話しいただいた内容をまとめたものです。

●現状について

お仕事やご活動の状況、または普段の生活の中で、コロナの影響で変わったとお感じになること等

●今後の社会で特に必要になってくるとお考えのこと

基本構想で描く2030年の目指す姿に向けて、あるいは2030年のその先の社会に、こういうことが
必要ではないか、こういうことがあったらいいのではないかとお考えになること。特にコロナの経験
によって強く感じるようになったこと等

●滋賀で暮らす（関わる）幸せについて

委員の皆様から見て「滋賀で暮らす（関わる）幸せ」ってどんなことがあるか、滋賀のいいところ、
強み等、お感じになること

目次

- P.1 抜粋版～みなさまのお話をちよつとずつ～
- P.7 辻 博子さん（公募委員）
山川 響さん（公募委員）
- P.9 谷口 郁美さん（県社会福祉協議会 事務局長）
- P.12 岡本 直輝さん（立命館大学スポーツ健康科学部教授）
- P.15 甲斐 一範さん（公募委員）
- P.17 玉置 千春さん（(株)シンコーメタリコン取締役 広報部長）
宮本 麻里さん（子育て応援カフェ LOC0 代表）
- P.20 檀原 泉さん（公募委員）
- P.24 岩寄 博論さん（武蔵野美術大学クリエイティブイノベーション学科教授）
- P.27 水野 扶美さん（東近江永源寺森林組合職員）
- P.29 藤野 裕美子さん（美術作家）
- P.31 高力 容子さん（近畿健康管理センター経営企画本部経営企画グループ）
- P.33 高橋 啓子さん（元聖泉大学副学長、滋賀県基本構想審議会会長）
- P.36 小坂 真理さん（東海大学教養学部人間環境学科特任准教授）
- P.38 小玉 恵さん（(株)たねや 執行役員 経営本部 本部長）
- P.40 平山 奈央子さん（滋賀県立大学環境科学部 講師）
- P.42 川口 洋美さん（ツールドラック代表取締役）
- P.44 高須 海地さん（Fridays For Future 滋賀）
- P.46 酒井 道さん（滋賀県立大学地域ひと・モノ・未来情報研究センター長
滋賀県基本構想審議会副会長）
- P.48 今井 崇人さん（魚重産業株式会社）
- P.50 宇都宮 浄人さん（関西大学経済学部 教授）
- P.52 清水 貴之さん（日伸工業株式会社 代表取締役社長）
- P.54 高橋 佳奈さん（みのり農園 事業主）
- P.56 相川 康子さん（NPO 政策研究所 専務理事）
- P.58 渡部 玉蘭さん（浜大津「あすとこクリニック」院長）

基本構想審議会委員の皆様へのヒアリングより（抜粋版） ～みなさまのお話をちょっとずつ～

〈オンライン化・リモート〉

- ・ズームなどを使うようになって、生活面、仕事面大きく変わった。良い面も悪い面もある。いいところは残してすみ分けが大事。
- ・仕事と家庭、家庭と治療など両立が可能になった部分ある。
- ・遠隔にするのにすごく頑張ったはずなのに、対面でいいと昔に戻りつつあるのはもったいない。
- ・コミュニケーション不足してきたとともに、仕事そのものの本質についてより頻度を上げた議論ができるようになった。両極端だけこのバランスが大事。
- ・大学ではICTをうまく利用しながら学びの成果を発表するケースがかなり出ている。
- ・学生たちは授業や面談をオンラインですることには少し否定的なところもある。

〈スポーツ〉

- ・スポーツの「する」「観る」「支える」「情報発信する」の「観る」のところはかなり変化。
- ・民間フィットネスをあえて2極化させて、高齢者対象の出張型をつくってもよいのでは。
- ・若い人の筋力低下が問題。ピークが低いと筋力落ちるの早くなる。
- ・運動習慣も課題だが睡眠不足など、トータルで健康に過ごして体も保てるみたいなどころが必要。

〈文化芸術〉

- ・コロナ禍で文化的な活動がすごい大事だったと実感。
- ・地域の中のお祭りなどは今だからこそサポートしてやっていくべき。
- ・美術作品を鑑賞することは他者の考えを想像すること。文化や美術はただ楽しむだけでなく多様化する社会について考えるきっかけになる。
- ・アーティストの健全な活動や県民が文化芸術に触れる機会があることは大切だが、必要不可欠なのはそれを支える機関や人。
- ・県の文化政策はすごくいい取組だと思っている。ただ小さな団体や個人にまだまだリーチができていない部分があるかなど。
- ・（アーティストが）芸術についてあらゆることを相談できる窓口があるとよい。

〈健康〉

- ・健康志向、二極化が進んでいくのでは。
- ・健診機関である私たちは、検査をやって結果が生かされないなら社会的使命あまり意味ない。地域や大学、企業と連携して支援できれば。
- ・健康増進のところでは一番大事な絶対寝たきりにならないこと、ぐらいいいことを言い続けてもいいのでは。

〈医療福祉・子ども〉

- ・生活の困窮が迫ってきている。しんどい人はずっとそのまま。
- ・ひとり親世帯の平均月収はコロナの影響を受ける前から低かったことが数字上も明らかになった。
- ・中学・高校では6割を超える学校がヤングケアラーの子どもがいると。子どもに関わる全ての人が気にかけていく必要。
- ・福祉のできごとから地域のできごと。普通の暮らしをしている中や、見えないところでも生きづらさや困りごとを抱えている人も含めて、福祉のできごとにしていたらひたすらなる繋がりを実現できない。
- ・ヤングケアラーの問題が取り上げられるようになった。表に出てこないと対応できないのでそれはよかったかと。
- ・介護現場の感染症対策の業務が大幅に増えた。地域包括ケアの中に保健の分野も感染症対策も今後必要。
- ・女性の自殺者が非常に増えたことが衝撃。

- ・生きづらさが年々増して若者の死亡割合で一番多いのが自殺になってしまっている。ここをどうにかしたい。
- ・ひきこもりの人も外の情報を得ている。ひきこもりと一括りにしないで何をしているかを見ないと。
- ・発達障害も1人1人違う。強みもある。障害のある子とない子で別に授業したらいいという問題じゃなく、強みを生かす発想の転換が必要。
- ・子どもには子どもの世界やルールが。子どものエンパワメントは子ども自身はないとわからない。
- ・とにかく子どもが最優先。

〈地域・地方創生・移住〉

- ・自治会のあり方、高齢者が高齢者を支える環境から脱却すべき。滋賀モデルを作ってもいい。
- ・農地、空き家の問題急務。
- ・ローカルとグローバル、今後はローカルで起こることがグローバルにインパクトもたらす構造もある。大都市とローカルの関係性が大きく転換。
- ・地域ならではの経済や文化を育む、かなり気合がいる。近江ならではの独自性、魅力をどうつくるか、そしてそれを既存の物差しでやらないのが大事
- ・滋賀県はアーティストが移住してくることが結構多い。
- ・外部の方をある程度受け入れる視座を政策的に支援する環境整備を行政的にはできるのでは。長期滞在できる場所が極端にすくない。

〈居場所〉

- ・子どもも大人も自分を認めてもらえる、生かせる場所があることが幸せ。
- ・居場所や相談場所のつくりかたも色んな形が必要だなと。
- ・「あんたの席はここやで」困っている人もいない人も含めてうれしい言葉。
- ・子どもも自分の所属できている感覚って必要なんだと。

〈交通・道路〉

- ・交通政策が大事。持続可能な地域交通のあるべき姿をきちっと考えないといけない。
- ・免許返納しても交通手段がない。高齢者の暮らし考えた時に交通機関の充実もそうだし、地域の中の繋がりや拡充が大事。
- ・歳をとってもここに居続けたいと思える交通機関、若い人もずっと先をイメージできる環境づくりが大事。
- ・自家用車に頼る社会難しくなる。公共交通機関もそうだがどう組み合わせるかが1番。バス停まで100mが行けない。地域の支え合い、IT活用、全て組み合わせた形で真剣に見直していかないと。
- ・車がなくてもある程度暮らせる仕組み、交通も含めて地域社会に人を呼び込むための重要なインフラという発想が大事。
- ・あるものを維持するのではなく、脱炭素時代において、かつ人々が健康に暮らすうえで公共交通も含めてそれを活用していく「健康しが」みたいな発想が欲しい。
- ・滋賀県で10人のうち7~8人が車利用とすれば、そのうち1人が公共交通に切り替えれば、単純計算で利用者は2倍になる。
- ・健康な人であれば歩く、自転車に乗る。特に自転車に力を入れている滋賀ではいいのかなと。
- ・計画では歩行者事故はゼロにするぐらいのことを言ってもいいのでは。
- ・今の日本では公共交通はビジネスの立て付けになっているが、(近江鉄道や交通税の議論もあり)滋賀県では公共サービスと考えるおられる。そこで走っている電車はそこにその瞬間乗っている人だけのためではない。
- ・車社会で絶対に免許返納できないところに住んでいる方も多くて、正直、町中の交通ルールが怖い。
- ・道路渋滞するから解消するというような50年言い続けたことは基本構想レベルではもう言わないみたいな切り替えがあってもいいのかな。
- ・今後の道路の有り方も人々が脱炭素社会で幸せに暮らせる道ってどうなんだろう、むしろ歩ける方がいいのではといった観点も出せるといいかな。
- ・湖西バイパスはなんとか早く2車線にと切実に思っている。
- ・道路整備はなんとかしてもらいたいなど。

〈観光〉

- ・仕事がなくなって業態替えといっても、プライドやベースもあってラジカルにかえることができる人ってそうそういない。基本に立ち返ってやり続けられることを考えてきた。
- ・色んな方が観光業に進出してきて競争は激化する一方だと思うので、だからこそ守っていかないといけないものがある。
- ・人が来ないからいい、たくさん来てしまうと興ざめというのが矛盾するところ。そのへんのバランスを絶妙にコントロールしていかないといけない。

〈労働・雇用・働き方〉

- ・県内の就職先が少ない。
- ・学生で滋賀で住みたい希望者は多いが、滋賀にある企業に就職しても滋賀で働けるかわからない。
- ・滋賀県立の高専で勉強して滋賀県で働くという流れができると大変大きな力になると思う。産業界と高専と一体の仕組みを作っていければと大きな期待。
- ・リワーク支援の施設に通いやすいことが大事。
- ・特にお母さんたちは短時間など働き方が色々。うまくマッチングして能力生かせると生き生きする。
- ・ローテックで雇用を生み出した方がいいようなこともある。地域で若者にいてもらうための戦略としてあってもいいのでは。
- ・日本の大学では就職活動が早くて4年間にきちっと学べているか気になっている。

〈産業、中小企業、ものづくり〉

- ・ものづくりも世界中の情勢を見ながら自分たちで何をやっていったらいいのか考えて仕事をしなければならない。
- ・コロナ禍で仕事が減った時に、本来やりたかった検査の自動化等に大きく舵を切ることができたという良いこともあった。
- ・ヨーロッパの戦略もあって、日本の産業界との競争を有利にするためのカーボンニュートラルの加速化の話がすごく出ていた。ただ、ビジネスをつくるためのカーボンニュートラルに動きかけていたのが、ウクライナのことで少し足元を見た実際の対応、エネルギー政策に変わってきているかと。
- ・県の直轄組織で産業支援プラザといったことをやっている都道府県はどこにもなくすばらしい。滋賀県の中小企業に対する支援制度はとても良いので継続してほしい。
- ・滋賀県には老舗のものづくりの会社や職人がたくさんおられて、技術継承や事業継承しづらい状況になっているのはすごくもったいない。

〈農林水産業〉

- ・野菜のネットショッピングを始めたが配達料金がすごく高くなっていて、こちらである程度負担しないと売れない。
- ・科学肥料や飼料などの高騰。世界情勢の不安定さもありできるだけ国内で収まっていく循環型の環境になると好ましい。有機農業の関心も高まるのでは。
- ・農業は働き方が自分で選べるところが魅力。気象条件やコロナなど、金銭的な部分の不安は大きい。
- ・琵琶湖の魚をもっとPRしてくれる場が増えて欲しい。お酒、近江牛、お茶は有名だけど湖魚はまだまだ。県のアンテナショップでの発信などは続けてほしい。
- ・ウッドショックで木材の価格高騰。山里は助かっている。これまでが安すぎた。
- ・山に来る人に、森・川・里・湖の繋がりが見えていないのかなど。そういうつながりの中で生かされているというのを感じながら遊んでほしい。もっと木材の利用が広がれば。
- ・木を切るだけが林業ではない。山や人間、山間社会とか全体的なものをとらえられるようになってから仕事で来てもらえるとよいのでは。

〈教育、ライフプラン〉

- ・学びの中で人と交流があることが大事。みずから学んで答えを導きだす、それを誰かと共同でやっていく。
- ・ズームで不登校の子どもの教育ができるならそれもありがたかなと。
- ・滋賀でワクワクすること、滋賀でどんな夢をかなえたいとか、早い段階から子どもたちが考えられるようないろんなカリキュラムがあるといいな。

- ・多様性を認める教育が子どもの頃からすごく大事。大人は古い概念をアップデートする機会があまりない。
- ・多文化のこともあるレベルまで認識してもらえる取組を、学校や生活の中でも取り組んでいけたら。
- ・自分は自然の中の一員であるということも教育の中で教えていただいて多様な教育ができる県に。
- ・フリースクールに行ける選択肢を持てる仕組みが大事。
- ・自殺対策は本当にいろいろあると思うが、教育のところで自分としても何かできれば。
- ・先生の業務量とか余裕をもってできるように変えていきたい。
- ・先生が忙しすぎる。先輩のやり方を見たいが教えてもらう時間もない。
- ・発明協会にも関わっているが、そういった勉強を滋賀県の子どもが経験できるのって結構大事。
- ・子どもが好奇心旺盛な時期に、これが好きと思う出会いの場が教育のどこかのところであって、選択肢の一つになったらいいなど。
- ・それぞれのライフプランみたいものを気軽に専門の方に相談できる場所がたくさんあるといいかな。
- ・少年、青年時代に必要なのは余裕とその余裕の時間を応用して実際の世界を見たりすること。

〈発信・広聴・自治〉

- ・滋賀には魅力がいっぱいなのに国際発信が弱い。
- ・日常的に住民が政策に関与するような場があってもいいんじゃないかな。アプリなどで日常的に一票を投じる意思表示のような。
- ・地域の人が考える課題と専門家が見てるデータにギャップがあるならそこから話ができるのでは。
- ・これまでの地縁団体がもっていた人材養成システムに代わるものってないので、いろんなセーフティネットを組んで、1つはネットにひっかかるみたいなメニューをつくっていくしかないかなと。

〈環境、エネルギー、CO₂ネットゼロ〉

- ・エネルギーなどの地域循環、生ごみ処理がポイント、湖底ごみをなくす努力を一番に。
- ・環境に配慮した県民性というところを誇りに思っている。
- ・使えるものだけで生きていく。
- ・滋賀県の取組で期待するのは環境と働きやすさ。
- ・目の前に課題がある人に将来のことまで考えた環境のことってそれほど大事じゃないのはあたり前で、長期的な課題と短期的、直接的な課題をどううまく進めていいかなと。
- ・CO₂ネットゼロ社会に向けては全部局を挙げてやっていかないと絶対に無理。
- ・コロナプラス大きかったのは脱炭素への大きな切り替え。もっと計画の全面に出てもいい。
- ・当社の溶射という技術自体があまり二酸化炭素を排出しない加工プロセス。溶射という技術でお手伝いをする営業をして役立ちたい。
- ・滋賀は木材をつくることもできるので先進的にやっていける素地がある。地域資源だけで暮らすためにはどうするかと実験でも何でもいいのでやったほうがいい。
- ・バスでの健診巡回を蓄電池搭載のバスにシフトしたり、CO₂フリーの電力に切り替えていったり。

〈防災〉

- ・防災もかなり変わってきて、今までのような全員が避難所に行く防災活動はあまり意味がない。他の政策分野に防災をもっと埋め込まないと発災当日だけの防災になってしまう。
- ・いろんなことに含めて安全、安心、人権が守られるように。そういう意味で防災をいろんな分野にちりばめていく。

〈協働〉

- ・協働のところでは民間に頼りすぎなところも。指定管理では、老朽化している施設なのに20年間同じ仕様書だったりほころびが出ている。民間に出すことに対してもう少し丁寧にやらないと怖い。

〈人権・多様性・共生・SDGs〉

- ・多様な性だけでなく、生き方についても一人一人認めていける議論が大事。
- ・いろんな選択肢が増えた分、責任も問われていく難しさがある。
- ・偏見で見ていると支援は広がらない。
- ・必ずしも女性が残りの女性の意見を代弁するわけではない。いろんな人がいるので母数を増やすことは重要。

- ・それぞれの外国籍を持っている方のコミュニティのヘッドと行政の方が連絡、繋がりを持ってもらえればやりやすいかなど。
- ・共生・共存ってすごく難しくお互いに譲歩する大前提のうえで共存するしかない。滋賀県の三方よしが生きてくるのでは。
- ・ジェンダー平等は必ず実現しないとイケないと思っている。
- ・ジェンダー平等やハラスメントのない社会は、平和がベースで人権がちゃんと保障されているという大切さがある。特に子どもの人権、国連で言っているが日本ではちゃんと受け止めていないところがある。
- ・ひきこもりの状態を抜けてしゃべりに来てくれるようになったところで就職の話をするとうまく来なくなったということが。1人1人終着点が違う。
- ・SDGs = 環境、SDGs = 美しいみたいな感じで捉えられることが多いが実際はそんなものではない。取り残されたグループの人をSDGsという概念や目標を使うことで少しでも生きやすい状態に持っていけるかどうか重要。
- ・お菓子をつくり提供する原材料の調達から最終お客様の手元に届くまでとなるとまだまだ課題がある。上流下流含めたいろんな意味で、私たちの商品があらゆるタイミングでネガティブなことがないか見極めながら改善していくことが必要。それはSDGsと合わせて考えているが、もっと深いところでやっていかないと。

〈DX〉

- ・DX化は誰のためにするか、何のためにするか、どこまで使うかが施策として重要。
- ・DXにはデメリットもある。あわせて議論できるとよいのかも。
- ・DXには2軸あって、縦軸が均質化、横軸が多様性の確保。それぞれの施策がどちらを狙っているかを認識するのが大事。
- ・教育分野でのDXはすごく影響が大きい話。ボディブローのように効いてくる。
- ・専門家育成はまだまだ足りない。高専で情報分野を強く取り入れる話は大賛成。
- ・デジタルデバイドの問題は大きい。ICTの環境の格差も出てくる。
- ・DXは非常に大きな変化だが、DXがどう生きるか、DX化が目的でないことを肝に銘じなければいけない。

〈人材確保・育成〉

- ・林業の仕事が危ない・きついというのものもあるが、体制がすごく古いというのものもある。教える側の技術や意識も課題。
- ・水産業のような現場仕事は好まれなくて人がなかなか来ない。
- ・中小企業にとって人材育成は最大のテーマ。企業の将来が決まる。

〈滋賀の幸せ、滋賀の強み〉

- ・自分らしく、自分らしい幸せ、働くを通しての取組できるといい。
- ・安心安全というベースに、ワクワクできれば。
- ・滋賀のように自然環境と文化、歴史が密接につながっている地域ってなかなかない。
- ・滋賀の最大の魅力はそれぞれの地域に根付いた文化であり自然資本。
- ・地域自体がありえないぐらい貴重な場所。特に湖西は山紫水明の地。
- ・生活の余裕をもたらしてくれるのが滋賀の一番の魅力。
- ・琵琶湖があるからこそその政治姿勢、環境への考え方など本当に意識が高い。
- ・とにかく人がすごくいい。それが滋賀県に住める最大の幸せ。
- ・顔も知らない誰かの行為、これが集まる、それを届ける、このことでまた「ありがとう」と声を出してくれる方がいて、このコロナ禍でも滋賀の中では連綿と続いていた。
- ・いろんな地域から来る人たちがうまく受け入れてくれるやさしさを滋賀の方々は持っている。
- ・滋賀は生活面で欠けているものがない、すべて整っている。
- ・ちょうどいい塩梅の土地、いい意味でのおせっかいな地域の人たちや、昔からの伝統や行事、そういう風土は大切にしていきたい。

- ・おいしいもの、新鮮なものが近くにあってそれを持って帰って食べて家でも幸せに暮らせるようなところ。
- ・琵琶湖との付き合いをずっとしてきた滋賀県民には、煩わしさの中の調和みたいなものを体得されている方が多いと思う。
- ・柔軟に外の知恵も受け入れてやるのが滋賀のいいところ。

〈KPIの設定や評価〉

- ・経済の政策のKPIに何かしら人権に関するものがあるんじゃないかな。技能実習制度のことなどもある。
- ・達成度がAでないとダメみたいな呪縛があるような気がする。Aでなければなぜだと詰め寄る進行ではなく、ある意味Bが当たり前で出来すぎているとなぜどうなのかを丁寧に聞き取る進行管理がないとうまく回らないのでは。できていないところの尻たたきではなく、うまくいく調整が進行管理だという文化ができれば、個別計画にもいい影響があるのでは。
- ・メソ（中間）の計画というのは年度の目標が段階的に上がっていくわけではない。そこを加味して目標設定や進行管理ができているのかなど。

〈全体、その他〉

- ・人間だけでなく、自然を敬う人を愛する、他国の人も同じように地球の中で生きていることを思う。
- ・シビックプライドみたいなものが伝播していない年代がある。高度経済成長の中で生きてきて価値観が固定化している。
- ・コロナは非常に大きなインパクトあったが、（計画策定の際に）あまりその話振られすぎない方がいい。
- ・コロナの議論の疎・密と地域の疎・密の話は一緒にすると少し乱暴。
- ・自分らしい生き方って少し注意して使わないと自分で変わるチャンスを奪ってしまいかねないなど最近思う。自分の将来を描ける十分な情報提供、熟議がないと。自分らしいって決める際の決定の仕方が心配。
- ・自助・共助・公助のバランスががたがたになっている。単身世帯がこれほど増えるとはたぶん想定されていなかった。世帯単位で組み立ててきた施策を個人の対応に戻していかないといけない。
- ・公務員の遊びがあんまりなくなったのでは。ユニークな公務員の方っていろいろ顔を出されてネットワークを広げていくけど、そういうことができなくなっている。
- ・学生が見ている先は20代、30代ぐらいまでで未来を見ていない感じがある。長い人生どう生きていくかというところが描けていない人が多いかなど。我々がもっと話をしてやらないと思う。
- ・多種職によるネットワークが必要。1つの機関でできることが限られている。よく「連携してやろう」「情報共有しました」「また何かあれば」みたいなこれは連携とは言わない。タッグを組めてこそ連携。
- ・心理士として傾聴だけではだめだなど。傾聴して元気出たとなっても基本的なところが変わっていなければどこかでまた心が傷む。いろんなところを力を合わせてほしい。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（辻委員、山川委員）

○ヒアリング日程 2022年5月23日（月）10時00分～11時15分 ZOOM

○委員 辻 博子さん（公募委員）、山川 響さん（公募委員）

○ヒアリング概要

1. 現状について

（辻委員）

・滋賀ローカルSDGs研究会（SL2）での活動は、人との交流が基本だったが、コロナで完全にオンラインになって、去年1年間で20回近くオンラインでの活動をした。参加しやすくなって便利ではあるが、対面でない~~と~~得られない交流もあるので、最近は出会いの場を作るようにしている。

（山川委員）

・生まれも育ちも滋賀県。東近江市に住んでいて今大学は京都。実家から通っている。大学に入ったのが2020年。入って1年半ぐらいがオンライン授業で大学に通えなかった。精神的にしんどい部分があって、人との直接の交流がなくて、環境も変わって、新しい友だちもできない状況。

・コロナ禍で一番思ったのは、やっぱり対面で人とコミュニケーションをとる機会がすごい大事で、いろんな活動が制限されるなかで、娯楽活動というか、文化活動というか、現実から気持ちを少し安らげるような活動が当たり前にあったことが、すごい大事だったんだということを実感した。

2. 今後必要だと思うことについて

（辻委員）

・学びの中で人との交流があるってすごく大事。一方的に教わるのではなくて、みずから学んだり、みずから考えて答えを導き出す、それを誰かと共同でやっていく。共創力って私たちは言っているが、一緒に作り上げたり、誰かを巻き込んだり、協力者を募ったりっていう力を見つけるっていうことが、生きていく上ですごく大事。

・最近プラごみをなくすという活動から「マイクロプラスチックストーリー」という映画に出会って。プラスチックごみ問題の大変さとかがわかりやすく説明されてるだけでなく、小学生がみずからそれをどうやって解決しようと考えて行動していく様が素晴らしかった。海岸でごみの様子を調べたり、実験したり、メーカーと対峙して質問したり。議員さんに対して子どもたちが意見を言いにいたり。それを子どもたちの行動によって進めていって、ニューヨークのプラスチック容器包装を禁止するっていう条例の策定まで持っていく。そういう子どもたちがみずから考えたり議論したりする場を大人たちが作ってあげるのはとても大事だなと思った。これは同時に若者たちがもっと政治に参加していくってということにも関係してくると思う。

（山川委員）

・学校の文化的な行事とかもそうだが、同様にコロナ禍では地域の中でお祭りとか文化祭とか、そういう行事も結構中止になった。でもそれって今だからこそどんどんサポートしてやっていくべきなんじゃないかなって。みんなが集まって交流してコミュニティやコミュニケーションが生まれてるんで、今だからこそ、繋がりをもう1回手繰り寄せるイベントとか行事って大事だなと。

・それから、今住んでいるところは最寄り駅まで車で30分かかる。実家も車がないと不便なところで、祖父が免許返納したは良いけど交通手段がない。だから高齢者の方とかを考えた時に交通手段がなくなると、行動圏が狭くなるんで、行動圏内であるその地域の中の繋がりを拡充というか、しっかりサポートしてあげることって大事だなと思った。コロナ禍とは関係なくても高齢者の方の生活を考えたときに、本当に動かなかつたらやることないって考えたら、人生それで充実してるのかなあ、最後の時になって疑問に思ったりする。

（辻委員）

・（基本構想を見て）気になったのは、基本構想の中にはCO₂の削減とか、エネルギー問題は全然うたわれてないのかなって。やっぱり滋賀県民として何を誇りに思うかって、滋賀県はとても自然が豊かで、環境に配慮している県民性っていうところを誇りに思って生きている人が多くあって欲しいと思うし、滋賀県の企業はどの企業も環境に配慮していて、そういう企業じゃないとここでは事業をやっていけないっていうイメージが定着して、だから滋賀に住みたい、滋賀に住んだら安全安心で、何を食べても安心で、水も空気もきれいみたいな、そういう滋賀であって欲しい。

・自然環境と共生した人間社会があるというところが基盤になっていて欲しいなど。その上で、CO₂ネ

ットゼロは、ネットゼロ推進課以外の部局の方はほんまに考えているのかなって思うので、本当に達成するんだったら、全部局を挙げてやっていかないと絶対に無理だと思うので、そのあたりは県庁の中で、しっかり議論していただきたいなど。

- ・再生可能エネルギーに切り換えていくという大きなこともあるが、例えば材木屋さんごとで廃材を使ったエネルギーの供給拠点を作っていきけるんじゃないかなと。簡単ではないのはわかるが、そこからペレットを作って、ペレットストーブの燃料を供給していくとか、天然の廃材が出る場所から、うまくエネルギーに転換できるような仕組みがもしできたらいいなと思う。
- ・省エネを進める意味では生ごみ処理がすごく大きなポイントになる。家庭から出るごみを自分の家で処理できて分解できれば、ごみを収集するエネルギーと、燃やすエネルギーが大幅に削減できてごみも減って使うエネルギーも減って、もう一石何鳥にもなる。
- ・琵琶湖の湖底に75%のプラスチックごみだったという事実が、赤野井湾だけのことかもしれないが見えていて、またオランダの研究で、22人中17人の血液の中にマイクロプラスチックが存在していることがわかったという結果が出ていた。琵琶湖の水を飲んでいる私たちからしたら、一刻も早く増やさない努力、なくしていく努力、湖底のごみをなくしていく努力を一番しないといけない。
- ・亀岡市では、もうレジ袋が禁止されたがやればできるんだなど。やれば事業者の皆様もついてきてるので、日本を代表する環境先進県であって欲しい滋賀県でも、そういうことを行って欲しいなど。
- ・レジ袋だけではなくて、滋賀県では5年後にプラスチック製の使い捨ての容器包装は禁止しますと打ち出すぐらいの先進性を持って、事業者の方に少しずつ減らしていく努力、消費者もそれを理解して、それが当たり前だと思う世の中を作っていくっていうのが大事と思う。
- ・CO₂のことは、あんまり締め付けると事業者からも反発を受けるし、出て行かれちゃったら困るっていうのもあるし難しいだろうなどは思う。県民も面倒くさいことや、お金がかかることはしたくないと思うので、CO₂を減らしていくこと、できるだけごみを出さない暮らしをしていくことが長い目で見てとっても得でかっことだと示していくことが大事かなと。

(山川委員)

- ・滋賀県について学ぶ授業みたいなのが、小学校、中学校であって、滋賀県って環境頑張ってきた歴史あるんだと子どもながらに思った記憶があって、今SDGsっていうのもあるが、使い捨て容器をなくすとか、レジ袋減らすとか、廃材を何か有効活用してメインにするとか、環境面での取組ってやっぱり子どもたちの世代から意識させていく方が、長い目で見れば大事かなって。地域についての教育の中にそういう観点でそれが当たり前という意識付けをする取組はもっとしてもいいかなと。
- ・やっぱり車は生活必需品でいかに安く乗るかって感覚的にはそうなるんで、例えばCO₂排出の少ない電気自動車とかに、特別に支援があるということをもっと大々的にサポートや宣伝があると意識改革につながっていくかなと。
- ・滋賀県が誇るべきものとして、やっぱり美しい自然環境があっていいなってすごく思うが、私たちの世代、そこから就職するとなると、結構都市部に流れるというのがある。滋賀県を持続させて発展させていくためには、そこからまた戻ってきてもらうっていうのが大事。戻ってきてもらうためには、やっぱり滋賀県こういう魅力あったとわかってたら、例えば結婚して子ども生まれて、住みやすかったから戻ってくるかなと。戻ってきてもらうための、子ども世代とか、若者世代向けのアプローチっていうのは結構重要なポイントになるんじゃないかな。

3. 滋賀に暮らす・関わる「幸せ」

(山川委員)

- ・やっぱり滋賀ってすごい静かで、ほんまに落ち着く、やっぱりふるさとと思ってて。自然の豊かさっていうか、心の豊かさにすごい繋がってるなど。地元が好きだからそのへん散歩してても、犬の散歩してる人に挨拶したら返してくれたり、そういう小さい地元同士の繋がりがっていうのも、あったかいなってすごく感じていて、滋賀に来たらこういうのがあるよ、だから幸せだよってそういうのではないけど、素朴なあたたかさっていう幸せはすごい感じる。

(辻委員)

- ・やっぱり「美しい琵琶湖とともにある幸せ」、表現するとそんな感じかな。それと人の幸せって何かと考えたときには、自分を認めてもらえる、生かせる場所があることかなと。子どもも大人も、自分のことをちゃんと評価してもらえたり、思ったことを咎められずに遠慮せずに発言できたり、それを誰かに認めてもらえたり、そんな場所が誰にもあることが幸せかなと思う。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（谷口委員）

○ヒアリング日程 2022年5月25日（水）10時00分～11時30分 ZOOM
○委員 谷口 郁美さん（滋賀県社会福祉協議会 事務局長）

○ヒアリング議事

1. 現状について/2. 今後必要と思うこと など

- ・別のところでお話した内容が今日のご質問に合うので、その時の資料を使ってお話しする。
- ・2020年2月28日、学校の一斉臨時休校から様々な社会活動が止まっていった中で、私たちの身の回りで何がどう変わったか。自分たちの活動も、地域で集まりやサークル活動されてた方、居場所作っている方、市民活動をされている方、学校に行けなくなった子どもさんの日常、ICT活用してオンライン学習やろうと学校でなったけど、家にそんな道具がないとか、iPadが支給されていても環境がないっていうこともあった。子どもに付き添って教えられる人がいないとか、子どもが家にいるから仕事を休業せざるを得なくなった。日給月給なので、給料が減るとか、そういうお話が私たちのところに届いてきたけれど、なかなかそのこと自体は共有しづらいことだったなと思った。
- ・高齢者世帯さんが、なかなか出かけにくくなり、人が訪ねてこなくなりどんな暮らしになっていたのだろう。体とか、誰とも話してないから、口がからからになって、人間の体って人と話さないと言わなくなる。
- ・絶対に仕事に行かないあかん、エッセンシャルワーカーって呼ばれるようになったけど、そんな中で、ご自身の体のこと家庭のこと、職場の中で初期の頃は偏見とか。みんな無知だったから。
- ・障害のある人と家族さんの当事者同士の集まりとか、子どもがでて行ける場所、親御さん同士が話せる場所があった中で、1年間何もできなくなった。「ふくし」っていうのをわかりやすく伝えるときに、「普段の暮らしの幸せ」のある日常って言うが、少し振り返ってみようと。やっぱり「さみしかったな」とか、「繋がりがこれで切れるって思った」っていうことと、やっぱり見えないところで、本当に生活の困窮が迫ってきてる、その真ただ中にいらっしゃる方があったと。子どもが家にいるために給食ないから食費がかかると。子どもの世話で仕事にいけない、給料は減る、そういう悪循環の中にいらっしゃって。でも辛抱せなあかんとか、どうしてももらったらいいだろうって思ってたって。
- ・その中で、県の社協が実施主体で、市町の社協が受け付けの相談窓口をしてくださってる、今も続いているが、特例貸付を通して、生の声をお聞きしたり、実際の数字上で滋賀の生活困窮の実態っていうのは、部分ではあるが見ていた。最初20万借りられるのが緊急小口っていう貸付。そのあとまだ生活にお困りの場合は、最大20万3ヶ月借りることができる総合支援資金。緊急小口も借り、総合支援資金も借りるっていうのは、どの方もほぼ連続しているので、実で言ったら2万世帯近い方たちが、この資金の貸し付けを利用されていて、30世帯に1軒ぐらいが貸し付けを利用されてることになる。(全国で)一兆何千億だから、滋賀県は100分の1県と言われる中では、貸し付けの件数の割合とか金額は高い状況になっている。
- ・普段は月収40万とか50万あるけれども、コロナの影響で一気に減ったという方から、平時でも20万ちょっとぐらいで休業で3万減った、食費を工夫せなあかんとか、子どもの習い事を辞めさせないかんとか、そんなお話が実際にやっぱり出てきていた。
- ・この中で、私たちは調査をして、明らかにひとり親世帯さんの平均月収は、コロナの影響を受ける前から低かったということが数字上も明らかになってきたし、リーマンショックの時は単身世帯の30代40代50代の方に影響が大きかったが、今回は家族のいる世帯の影響、申し込みが割合的にかなり増えていると、多くの世帯が痛みを本当に感じ継続されていると思った。
- ・ひとり親世帯の方の言葉、「もう働きに出ることができなくなった、でも給料は手渡しで明細書がない。何か証明するものはって言われても、何もないです」っていうこととか、明らかに食費が増えたとか、60代70代80代のご夫婦とかの申し込みも中にはあって、少ない年金プラスアルバ

イトで何とか生活してたがアルバイトがなくなるとか書かれていると、そこまで生きてこられて、社会の中で様々に貢献してこられて、一番最後のご自身らの楽しみの、ゆったりした人生の終わりのところで、こんな苦しい思いをされなあかんのかっていう辛さはつくづくと感じた。

- ・当初は経済みんな縮小して、日本全体が様々な業種影響を受けて、大変だったけど、そのうち戻って行って、繁栄してるところはとても繁栄している。だけどしんどいところはずっとそのまま。普段からの繋がりを作るのが苦手だった人、そういうことを避けて生活をしないといけなかった人たち、自分のことはあまり見せたくなかった方たちもあって、余計にそのことで、繋がり格差が拡大したんじゃないかと。
- ・その中で、忘れたらいけないっていうことは、「繋がりのかげ橋」を架けていく、私たちにできることをしていこうということ。県の方からお声掛けいただき、女性の繋がりサポート事業を実施。今年も取り組んでいるが、とても難しかった。生理の貧困っていうところから孤立してる方いるのではということ、生理用品をお渡しすること、支援につなげていこうとしたけど、人の生きづらさは見えにくいし、困っていてもすぐに相談されない方もいる。そういう中で、少しでもほっこりできる居場所、来ていただける場所をつくって、ご自身の困りごと、家族の問題も含めてお話していただけるようにしようということ、子ども食堂をやっている活動の方とか、保育園の方とかと一緒にやってきた。
- ・その時にわかったことは、誰でも決めつけられたくない。この人は困ってるとか困ってないとか、困り具合が深刻やとか、そんなことは周りが決めつけたらあかんということ。だからこそ、自分に合ったところ、いろんな居場所があっていいし、居場所も相談場所のつくり方っていうのも、いろんな形が必要だなとつくづく感じました。
- ・新しい子ども食堂の取組が始まってきて、160ヶ所ぐらいになっている。居場所のつくり方とか、相談っていうか、ちょっとしたサポートの仕方とか、個別で支えの必要な人たちへの関わりとか、そういうことって、子ども食堂の方たちとか、保育園の園長さんとか、保育士さんの話に学んだり感じるところがすごい大きかった。要は何が大事かって、あったかいごはんが大事というのは、子ども食堂だからそうなんだけど、「あたたかいまなざし」とか「潤い」っていうのは、通じ合える共通のものだなって。
- ・子ども食堂のこと、コロナ禍でのことをお伝えしておく、学校一斉休校になったときに、全国的には今こそ子ども食堂が活動しないとということがネット上から出てきた。でも県内の子ども食堂さんは地域密着だし、ボランティアグループさんも高齢の方が多かったですり、実際活動もできなくなっていた。なので無理はせんとしましよと、最初休止を私たちも呼びかけていた。でも自分なりにできることっていうのを考えていきたいというのはすごく思ってくれて、そこから滋賀の県民の方の力ってすごくて、声掛け式とか少人数とか外遊びだけとか、広場でとか、一列になってとか、いろんなことを考えて復活をしていってください。
- ・県内の企業の社長さんとか、篤志家の方が3,000万くださって、今子どもたちにすぐ届けたいと言ってくださったときには、特例貸付を借りている中学校に進学した子どもに10万円ずつお送りした。これでジャージが買えた、部活の道具が買えた、自転車を買えたっていうふうに、実際にありがたかったっていう声もお聞きした。顔も知らない誰かの行為、これが集まる、そして私たちも届けさせてもらえる、このことでまた「ありがとう」って本当に声を出してくださる方たちっていうのが、やっぱりこのコロナ禍でも滋賀の中ではずっと連綿と続いてきたっていうことを、これは得たものとして大事にしていきたいと思っている。
- ・もう一つ、健康福祉政策課さんとともにさせてもらった「子ども若者ケアラー調査」を通して見えてきたこと。やっぱり学校が一番子どもたちのヤングケアラーと言われる状況も把握されていた。中学校、高校は6割を超える学校がヤングケアラーの子どもたちがいるということだった。家庭の中で親御さんが病気になるってたり、障害がおありだったり、精神障害のある親御さんの例もわりと多いと思いますが、小さい子どもの保育園の送り迎えとかご飯の用意とか、次の日の支度とか、服のこととか、そういったことを中学生がしている。私の役割だと思ってるっていうところを、知っておかないといけないと調査の結果からも思った。ただ、学校の先生方も家

庭のことを語らない児童生徒が多いので、家庭の状況からヤングケアラーかなあと思うけれども、本人の気持ちとかは見えにくい。自分が決めつけていいのだろうか。この子はケアラーだと。困ってる子やっていうふうに決めつけていいんやろうか。ちゃんと家庭の応援が入っていれば、また違う形、違う状況もあると思いつつも、家庭に入り込めない。だから、子ども若者ケアラーの問題に関心を持たなあかんっていうのは、やっぱり子どもに関わるすべての相談機関も、近くの方たちも気にかけていくっていうことから取り組みをしていく必要があると思った。

- ・ 保育園の先生が気づいたケアラーの子どもがいて、保育園に中2の兄ちゃんが子どもを迎えに来ると、かなり気になってた。表情が暗いし、保育園の子どものかばんが汚れてたので、家の中がどうなってるんかなって。そしたらあるとき、中2の兄ちゃんの学校の先生が情報をくださって、先生に出す連絡ノートに「僕の人生は真っ黒です」って書いて出した。少ない人数の関係者で事情を聞いたら、40代のお母さんが脳梗塞で家事とか全くできない、看護が必要な状況になっていた。お父さんは大きな会社に勤めていて、収入の面では万全だけど、お父さんは、ごはん作ったりとか、いろんな用意したりするのは気が回らない。毎晩お惣菜を買ってくる。お父さんも、そのことをそんな困ってるなんて思わなくて。子どもたちは習い事もスポ小とか、塾も、全部送り迎えはお母さんがしていたから行けなくなって、もう家だけの生活になった。小さい子の世話はお兄ちゃんたちがする中で、「人生真っ黒や」と。その気持ちを誰か上手に聞いてあげたり、発散できるような場所、誰がどういうふうに作ったらええやろなと保育園の先生も思われて、少し子ども食堂とか、情報を得られて子どもの対応を考えようっていう、急ごしらえの支援検討会みたいなことをやってくださったことが印象的だった。
- ・ 「ひたすらなるつながり」っていうのは滋賀県社協が理念としている言葉。糸賀一雄さんが、昭和38年に「ひたすらなるつながりの社会を作っていきたい」とおっしゃった言葉をいただいて、県社協の理念にしている。人が人を本当に理解しあえる人間的共感っていうことを表している。橋をかけていく、橋を持ってない人とか、橋が架かってない人とか、そこに橋を架けていくっていうのは、周りの人たち、社会の側とか、どの人もそんなふうな気持ちで行動できるんじゃないか、そんな気持ちはどこかに持ってるんじゃないかなっていうふうに思う。
- ・ 誰でも、「よう来てくれたね」「待ってたで」「あんたの席はここやで」とか、「久しぶりやね」っていうふうに声かけてもらえるって、別に困ってる人も困ってない人も含めてうれしい言葉だと思う。自分は地域の中にいるとか、自分はこうして自分のことを仲良く思ってくれる人がいるとか、声かけてくれる人がいるとか、そんな居場所もだし、小さくでもつくっていく、それを楽しみながらつくっていくっていうことが、これからの滋賀の中で、大事にしていきたい方向性と思う。人を傷つけない失敗は何度もやり直していいし、このことが人を傷つけへんかっていうことは常に耳を済まして声をキャッチしながら考えるっていうのが大事だなと思う。
- ・ 「福祉のできごとから地域のできごと」というのはいつも感じることで、私、社会福祉協議会の職員なので、福祉の関係者やって思っておられると思うけど、福祉って、福祉やなあととか、福祉のお世話になるとか、この人は福祉で何とかしてもらおうとか、私たち自身が狭い福祉のところではしか発信しなかったら、いつまでたっても、普通の暮らしをしている中で生きづらさを抱えていたりとか、見えないところで、困りごととか格差とか感じてる人たちも含めて、繋がりを本当は求めてる人たちも含めて、福祉のできごとにしていたら、滋賀の中で、このひたすらなるつながりは実現できないというふうに思っていて、地域のできごとにしていける、していきたいと思う。
- ・ ボランティアの活動の方たちも本当に責任持ってやっておられるということと、ボランティアな方たちの自主性を大事にしながら、でもそれが継続していくようにサポートしていく、サポートの仕方っていうのは随分専門性の必要なことだなと思う。
- ・ 心って、みんな思っているだけで、やっぱり共有しなかったら伝わらない。皆それぞれが持っているだけでは、それをコロナ禍で「何とかせなあかん」と思われたから、あえて言葉にこだわって、書いたものにしたとか、話し合っ、県内の子ども食堂と出し合っ、確かめ合ったりとか、そういうことはこれから先に繋がる大事なものを形としてつくってくださった。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（岡本委員）

○ヒアリング日程 2022年5月25日（水）15時30分～16時30分 ZOOM
○委員 岡本 直輝さん（立命館大学スポーツ健康科学部 教授）

○ヒアリング概要

1. 現状について

- ・大学の場合は、コロナ感染の危機感は、以前はものすごくあって、ピリピリした状況で過ごしていたが、この4月以降、学生・教職員はコロナウイルスとの共存みたいな雰囲気ができてるかなと。今は対面授業を基本として、課外活動も各自が感染に注意して取り組む指導にかなり変わっていて。感染した場合、各地で大学のルールに従って対応。感染した人はオンライン参加を認めるとか、かなりルールが変更しているところ。例えば学生が私に相談があって予定が合わない場合、ZOOMで夜中にやろうとか。違う言い方すれば私たちの働き方の幅が非常に広がってきている。
- ・ただ学生たちは、授業や面談をオンラインで行うことについては少し否定的なところもある。やっぱり対面授業の方が情報を得やすい、仲間のサポートを受けやすいとナマで感じている。
- ・ICTをうまく利用しながら学びの成果を発表するというケースがかなり出始めている。運動部の試合を解説付きでネット配信するとか。学生は対応が早いと思う。私はスポーツ健康の専門だが、スポーツの「する」「観る」「支える」「情報発信する」というところの「観る」ということについて、かなり変化している。
- ・医療機関等に関わる方々に対する敬意が急に薄れ始めたと感じる。いまだに医療機関にお勤めの方々はご苦労されているが、これに対しての敬意や報道がほとんどないと思う。
- ・行政の方々含め、特に交通関係企業に勤めてる方はボーナス全額カット等、収入が減少している。交通関係の企業は収支バランスを合わせるために、ダイヤの変更やバスの輸送量減らすとなると、住民からクレームが出て、じゃあどこで帳じり合わせるかという、働いてる者の収入を減少せざるを得ない、こんなところがダブルで報道されていないことにちょっと違和感を感じるなど。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・情報化、ICTの発展で生活システムの対応が今後変わってくると思う。人が新たなシステムに合わせた生活様式を行っているように思っちょっと難儀。人の作ったプログラムに自分の生活を合わせていかざるを得ないような生き方、生活の仕方、1人1人のオリジナリティの生き方っていうのが苦しくなってくる、生活しづらくなってくるような時代に来るのかなと。だからある程度のところで止めて、あとは自分でするよっていうのがあってもいいかなと。
- ・滋賀県で今後絶対必要になる、大事だと思うことはまず交通政策。特にバス整備、メイン道路の上をバスが走るような仕組みによって、渋滞はある程度緩和するのではと。あとJRの減便や廃線議論というのがあがるが、ここは何かもしやるなら滋賀県の新たな手法みたいな、滋賀県ならではの上下分離方式というのでも検討すべきだろうなど。持続可能な地域交通のあるべき姿をきちっと考えないといけないなど。例えば甲賀市から大津や京都に行く方法は、草津に行かないといけないが、大津とか京都へのバス輸送があれば甲賀市はもっと発展するのではと。
- ・各地域の自治会のあり方。今後は高齢者が高齢者を支えるっていう世界になるが、この環境から脱却することは絶対必要。自治会の新たな仕組みづくり、あり方も議論すべきだろうと思う。滋賀モデルっていうのを作ってもいいかなと思います。
- ・健康増進のところでは、一番大事なことは絶対寝たきりにならないことだと、それぐらいのことを言い続けてもいいんじゃないかなと。今、民間フィットネスがいろいろ出てきているが、これを滋賀県ではあえて二極化させてもいいかなと。従来型の呼び込み型フィットネスと行政の方から委託をして高齢者を対象とする出張型フィットネス。
- ・コロナ禍で在宅勤務が増えてきた時に、家の中でトレーニングするサイトを観る人たちが増えてきたと言われている。ただ、淋しいものなので続かない。やはり従来型の体の動かし方をいかに

制度化していくかが大事で、民間フィットネスをうまく利用していくべきだろうと思う。今は競争させているが、たとえば管理、滋賀県で営業するフィットネスは、これだけはやってくださいといった条件みたいなものを紐づけておくことが必要になるかなど。フィットネス営業してる拠点のエリアの人口の何%を扱ってるといった報告をさせることによって、民間フィットネスの影響力がわかってくるかと思う。そのデータを集めて、もう少しこの層を増やしてとか、ある程度、補助金を付ける形でもいいと思うが、紐づけ課題を与えることが非常に大事なのかなど。高齢者は、青年とか成人と一緒に扱わないほうがいいのかと思う。例えば体育館をどこかのフィットネスに管理委託したりしているが、やるんだったら民間フィットネスがやったことがないことをやってというぐらいの課題を出してもいいんじゃないかと。

- ・滋賀県には魅力がいっぱいあるが、国際発信が弱いなど。その中で食の発信というのは輸出にもすごくプラスになるので主軸として国際発信をもっとしたら、税金があるんじゃないかなど。滋賀県はおいしいお酒があって、お酒屋さん独自のいろんな取組をされている。ヨーロッパの方々に好まれるようなお酒づくりをやっておられるので海外から見てくれるのではと思っている。例えば小学校の廃校舎を利用して、高級レストランと宿泊をセットにしてまちづくりみたいな。フランスあたりは、別に遊園地がなくても、食の文化があれば、そこに皆集まってくると言われている。日本の場合は、レストランとホテルと遊園地を併設しなければならないと思われるようだが、海外から人を集めるのは別にセットでなくてもいい。
- ・滋賀県はアートという世界でもっと取り組んでもいいかなど。例えば甲賀市を手裏剣のまちみたいに、いろんなところにいろんな手裏剣があるとか。また草津市は東海道と中山道が合体するところで、de 愛のまちと言っているが、愛ってキーワードを作って、いろんなアートをつくれればカップルが来るだろうとか。長浜の子ども歌舞伎とかはすごいもんだと思う。こういったものをもっともっとメッセージを出していけばいいかなどと思う。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・滋賀は非常にやさしい人が多いので、自然を大切に作る心の醸成というのは、そういう心の教育っていうのができてるんだろうなと。そんなところが滋賀はもっともっと自信を持って言えばいいんだと。いいなあと思うのは、「流れ者」という言葉。これ悪い言葉だとは思いますが、いろんな地域から来る人たちがうまく受け入れてくれるやさしさを滋賀の方々はお持ちだろうとを感じる。それは逆に滋賀の人たちは、行商含めて、全国に散らばってまた帰ってくるという文化をお持ちなので「流れ者」も一緒に住もうやっという、こんな風土があるんだなと感じます。
- ・滋賀は、生活面で欠けているものがない、すべて整っていると思う。2~3時間あれば滋賀一周できる小さい県ではあるが欠けているものがないと感じる。
- ・続いて、歴史文化がものすごくある、掘り出せばまだまだ出てくる町だなと。歴史文化にうまく自然が調和している。例えば湖東三山、お寺のありようを含めて見るだけでなく、そこにある自然を、お庭を見ると、ものすごく楽しめる。
- ・南部だけかもしれないが、病院はすごく充実してる。医療制度はかなり進んでるんじゃないかなと。また病院間の連携が進んでいるように思う。私は京都の南の方に住んでるが数段違う。

4. その他の質問

Q. スポーツ健康科学部の方が選択する職業に傾向などはあるか。

A. 多種多様。スポーツ健康は、企業さんにとってCSR含めて取り組んでいるので、見てきてごらんといったり。スポーツ健康科学で勉強したから、この会社では働けないというのはなくて、逆にここでもっと活躍できるという言い方をしていくと、大手商社、専門商社、金融だとかマスコミなどにもどんどん行っている。逆にちょっと偏ってる学部から比べたら、かなり広いなという就職の仕方。去年の卒業生で設計屋さんに行った者もいる。営業の仕事をしているが、営業と技術者さんの橋渡しをするが、お客さんとのやりとりで「健康」キーワードがかなり出てきたり、あるいはスポーツ関連の知識がないと、設計屋さんにお客さんの要求が言えないとか。意外

とこんな世界でもパイプの役割として働けるんだって僕らにも逆に見えてきた。

Q. 地元での就職を希望される学生はいるか。

A. 希望者は多い。滋賀で住みたいって思ってる人は多いが会社が少ない。滋賀にある企業に就職しても滋賀で働けるかわからない。巨大企業に行くより、このぐらいの規模の会社で働く方が将来的には大きくなるよっていう、夢を見させるような仕組みが、なかなか我々や学生の方に伝わってこないところがある。実際、理工系は、中小でもいい企業さんがいっぱいある。ここが文系採用するかどうかって、そういう情報はない。だから理系の方は、かなりそのへんの情報は持っているが、文系から見れば、経済とか、食マネジメントとかスポーツ健康も含めて、活躍できる会社って非常に限られてくるみたいな感じがある。

Q. ずっと学生を見てこられて、最近の世代の価値観などの傾向は何かあるか。

A. 彼らが見てる先は、大体、20代後半か30歳ぐらいまでで未来を見ていないんじゃないかというのが共通してると。長い人生どう生きていくかっていうところの夢物語も含めて描けていない者が多いといところがある。そこに対してはもっともっと我々が話をしてやらないと、我々の責任かなど。ただ、真面目に就活はしている。一生懸命やってつぶれちゃってというケースが多々ある。例えばですね、4,5年前のHondaの採用コマーシャルは、「あなたは社会のためにどう働きますか」と問いかけをしている。我々は社会で生きている。だから社会のためにどう働くかという、そういう質問をしている。Hondaでどう働きますかというのはいない。この質問はなかなかすぐ答えることができる者はいない。でも非常に大事な質問だなと。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（甲斐委員）

○ヒアリング日程

2022年6月1日（水）14時00分～14時50分 ZOOM

○委員

甲斐 一範さん（公募委員）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・介護の仕事をしていて、コロナになって一番変わったのは感染症対策の業務が明らかに増えたこと。最初はマスク着用と手指消毒がメインだったが、感染者が増えていくにつれ、つい立て、飛沫のシールドとか盾みたいなものとか、今年に入ってから、フェイスシールドを常にしている状態で、だんだん感染症対策が厳しくなってきたという実感がある。それによって、感染症対策の業務が、本来の業務と同じぐらいの割合で増えてきたなど。本来の介護のケア業務がどうしても削られがちになってきたかなと感じている。
- ・コロナ前だと口腔体操といって発声の練習とか体操をしていたが、口も開けられないし、口腔体操ができなくなって、お年寄りの健康面でも影響があるかなと感じているところ。
- ・職業柄、県外へ行くことはだいぶ控えるようになった。
- ・個人的なことだがズームをよく使う。コロナになってから、ズームを使って「朝活」をするようになった。今まで、読書会っていう読書好きな人たちで集まるのを県内でやっている人がいて、読書会をやったり、参加したりしてたんだけど、対面での読書会が難しくなってきた、オンラインの朝活のコミュニティがあって、オンラインの読書会に週1回参加してる状況。オンライン会議、ズームを使うことが私生活では大きく変わったかなと
- ・コロナがピークの時は、誰がいつ濃厚接触者になってもおかしくないという状況が常にあって、常に人員が不足してるっていうのは続いていた。
- ・施設はショートステイなので、濃厚疑いと言う時には利用をお断り、発熱ならその時点で帰ってもらうっていう形で、家族さんには負担をかけてしまったかなっていう思いはある。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・基本構想で描く2030年の姿で、自分の中でどれが大事かなと見ていて。
- ・順番にいくと、1つ目が「誰もがいつまでも様々な場面で自分らしく活躍することができる」、2つ目が「救急医療、高度専門医療、リハビリテーション、在宅医療、介護などのサービスを切れ目なく受けることができる」、3つ目が「人生の最終段階を迎える時まで、人との繋がりがあの中で、自分らしい暮らしを続けている」という部分。4つ目が「子どもを安全安心に育てる環境が整い、子どもの健やかな育ちを支えている」。次が「教育環境が充実して、おかれた環境にかかわらず、誰もが主体的にライフコースを描いている」というところ。それから「多様な人が働きやすくなる働き方改革が進み、柔軟なライフコースの選択が広がっている。」「人々が暮らしやすいコンパクトなまちづくりが進んでいる」「心の健康についての支援を受けやすくなっている」「多様な人々の違いを認め合い、誰もがその人らしく活躍できる共生社会が実現している」というところ。合計9つが個人的に大事かなと。
- ・特に、救急医療とか、在宅医療、介護のサービスが切れ目なく受けられるっていうのと、人生の最終段階を迎える時まで人との繋がりがあの中で、自分らしくっていうのが、地域包括ケアのことかなと思って、包括ケアの推進ってのはもっと進めていくことだろうなど。
- ・その中で、今回コロナになって感染症対策が必要になってくるなど。救急の医療が逼迫してとか、高齢者だと特に命に関わることだし、今後地域包括ケアの中に、保健の分野も、しかも感染症対策が今後も必要になってくるかなと。コロナ以外でも感染症はあるし、今後また新しいものも出るかもしれないので。

- ・ 8番目に挙げた「多様な人々の違いを認め合い、誰もが活躍できる共生社会」で思うが、私が働いている施設が共生型サービスをしていて、高齢者施設で障害児の受け入れもしていて、そうすると相乗効果というか、高齢者のところに子どもがいるので、高齢者の人がちょっと落ち着いたり笑顔が増えたり、子どもを見ると和らぐというか、子どもの方でも、歳の離れた人と接することで、いい刺激になっているようで、世代間交流っていうのはすごい面白いなって。分野横断でいろんな人が同じところにいるっていう福祉も必要になってくるんじゃないかなと思った。
- ・ ニュースで米原の方に複合施設ができてると言っていて、幼稚園と高齢者施設が一緒になっている施設で面白いなど。ただいい反面、逆に感染症とかのリスクももちろん増えるけど。世代間交流、という意味でもこういう施設も面白いなど。
- ・ 「心の健康についての支援を受けやすくなっています」のところ。結構個人的に大きな問題だと思って。休職中の人がりワーク支援の施設に通う時に、定員が感染症の関係で減っていて利用できるまで時間がかかったりする。定員を増やすのはなかなか難しいだろうけど、精神疾患で休職してリワーク使いたいけど、なかなか使えないっていう現状があるとしたら、ちょっと問題かなと。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・ 「幸せ」っていうとちょっと違うけど、いいよねっていう点で3つ。1つが歴史的な建造物が多いことが個人的にすごい嬉しい。お城が好きなんで。2つ目が琵琶湖があるっていうこと。時々ちょっと疲れたなっていう時に湖岸に行くと結構気持ちがいいときがあると思うけど、フッとちょっと今日琵琶湖行ってみようかなと思ったときに、そこで自然を感じられるというか、また海とは違う自然を感じられるのがすごくいいなど。3つ目に交通の便がいいなどすごく感じている。先ほどお城に行くって言ったが、滋賀県からだといろいろ行きやすい。東海とか、近畿の中でも、北陸でも、やっぱり行きやすいなど。京都とかに行くときも、30分もかからないうちに、僕の住んでるところなんかは電車で行けるんで、その点はすごくいいなど。

4. その他の質問

- Q. 介護の現場でデジタル化やAIやロボットなどを使っていくことで人の配置基準を減らしているという話もあるが、何かお考えがあれば。
- A. 前に眠りスキャンだったか、排泄の予測のマットを導入しようかという話があって、それがいわゆるデジタルの分野なのかなと。実際導入されたかはちょっとわからないが、どうしてもベースが紙が多い。血圧とか検温した時のデータとかも、結局紙に書いて後でデータに打ち込むので二度手間だなと思うときはあるけど、それはそれで大事なかなと。
- Q. 先ほど、地域包括ケアシステムのお話とか、国の動向のお話をさせていただいたが、職場でそういった情報共有や研修の時間はあるか。
- A. あくまで研修があったとしても現場の技術の研修で。地域包括ケアっていうのも現場の職員で話が出ることはない。ただケアマネとの連携とか、かかりつけ医との連携っていう点でちょっと話は出るが。
- Q. 県政に関心というか、身近な親しみを持ってもらうにはどうしたらいいと思われるか。
- A. 広報レンジャーの時にも同じ話があったなど。僕らの世代、20代30代はSNSが中心なんで、そこでの発信は見ていかな。でも周りでも、例えば滋賀県の公式のものをフォローしているかっていうと、一人いたらいいかなあと。母親がたまたま県の公式をフォローしてるけど、理由が毎日のコロナの感染者数を見るため。でも消極的な理由でフォローしていても、発信の仕方によっては、そこから興味を持つのもかもしれないし。いいのか悪いのか、県に注目が集まったのが、いい機会になったらいいなどと思う。
- 時々、奇をてらったPRの動画とかがニュースになってると思うけど、それも結局一過性に終わってしまっているというか。行政に限らずだけど悩ましいところだと思う。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（玉置委員、宮本委員）

○ヒアリング日程

2022年6月2日（木）10時00分～11時00分 ZOOM

○委員

玉置 千春さん（株式会社シンコーメタリコン取締役 広報部長）

宮本 麻里さん（合同会社 LOCO 代表）

○ヒアリング議事

1. 現状について

（宮本委員）

- ・私どもは子育て世代からシニアさんまでが来やすい居場所の提供として飲食店の事業をしたり、子育て世代のお母さんたちの「働く」のサポートをさせてもらっている。コロナで2年間は怖くて来られないという子育て世代の方やシニアさんが増えた。この春から少しずつ、コロナの落ち着きと、お母さんたちの慣れもあって、居場所に戻りつつある。
- ・子育てで5年～10年「働く」から離れているお母さんが再就職するときにうちを使ってもらう活動を色々しているが、この2年間は最初の一步がすごく出づらい。例えば再就職できても、すぐ学校の休校があるかもしれないとか。再就職するのにどうしようかなと考えているお母さんが多い中で、自分でできる何か仕事をしたいと思う人が増えてきている感じがある。お母さんたちの起業とか、地域活動のサポートもしているが、そういう問い合わせやセミナーへの参加が増えて、規模は小さくても、それぞれやりたいお仕事を小さく始めている人も多くなったかなど。
- ・このゴールデンウィーク明けから、急に再就職の動きが大きく動いている。やっぱり物の値段が急に高くなって、「働かなあかんかも」という意識がこの1ヶ月すごく増えたと思う。
- ・企業さんからも、少しでもうちを手伝って欲しいという声も増えてきてるというのが現状。
- ・お母さんたちは業種より、家からどれだけ職場が近いかを一番に見る人が多いので、地元企業が多い。

（玉置委員）

- ・ウェブで気軽に打ち合わせをできるようになったのは、すごくいいツールが確立されたなど。企業側からすると出張の経費もかなり削減されたり。ただやっぱり人と関わるのが希薄になってきていて、面接や在宅での仕事も、電話だけで顔を見ないことも増えてきていて、営業マンも顔を見ないと言にくいことを言えへんなあと。ちょっとした無理をお願いするとか、値段の交渉ごとは、画面を通してではニュアンスが伝わりにくかったり。だいぶ慣れてきてうまく両立して、いいところは残して、住み分けができるようになってきたかなどは思っている。
- ・働きたい人もすごく増えてるし、企業さんがなかなか人が来ないというのも聞いている、そのバランスというか出会いの場がなかなかないということも少し思う。私どもの会社は幸いにも求人を出すと結構来てもらっているのありがたいんですが、県内にすごくいい企業さんがあるので、気軽にマッチングできるような場、コミュニティがあれば。こういう時間帯しか仕事ができない、でも120%でがんばりたいという方もたくさんいらっしゃると思うので。

2. 今後必要だと思うことについて

（宮本委員）

- ・基本構想で自分らしい幸せというところをすごく意識して入れてくださってると思うが、やっぱりそこが一番大切じゃないかなど。いろんな制度とかがあるが、1人1人、みんなが同じ枠にはまるって本当に難しいなと思っていて、やっぱり暮らす環境、家族とか、いろんな事情があってもある中で何か、それぞれが自分らしく、自分らしい幸せを見つけて暮らしていけたら本当にいいなって思っている、それが「働く」を通しての取組ができるとすごくいいなど。
- ・うちのスタッフも9時半～13時までならとか、週に2～3日とかぐらいしか働けないけど働きたい人はやっぱりたくさんいるので、それぞれの人に合った働き方をこっちも提供することで、やっぱりすごくみんな生き生きする。
- ・結構大変な状況の人とかもいて、一人一人と向き合って、じゃああなたの場合はこういう順番で

というプランというか、その人それぞれのライフプランみたいなものがあるのかなと、そういうことを気軽に専門の人に相談できる場所がたくさんあるのがすごくいいなど。

- ・「柔軟で多様なライフコース」というのもよく目にするけど、特に女の人は人生の中で働き方が変わるというか、自分の思いだけじゃなくて、周りの環境によって働ける働き方が変わる、しかも介護とかは急にくる。何かあったときに、柔軟で多様にすぐ対応できるような会社の仕組みや、地域の仕組みがすごくいるなどと思う。この柔軟で多様って本当に達成するの難しいなどと思うので、達成するためにそれぞれがどんな細かい事業していったらいいのかなというのを考えていけないと思う。
- ・今、長浜市の教育委員もしていて学校を回ったり子どもや親御さんとか関わる中で思うのは、アンケートとか見ても、何か目標、夢、こうなりたいみたいなのがなかったりとか、どんな大人になりたいってまだまだイメージできてる子が少ないなって。滋賀でワクワクすること、滋賀でどんな夢をかなえたいとか、滋賀にいるこんな人みたいになりたいとか、早い段階から子どもたちが考えられるような、いろんなカリキュラムがあるといいなど。子どもたちも、お母さんたちも、滋賀にどんな会社があって、どんな仕事があるってまだまだ知らないことが多いなって。そういうものにもっと身近に触れる機会があるといいなど。

(玉置委員)

- ・私もやっぱり自分のライフサイクルに合わせた働き方とか生活ができる環境と、本当に住み続けたいと思えるような経済状況というか。滋賀県はどうしても車がないと動けないような状況で、歳を取れば取るほど住みづらいというか、小さなコミュニティの中で、孤独にされてるお年寄りの方もいるので、歳をとってもここに居続けたいと思うような交通機関とか、若い人もずっと何年も先をイメージできるような環境づくりがすごく大事かなと。
- ・子ども自身にいろんな選択肢を与えてあげられるような教育が本当に大事なのかなって。
- ・私どもの会社の説明会に来てもらっても、業種は製造業とわかってるけど、色んな部署があって、その中で何がしたいっていうのはあんまりイメージせずに来てもらって、インターンシップで初めてものづくりって面白いですねって言うてくれて、実際に入社してくれていることもあって。滋賀県は昔からの老舗のものづくりの会社さんとか職人さんとかたくさんおられて、技術継承とか事業継承がしづらい状況になってるのはすごくもったいないと思うので、そういうよさをもっといろんな人に知ってもらおうと、子どもが好奇心旺盛な時期におもしろい、これ大好きだって思ってくれる出会いの場が教育のどこかのところであって、選択肢の一つになったらいいなど。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

(宮本委員)

- ・私が今県外から滋賀に来て暮らして幸せと思うことは、人がいいってこと。ここで子育てしてよかったとか、ここだからこの事業ができたなどか、すごいと思う。なんというか1回は受け入れてくれる。最初から無理っていうことではなくて、1回ちゃんと聞いてくれる人が多いなど。
- ・幸せって難しい言葉だなと思うけど、新しく幸せを作るというよりは、今のこの暮らしとか、今この人たちと関わって普通に暮らせることがあらためてめっちゃ幸せなんやなあと振り返ることって、あんまりなくて、そのタイミングが、自分とか家族の中であって、今日も幸せやったねって話せたらそれで充分じゃないかなって。
- ・それを感じるためには、安心安全っていうベースもいるし、自分のしたいことがワクワクできたり、楽しんで働けるとか、柔軟に働けるとか、新しい幸せじゃない幸せがどんどんきたらいいなど。やっぱり一人一人、小さくてもいいから役割、それぞれ得意が生かせるみたいな、一人一人が存在する意味というか、それは絶対大人も子どももあると思うので、そういうところを、それぞれの人がみんな考えながら過ごせたら、家族の中でも会社の中でも、幸せがどんどん増えていくんじゃないかなって。

(玉置委員)

- ・幸せの尺度って本当に人それぞれで、日本ってこんなに豊かなのに幸福度ランキングですごい低くて、それがすごい寂しいなど思ったりするけど。豊かになりすぎると、幸福感ってだんだん麻痺してきたり。

- ・滋賀県って不便すぎず、便利すぎず、ちょうどいい塩梅の土地で、滋賀県に帰ってくるとほっとできる、やっぱり心の安心とか安定がある場所だからなんだろうなって。それはやっぱりいい意味でのおせっかいな地域の人たちだったり、人を大事にしたいなと思って地域がやっている昔からの伝統だったり取組、行事だったり、今の若い人ってうっとうしいなって思いながらも、そういうところって歳を重ねたり、子どもを育てるとか、自分が歳とってきたときに助けてもらえるような人との繋がりだったりすると思うんで、滋賀県のそういう風土は大切にしていきたい。
- ・今移住してくださる方とかで、滋賀県のよさとか、すっかり馴染んでくださってる方もたくさんおられて、滋賀県のファンになってくれた方が、たくさん定住してくれる居心地のいい、ようやく家に帰ってきたみたいなの、ほっこりするような土地づくりっていうのは幸せ度を保つのかなと。
- ・私は適度な田舎さと人、そういったものが一番の大きな資産だと思うんで、そういったものを生かしながら、未来につなげていけたらいいのかなと。

4. その他の質問

Q. 会社のワークライフバランスにかかる制度や工夫

A. (玉置委員) 仕事のジョブローテーションで、誰でも仕事ができるようになったり、フォローし合ったりの工夫はすごく社内で行っている。休暇制度がすごく充実していて、年に必ず7日間連休を取る制度もあるので、お互い様っていう気持ちでリフレッシュする。休暇を本当に徹底してるので、取ってないと、早く取りやめというある意味半強制的な風潮がある。上手に仕事をやりくりしてみんな取得の予定を立てて、リフレッシュしてこいという会社の風土が大きな後押しになってるかなと。

Q. 脱炭素の取組について

A. (玉置委員) 本当に脱炭素は会社自体も取り組まないといけないとは思ってるが、私ども溶射という加工技術で、溶射という技術自体があまり二酸化炭素を排出しない加工プロセスで、廃液とかも出ないし、環境にはやさしい技術にはなっているが、それ以上のものを何かしようと思うと、そこから大きな課題。

あとは営業スタイルとして、脱炭素社会に向けた技術に取り組んでいる会社に溶射という技術でお手伝いをする営業をして、お役立ちをしたいなと。本当にそのぐらいしかできてはいないんですけども。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（檀原委員）

○ヒアリング日程

2022年6月2日（木）14時00分～15時00分 ZOOM

○委員

檀原 泉さん（公募委員）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・草津にずっと住んでいて、市民という部分といろいろ活動させてもらっていて、そういう中で気づいたこととかも含めてお話しできたら。現在女性を議会へということで、ミモザプロジェクトというのをこれから始めるところ。主に活動してるのは、PTAから入って、同時に草津川跡地の市民活動も2001年から始めて、大学生や大学の先生や行政の方ともいろんなところで出会わせてもらう機会があった。
- ・コロナの中で冠婚葬祭が非常に変わってるなど。またイベントやセミナーは、実際なかなか集まるのが難しく、中止やズームで行うことが増えているという実感がある。
- ・いろいろな意味で人との接触を避ける中で、みんないろいろ工夫しているなど。私も家庭菜園や地元のお寺とか33ヶ所めぐり、滋賀県にたくさんお寺があるので、そういうことを始めたりもした。
- ・GoTo イート、GoTo トラベルで、滋賀県のことを再発見する機会もあったなど。一方でネット犯罪のようなことがあって、カードを作り変えざるを得なかったようなことがあった。そういうこともこれからはあるんやなあということを実感した。
- ・親を在宅で介護するようになって自宅で看取るという体験をした。亡くなるまで一緒に過ごせて、親しい人や肉親とも出会うことが実現できたのは、やはり在宅を選択したことが大きかったとすごく思った。
- ・仕事によっては非常に格差があったなど。私自身は歯科技工士でコロナがスタートした数ヶ月の間、歯医者さんに患者さんが来られなくて仕事がないので、支援を受けざるを得ないぎりぎりのところまでいった。
- ・運動しなかったり、手の消毒をいっぱいしたおかげで、逆に手の抵抗力がなくなったのか、皮膚炎にかかってしまった。子どもたちの抵抗力が落ちたりすることがあるとよく耳にする。
- ・学び直しにチャレンジされてる方も非常に多いと思うが、私自身もこのコロナの中で新たなことを始めたりした。外出できなかつたり、エネルギーを注ぐ場所をみんな探していて、上手にやりくりしてる人も多かったのかなと思う。
- ・社会の中での動きでは、SDGsって非常にいろんなところで耳にするようになった。滋賀県は、マザーレイクゴールズが言われているが、いろんなところで耳にするようになったし、ウクライナのことを逆にいろんなところの意識に変化を与えていると、いい意味でも悪い意味でも。
- ・多様性ということも最近よく耳にするようになった。近年、経済フォーラムが非常に日本のジェンダー状況が悪いということを言ってるところにも関連するのかなど。非常に問題視する、人権について考える機会というのは意外と増えてるのかなど。
- ・100年前のスペイン風邪や、もっと前のペストとかに思いをいたして、そういうときの人々の生き方みたいなものを振り返るような著書がよく読まれてるとよく耳にする。
- ・私も2020年までは草津市の教育委員をさせてもらっていた関係で、先生方の話を聞いていたが2020年の1学期はいろんな意味でストップしてて、学校になかなか行けなくて、模索があって先生も子どもたちも大変だった。再開した2学期がやたら長くて、2学期をどうやって過ごせるだろうか、途中でしんどくなるんちゃうやろかと。長いけど行事ごとは一切ストップで、楽しいことがないのに、学校には行かなあかんと。大変だったなど。
- ・子どもたち、家で過ごす方は格差が出ているっていう話をしていた。草津市は比較的ギガスクール構想の準備をずっと進めてきていて、各1人1台のタブレットも段取りしていたが一気に国全体が前倒しになって。進んだことはいいんだけど、子どもたちのリテラシーや学校の先生方のスキルがついていくかと非常に悩ましい問題があったなど。
- ・先生方に今何が一番大変かと聞いたら、学校でいろんなところ消毒しまくらないといけないと。学校の就業時間のあとに消毒しまくらないといけない、それは大変やと。

- ・先生方の働き方改革はこの期間もずっと言われていて、むしろやらなあかんことが増えたり、今までとは違う、働かなあかんことが増えていたようで。部活動や大会も、どんどん改革を無理やりせざるを得ない状況があって、部活動はみんな地域でも支えていこうという動きに逆に繋がってる部分もあったのかなど。
- ・子どもたちの様子を見ていると、一応家にはいてたんだらうけど、様々大変なことがあったなど。ストレスは親も子どももあったと思うし、とくに1人親の世帯の方なんかは、お母さんが無理やり家にいてもらなあかんような状況で、暮らしが大変だったり。家庭によってICTの環境の格差もなかなか簡単にはか埋められない部分もあったなど。
- ・今まであんまり表に出なかったヤングケアラーの問題が、この間非常に取り上げられるようになった。表に出てこないことには対応できないので出てきたことはよかったのかなど。
- ・子どもたちが自分の命を絶つ、女性も、この間今までより多かったと。特に低学年の子どもたちにも広がってる。約50%は理由はわからない自死だと聞いたりしたが、そういうこともこれからはしっかり見つめていかないといけない。
- ・意外と若者と高齢者っていうのは似てるところがあるぞと思う。「お1人さま」は、若者の中にもいるし、高齢の中でも、これから単身世帯が主流になるとよく言われるが、そういうことがすでにどんどん見えてきてる。
- ・イベントは国スポも延期で、花火大会も3年行われてないが、明るいニュースとして、オリパラで県内出身者が非常に活躍されたし、近江高校が頑張ってくれたり、若者たちの活躍が、非常に暗い中の明るいニュースやったなど。
- ・保健所業務は非常に大変だったし、医療機関も逼迫していたし、大阪の方からの患者受け入れや医療関係者の派遣などもあり、近畿の連携とか、災害とか考えると、こういう経験もいずれは生かしていかなあかんのかなど。
- ・それから滋賀県は意外と人気だったと。「滋賀飲み」という言葉があったりとか。いろんなドラマのロケの誘致で滋賀にもたくさん聖地のようなところがあったり。
- ・外国人実習生が働いてくれるから仕事ができているところにとっては非常にピンチな状況が続いたし、実習生自身も非常に苦しい思いをされたと、国際交流協会の話なんかを聞いてるとそういうことは如実にあったなど。
- ・あと数日後に、全国植樹祭が開催される中でいろんな意味でまたよくなっていくことを暗示させてくれるのかなど。イナズマロックフェスも再開するという話も聞いているので、これから良くなればよいなど同時に、今までの経験は無駄にすることなくいければいいなど。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・やはり滋賀県は自動車がなかったらどうなんやろうっていうことは、高齢社会、また省エネを進めていかないといけない中で、自家用車に頼る社会が難しくなる。でも交通は非常に大事。そのためにはいろんな革新的なことをやらないと難しいなど。
- ・公共交通機関ももちろんそうだけど、どう組み合わせるかっていうことが第1かなど。ラスト100メートルと書いたが高齢の方がバス停までいけない。例えば地域の支え合いなのか、ITを活用したオンデマンドなのか、全てを組み合わせた形で真剣に見直していかないと駄目と思っている。
- ・コンパクトシティという考え方とは、組み合わせていかないといけないし、余暇の活用や観光とも繋がってくるし、行政区の枠組みとか、企業のバス会社の路線図だけでは補えないことがいっぱい出てくるので、もっとフルに頭や、場合によってはAIを使ってでも答えを見つけていくことは大事。
- ・地産地消はよく聞く言葉で、合理的なマッチングの中で、持続可能ということをテーマにしたいろんな考え方っていうのは非常に大事だな。大きな意味では何世代にもわたって人々が暮らせるっていうことを考えた中で、今何をすべきか、5年後何をすべきかって視点は大事ななど。
- ・エネルギー問題、いずれはそういうものに頼ってはいかぬ時代が来ると思う。それだけで暮らすためにはどうするかともう実験でも何でもいいんでやったほうがいいと。特に滋賀は木材をつくることもできるし先進的にやっていける素地があるんじゃないかなあと。かっこいい省エネ、脱エネの住宅とか、宿泊施設、ゲストハウスなんかも使えるといいし、そのためには素人だけでは難しいというのが僕の思い。それをつくるために人と人をつなげるようなプロデュース、全体像を作るプロデューサーみたいな方がタッグを組まないと難しいなど。
- ・食料自給率は滋賀県は可能性があると思う。滋賀県だけで100%では都会の人の部分を賄うことがで

きないので、125%と。そういうふうな発想はちゃんと持った方がいいのではと。

- ・事例を挙げると山口県の周南市は「鹿野の風プロジェクト」をしていて、高齢化で山の中でなかなか大変なところなんですけど、人がそこに来たいというようなまちづくりをされている。
- ・生活の中にジェンダー平等っていうのは、もっともっと大事にされるべき。多様な性だけじゃなくて生き方についても一人一人を認めていけるいろんな議論が必要かなと。
- ・「ひたすらなるつながり」って糸賀さんがおっしゃったっていうことだったが、これはほんまに大事になって。繋がるためには相手の領域に半分足を踏み入れないとあかんというのは僕の持論。福祉だけじゃなくて、教育、文化芸術も行政もそうですし。
- ・世界全体が平和であることが何よりもSDGsのベースも大事な一番要素になってくる。滋賀県県民全体でノーベル平和賞目指そうプロジェクトとかいうのはおもしろいなあと。
- ・2025年に万博があるが、滋賀県はできれば「ほほえむカパビリオン」とか、SDGsのシアターなんかを作って欲しいと思ってる。
- ・誰一人取り残さないって言葉は簡単だけど具現化するのはなかなか難しい。ヒントはいっぱい滋賀県にある。滋賀県の福祉はいろんな方がリードされていて、先駆的なこととされている方がおられるんで、知恵を共有しながらいければいいかなと。小さいときから大人になるまで一人一人の命とか自分一人の人権を大事にするための教育の中に、性とか性の教育っていうのが一貫してずーっとされてこないとと。
- ・子どもたちがわくわくすることは大事で「草津未来プロジェクト」というNPO法人が「ワクワクエンジンプロジェクト」っていうのをしている。本人が本能で何にわくわくするかっていうのを見つけ出すのをみんなで助ける取組。ぜひ中学生みんなにやってもらったら「ぼくはこれにはワクワクすんねんな」というのを見つけてくれると思う。同じ草津未来プロジェクトはロケットを打ち上げるという取組をやっていて、こういうものは子どもたちもぜひ体験してもらいたいなど。
- ・滋賀県は、「うみのこ」をみんな体験する。こういうものが滋賀県を愛するベースになったり、自然のことに繋がるっていうのは、何かの時に出てくる。
- ・琵琶湖ホールや県立美術館の方々がアウトリーチを頑張ってくれている。ぜひみんなで応援したいなあと。
- ・人はやっぱり何か楽しいものを持ってると持っていないのでは全然ちがう。そういうもの持つてると人と繋がる機会も多い。
- ・スポーツは、真剣にやることの大切さと、楽しむことは両立すべき。総合型の地域のスポーツクラブや、部活動の指導者に地域のとか経験者をどんどん入れていくのは実際はなかなか難しいが掘り起こしていかないと。
- ・心の健康、ちょっとしんどくなった人の早期のカウンセリングは大事だなと。
- ・それからリワーク。去年の秋に、北新地でビル火災で逆にリワークプログラムというものに光があつたが、ものすごく大事で効果のあること。
- ・ジェンダー平等とかハラスメントのない社会は、平和もベースで、人権がちゃんと保障されるっていうことの大切さがある。特に子どもにも人権があると国連でも言ってるが、日本はそれをちゃんと受けとめていないところがある。
- ・学校での学びの中ではリベラルアーツと言われるところ。いろんなものを学ぶ、いろんなものに触れ合う、芸術や文化にももっと。
- ・「半分農業半分何とか」みたいなものがよく言われるが何かだけっていうんじゃなくて「なんかとなんか」みたいなものはもうちょっとイメージしていいな。
- ・働き方改革としては、小規模事業者が同業者が協力して一つのグループのようになって、何かの時には助け合うっていうことを見つめていくことはこれから大事かなと。
- ・仕事をされる人が、実際の仕事のイメージを持てると非常にスムーズ。
- ・ジェンダー平等は必ず実現せなあかんと思ってる。高齢のちょっと手前の大活躍世代の女性が必ず出会いそうな危機の中に更年期障害があつて、男もそう。堂々と休みを取って、病院で診療して、そして元気にまた職場で働けるってことはしっかりして欲しいし、子育ても社会が責任を持つ。これは男の人にとっても絶対必要なことだと僕は思っている。
- ・職場と人をマッチングことの難しさみたいなもの、もうちょっとわかりやすく、使いやすく、うまく調整できるようなものも高度化したものにどんどんを作り変えていったらいいなど。
- ・今回保健所業務のしんどいこともクローズアップされたが、内部からだけで考えようと思つたらしん

どい話。サイボウズさんとか、ノウハウを持っておられるところに助っ人にどんどん入ってもらって、機密保持なんかを同時に推進しながらできる方法を県庁の仕事なんかでやっていけば、働き方改革にとっては非常に有効だなと。

- ・ エネルギー革命が当然これからある。ベストマッチが必要。環境と経済の両立には、今まで捨てていたごみみたいなものを利用する価値。滋賀モデルを、いろんな知恵を集めて、林業とも一緒に作っていったら、かっこいいやん滋賀県の家と。
- ・ SDGsも未来も平和が土台と僕はいつも言うてる。今回のウクライナを見たらわかるが、そのために武器をいっぱい買うのがいいのかっていうたら違うと個人的には思ってる。むしろ平和のための一つ一つの石の積み上げであったり、お互いの尊敬し合うような関係性づくりの方が確実だと思ってる。
- ・ 農地の問題、空き家の問題、それをもっともっとハードル低く、何かやれるようにする法整備と、人との繋がりを持つ何かやれる仕掛けみたいなものは、ぜひ、今のうちにやって欲しいなど。ほんまに空き家や休耕地だけになってからでは遅いと。
- ・ 誰もが幸せになる看取り、逆に言えば誰もが不幸になる看取りって何みたいなものかを考えると、本人が、自分の生まれたり暮らしてきた場所で最期家族に囲まれて息を引き取るみたいな幸せっていうのをね、親の看取りで僕も実感した。
- ・ 防災の学びは防災士さんがいたら学べるわけでもなく、防災士をふやせば何とかなるものではなくて、いっぱいテーマがあって、多様な学びについて、今やってることの紹介で終わりじゃなくて創り出すプロセスとか、いろんなところにも関わっていったらいいなって。
- ・ いろんな空き家なんかでも、ゲストハウスをどんどんふやして国際交流と地域の体験を。こられた方だけじゃなくて地元にもメリットもあったり、楽しみがあるっていうこともできたらいい。
- ・ 子どもを生み育てたい母なるところには人は集まるし、どこか行ってても戻ってると思っている。琵琶湖という母なる地球のような湖が真ん中であって取り囲まれている、こんな素敵な場所をしっかりと支えていけることが大事だなと。
- ・ いろんな市民活動や有償ボランティア、低予算イベントは企画されるが、無償でないと駄目とか、入場料金を取るの割合が高いとか。儲けを目的にやってないということはわかると思うので、そういうもの認知して応援するともっと市民活動は活性化する。
- ・ あらゆる差別を禁止する法律が本当は欲しいが、今のところないので、ぜひ条例でもいいのでつくって欲しいなど。
- ・ 環境、やっぱり里山をつくれる場所、里山に戻せる場所を選んで、そういうものを大切に作っていくことが、滋賀のよさを再発見すると同時に環境を守るためには大事かなって。
- ・ 竹の文化、わらの文化、炭の文化、特に竹の文化とわらの文化っていうのは、日本人の知恵の結晶。そういうものを伝えていきたい。
- ・ 滋賀県はバイオの文化とバイオの技術では世界のトップと言えるようにできたらいいなど。
- ・ 使えるものだけで生きていくっていうのは、エネルギーでも、食べ物でもそうだと思うが、ちゃんと学ぶことは大事。本当にそれを生かさなあかん時が必ず来ると思う。
- ・ 捨てるものは使う、綺麗な湧水を徹底的に守って、もし増やせるなら増やす、人間だけじゃないんやっていうことをみんなでしっかりと確認できたらいいなど。何かを敬う、人を敬うだけじゃなくて、自然を敬う、人を愛する、また他人、他国の人も、みんなおんなじように、生きて母親がいて父親がいて、同じ地球の中で生きていうことを思う、それから繋がるっていうこと。環境についていえるし、いろんなところで大事なことがなってる。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（岩寄委員）

○ヒアリング日程

2022年6月6日（月）10時00分～11時00分 ZOOM

○委員

岩寄 博論さん（武蔵野美術大学クリエイティブイノベーション学科教授）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・ 武蔵野美術大学で、美術大学が長く培った創造性教育を使って広い意味でのデザインをしている。極端に言う「社会をデザインする」ぐらいの広さで、デザインという言葉が用いられていてそれを大学で教えたり研究したりしている。社会がより複雑になっていて論理的な思考だけで対抗することが難しくなっているの、広くデザインの方法論がビジネスや社会、行政などに広がりを持っている。大学に移るまでは企業にいたが、そこでもそういうことを使った問題解決をやっていたり、京都大学のビジネススクールの大学院に行つて経営科学をしていたりと、ビジネスとデザインの間をいったり来たりするみたいなことをやっている。出身は、長浜市で合併前の高月町。高校まで地元の公立に通っていた。
- ・ ローカルとグローバルを一直線でつなぐというスタンスで活動をしていて、グローバルで何が起きているのか、それがローカルでどういうふうに反映されてるのか、今まではグローバルで起きていることが一方的にローカルに伝わってくる伝播の構造だったかもしれないのが、これから、多分ローカルで起こることが、逆にグローバルにインパクトをもたらす構造もあるのかと。
- ・ グローバルでどういうことが起きているか、マクロな視点として見ていく必要はあるかなど。インフレになるのではというところが、グローバル経済的にはものすごいインパクトがあつて、ウクライナ危機もあり、石油とか穀物とか値段が上がつてきて、アメリカとかヨーロッパではもう対前年度8%とかのインフレ率になっている。日本にもそういう傾向が多分今後より先鋭的に出てくるんじゃないかなど。賃金も上がつて仕事ができる人はいいけど、仕事ができない方、仕事の環境が恵まれていない方が、物の値段だけ上がるので、賃金の上昇の恩恵に預かることができなくて、格差が広がっていくということが一つあるかなど。格差が広がると社会的な不安定みたいなことが起こるだろうっていうのはある。
- ・ 一方で、特にアメリカで起きているのが大退職時代といわれる、人が仕事をやめ始めている現象。コロナの期間中、欧米諸国でロックダウンが徹しく行われた結果、仕事環境がものすごく変化。リモートワークがかなり徹底されたり。その結果、働くことに対する意味とか意義を見直す傾向が、非常に強く出てきていると言われていて。ホワイトカラー的な方も含めて、仕事を替わるといことが何百万人という単位で起きている。この辺も海外で起きていることだけど、日本にも起こり得ることなのかなど。
- ・ ローカルに関わるところで言うと、大都市とローカルの関係性が非常に大きく転換点を迎えているなど。グローバルな話だと例えば今アメリカでシリコンバレーからどんどん人が分散してると言われている。これまで、それほどテックハブとして注目されていなかった場所にまで人が分散して、テックハブの集積っていうのは、ちょっと前から起っていた。全く同じことが、日本にも大なり小なり起っていくかなどという印象があつて、大手企業だとリモートワーク前提でコロナの後もオフィスに来る必要ないと。リモートワーク拠点を企業が法人契約して、地域の人は地域で働けるようになる労働環境の整備を行っていくことがあつたり。
- ・ やっぱり地方移住を考えると、お子さんがいる方は、教育の問題があると言われていて、例えば軽井沢に数年前に風越学園という一貫教育校ができた。自由に伸び伸びと自主的で創造性がある子どもを育てるっていうポリシーで開学した学校。風越学園があるな引越してもいいよねというような感覚で、軽井沢への移住が増えているというようなことがある。

2. 今後必要になると思うことについて

- ・ 大前提として、大都市圏と地域との関係性が大きく変わると考える必要がある。昭和の30年代以降ぐらいから、日本は都市集中がすごい進んでいたけど一旦、一方的な都市集中が終わるんじゃないかと。これから日本はG（グローバル）の世界とL（ローカル）の世界にわかれるという

話も。Gは、例えば産業界が世界と戦わなきゃならない、そのための人材育成も必要で、グローバル人材も必要というような話。一方でLも大事で、特にコロナになって、Lのほうに関わりたいたいという方が出てくるだろうと。例えば東京で生まれ育ったゼミ生がグループに分かれて地域に行くプログラムがあるが、すごい衝撃を受けたと。東京でいるとある種の歯車感しかない。ところが北海道の人口1万5,000人ぐらいの町に滞在したら、自分がやったことが社会とかコミュニティにある影響力を持つと。

- ・今までの日本社会は中央で決めたものが流れてくるモデルだったのが、ローカルはローカルで、やり方を自主的に考えて、地域ならではの経済や文化を育てていくという。そうすると必要なことは、独自性があるローカルを創るってこと。ロードサイドだと日本全国どこに行っても一緒にローカル性がない町になっているのは、ローカルの独自の文化や経済がある場所に再生できるか。これはかなり気合いを入れてやらないと実現できないと思う。かなり考え方を変えていかないと。
- ・ちょっと厳しい言い方をすると選ばれるローカルなのか、金太郎飴みたいなローカルなのか。Lの世界もわかりやすくいうと競争的なことが起こると思う。特にコロナが期せずして起こって、これがすごく加速したって考えるべきかなと。
- ・これはアメリカでも一緒に、例えばオースティンは南部独特の文化がある。文化、食、そこに大学があって。そういうローカルのクラスターが非常に魅力的な地域をつくってるけど、僕は滋賀に関してはすごく前向きに思っている。滋賀はポテンシャルがめちゃくちゃある。ただし滋賀もやっぱりちょっと従属的なところがあって、高度経済の工業化で、京阪神地域に対するベッドタウン的な位置付けだったり、やや京阪神地域から下に見られてるようなところもあったりするわけで、それを変えないといけない。もともとあった自然と文化と歴史のリソースを使って、滋賀、或いは近江ならではの独自性、魅力を、どう創っていくのか。これを既存の物差しでやらないということが大事。既存の物差しは経済と工業を代表する産業、それから人口という昭和平成の物差しでやらない。それでやったら絶対勝てない。
- ・僕が生まれ育ったところもだけど、めちゃくちゃサスティナブル。少なくとも昭和の高度経済成長以前はそう。僕の感覚で言うと、祖父母ぐらいは何となくその感覚を持っている。だけど、両親ぐらいの世代で急激に変わってしまった。循環社会のあり方も地域ではものすごく循環していた。ところが、高度経済成長で循環性が失われてしまった。今大学の先生とやっていることで、高齢の方に昔の循環社会の話を実は調査して、それをグローバル企業の方が循環社会をつくるヒントで注目されてると。地域の人からすると、「古いで」みたいな、何の価値もないというか、普段やってることが、グローバル企業の最先端な研究開発的な視点で見ても、価値があるものだと見られてることがすごく示唆的で。
- ・だから外部の方をそういう形である程度受入れる視座を政策的に支援する、環境整備を行政的にはできたりするんじゃないかと。ちょっと長浜を見ていて課題だと思うのは宿泊。観光のための宿はあるが、長期滞在できる場所が極端にない。こういうところを整備すると関係人口的に長期滞在して、また戻ってきたり別の人が入ったり、そういうことも政策的にはできることかなと。
- ・もう一つすごい大事なことは、祖父母より下の世代に地域に対する魅力、シビックプライドみたいなものがあまり伝播していない。だから流出してしまう。30代~50代ぐらいは、高度経済成長の中で生きてるので、価値感がそこで固着化してる。都市的な価値、経済とか、買い物できるとか、都市的な価値を持っている人たちに、どう地域の価値に目覚めてもらうかは、若い世代からやるのがいいのかもしれない。10代とか20代、そういう思考(ローカルの価値観)がすごいある。
- ・滋賀といっても、いくつかの場所で単一的に考えるのではなくて、多様性を持ったいくつかのクラスターで考えてもいいのかなと。そのクラスターがそれぞれの関心を持っての人に関心を持っていただける形になると、滋賀全体として、結果として選ばれる地域になって、その選ばれる理由は、それぞれの地域、それぞれであってもいいのかなと。
- ・長浜だと曳山まつりなんかは本当にシビックプライド的だなあと思う。あとは茶レンジャーってお茶にフォーカスをした活動。永源寺とかで採れたお茶が実は宇治の方に持っていかれて、京都産のお茶になってるといってお話を聞いたりしたけど、そこにシビックプライド的なものがなかった状態かなと。そういう地域ならではの、都市的なもの、経済圏の大きさに押されてしまうものを物差しにするんじゃなくて、地域の独自性がこれからの魅力だから、大きいとか有名とかじゃない物差しで評価をしようという転換が必要になってくるんじゃないかなと。

・一つの大きなヒントは僕は琵琶湖博物館にあるんじゃないかなと。琵琶湖博物館って、めちゃくちゃユニークな博物館。自然科学の博物館といわゆる社会科学の博物館が一緒になっている。それがもう滋賀らしさを表しているというか、滋賀の魅力は自然と歴史と文化の融合じゃないかなと思っている。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

・やっぱり自然環境と文化・歴史が密接に繋がってるっていうこと。これ意外とない。本当に。わかりやすいリゾート地なんかは自然環境がいいかもしれないけど、歴史的なところが少ないとか。京都も京都で自然はあるけど、滋賀みたいなダイナミックな自然とはちょっと違う。この二つがセットになっているところって意外とない。その二つの距離が近いところに生活することの豊かさっていうものをもっと滋賀に住んでいる人が自覚する、それが情報として発信される、それを求めて人が来るっていう構造はあるんじゃないかなと。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（水野委員）

○ヒアリング日程

2022年6月6日（月）14時00分～15時00分 ZOOM

○委員

水野 扶美さん（東近江永源寺森林組合職員）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・ コロナが広まっていた時期でも、林業現場って屋外で働く人が多いので、そんなに恐れている人がいないなど。テレビでも最もコロナにかかりにくい職業として出ていたとかで、そういうよい側面もあるんだなど。
- ・ 影響が出た分野として、ウッドショック。木材の販売価格が上がってスギで1.5倍、ヒノキで2倍ほど値上がりしてると。買う方はすごく大変だと。ただ山里としてはすごく助かっている。今までかつかつだったり、赤字を補填していたようなところでも、収益が上がってちょっと余裕のある事業運営や山主さんに想定よりも多く返却金をお返しすることができた。これまでがちょっと安過ぎたんじゃないかなというのが正直なところ。林業サイドとしては維持された方がありがたいなど。
- ・ コロナウイルスは木材の表面には長く生きられないと聞いた。東近江市ではあらゆる場面で木を使うプロジェクトが進行している。展示会をしたり、木育のイベントを開いて子どもたちが自由に遊べるようにしたら大盛況。そういう地域材に触れる機会、木材の製品を欲しい人、遊びたい人にちゃんと届くようになればいいな、もっと木材の利用が広がったらいいなど。
- ・ 林業はイメージとして、すごくいい仕事とか素敵とか言ってくれるが現実はなかなか難しい。気を遣って本当に一生懸命丁寧に将来の山を想像してきちんとやれば山を守ることもできるし、木の価値を高めることもできるけど、ただお金儲けのためにどンドン数をこなすやつつけ仕事を繰り返せば、木に傷が入って価値が下がるし、無茶なところに道を作ったり伐採をしたりして、それが災害誘発であったり、山の価値を下げて山主の意欲を減らしてしまう。両極端だなあと。作業する一人ひとりの気持ちが山にあるかないかで、同じ請負仕事、同じ金額の仕事でも、山を守る仕事になるのか、山を荒らす仕事になるのか、すごく大きくて、それが一番課題かななど。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・ コロナの影響なのか、永源寺に溪流釣りや登山の方がこの数年ものすごく一気に増えた。山に人が入ってくれるのはいいことだけど、ただ人が来るだけじゃなくて、どういうふうに関わってくれるのかっていうのが大事だと思う。マナーを守ってくれるといいが、後のことを考えない人がいたら、地元の人も嫌だし、もともと誰かの土地なわけで、それを借りているようなものなので。
- ・ 集落の人と出会ってもプイっと無視したり。そういう集落の人とよそから来る人の関わりが気になっている。うまくいかない場合はなぜかなと考えたら、来る人に繋がりが見えていないのかなと。滋賀県は森・川・里・湖の繋がりをすごく言われているし、やまの健康プロジェクトも進んでいてすごいと思うが、そういう繋がりの中で自分たちは生かされているんだっていうのを感じながら遊んで欲しい。
- ・ 外国籍の方も多いと思うので、いくつかの言葉でPRできたらどうかなど。こういうふう振る舞ったらいいですよっていうのを説教臭くなく、楽しく伝えられるような、滋賀の美しい自然と人間がどう気持ちよく関わっていけるのかっていうのをアニメとかで。ちょっとかっこいいし、面白いし、気持ちいいし、せつない部分もあったりする、そういう人の心に訴えるようなことができる形でキャンペーンみたいなPRをして、森・川・里・湖の繋がりと、そこでの振る舞い方っていうのを伝えられたらいいなど。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・ 私は滋賀県すごく好き。やっぱり暮らしやすいなどすごく思う。はじめに来て驚いたのは道を行

き違った人が挨拶したり声をかけたりとか。集落での暮らしがあるからかもしれないけど、穏やかで、落ち着いた気持ちで暮らせる人に出会うことがものすごく多い。

- ・東近江は面白い取組、自分なりの活動を一生懸命頑張っておられる方がとても多くて、気さくだし、そういう方がすごく繋がっておられて、一回参加すると知り合いが増えたり。自分から頑張っているっていう人が多いなって。
- ・ちらっと聞いたのは、琵琶湖もあるし平野も多いしで開けているから、すごく気持ちのいい空間で毎日暮らしていて、そういう周りの環境が住んでいる人に与える影響とかもあるみたいで。
- ・昔から街道があって、文化が盛んに交流されていたことも大きいと思う。私はよそ者だけど、すごく自然に受け入れてくれていて。だけどすごく山奥ってわけでもなく、ちょっと行けば大阪京都名古屋とかにアクセスできる。それがすごく不思議というか。
- ・ちょっと昔の日本に来たような視界が広がって、集落単位での自治会がまだ機能しているから、お寺とか神社が綺麗で荒れ果てていないで。それを維持するのは大変だと思うけど滋賀の強みになって。みんなの目があって安心して暮らせたり。そういう集落の暮らしがすごく滋賀らしいし、続けていきたいと思う。

4. その他の質問

Q. 林業の担い手不足について

A. 林業って女性も最近は増えてきて、全国的に入ってきてくれる人は多いけどすぐに辞めちゃうことが多い。林業の仕事が危ないしきついというのもあるが、多分、体制がすごく古いというか。教える人がそもそも本当に安全にできているか、ちゃんとした技術を持っているのかが課題。まずは林業をやっている人たちが山を荒らしまくる林業じゃなくて、ちゃんとした本当に意味のあるきちんとした林業をやれるようになることが課題かなと。

滋賀県の将来を背負う若い人たちがまた何十年か後に同じことやっちゃわないように、今の若い世代を育てて欲しい。特に大学を出た人たちは、現場で体を動かして、汗をかいてきつい思いをして、現場の人と色々な触れ合い方をした上で学ぶことってものすごく大きくて、そういう期間があればいいなと思っている。すぐに管理する仕事につくんじゃなくて。お試しで入れる時期があればいいなっていうのはちょっと思う。

九州にいた時にたまにテレビでやっていたのが、高校生向けの次世代リーダー塾。本当にすごく意識の高い、ものすごいところを目指す人向けの。社会課題についてとか、自分はこれからこういうことやっていくって。自分たちで何か変えていける可能性があるっていう世界に触れる経験があれば、ちょっと希望が持てるというか。

Q. 高校教育での林業（林業科設置の検討）について

A. (農業高校とか林業科で森林の伐採とかを勉強するというよりも) 木を切るだけが林業ではないので、地域の方と関わるようなことをされている高校生も多いと思うし。山や人間、山間社会とかそういう全体的なものをとらえられるようになってから、仕事で来てもらって目の前のことを頑張ってもらえたらと思う。

全く素人で来ていただいても、大体どこの組合でも若くて体力があって素直で元気だったら採用してもらえらると思うので、それはあんまり心配しなくていい。一回社会に出られても良いかも。

Q. 林業におけるDXについて

A. 航空写真とかは是非とも使いたい。山の林相が違うことで境界がわかるのもあるので。ただ最終的には現地に行って、山主さんがこっぴど言ってくれないと難しい。今のやり方と併用していけたらいいんじゃないかな。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（藤野委員）

○ヒアリング日程

2022年6月6日（月）16時00分～17時00分 ZOOM

○委員

藤野 裕美子さん（美術作家）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・東近江市にある自分で立ち上げた共同アトリエ「soil」（ソエル）を拠点に作品制作や発表の準備をやっている。同時に八日市文化芸術会館という文化施設で、嘱託職員としてキュレーションの仕事や生涯学習の運営の仕事をしている。今年から京都芸術大学で非常勤講師の仕事をしている。
- ・瀬戸内国際芸術祭という3年に一度、瀬戸内海の島々で行われるトリエンナーレがあるが過去2回参加していて、今年も参加する。コロナ禍になって初めて開催。前回参加時はコロナはなかったので、日本全国からアーティストが制作しに瀬戸内海にやって来たり、海外からのアーティストの参加があった。2020年や2021年は全然、島に行けない状況で、高齢者が多い島で、過疎化していて、ほとんどが70代80代90代ぐらいの方が住んでいるので、都市部から若者がわんさか来たら危険ということで、長い間県外からの渡航を禁止する行政からのお願いが出ていたり、ようやく昨年半ばぐらいに一旦解除されて、少し昨年準備に行けたり、また行けなくなったりで。ここ最近行けるようになって月1回程度通いながら準備しているところ。本当に主催しておられる方や行政の方たちの努力があって、開催自体も本当に悩まれたと思うが、それでも、こういう時代に、芸術を地域で行うことの意味とかも踏まえつつ、絶対にやろうという思いで力を入れてやってくださっているのがわかるので、こちらも守らないと思いつつ活動しているような感じ。
- ・そういう経験の中で芸術に取り組むことは、その過程で、個でありながら社会と関わって、社会の中の動きとかいろんな分野の方とかとの関わりを意識せざるを得ない活動だし、それがよりコロナ禍を経験して感じるようになった。今コロナだけではなくて社会情勢が変わっていく中で、材料代もすごく高くなってきていて、今までと同じように活動ができないし、本当に自分だけではない、作品をただ作るだけではないという部分も意識して真剣に考えないといけないなど考えている。
- ・コロナに関わらず、やっぱり美術作品を鑑賞することが音楽でも美術でも舞台でも、他者の考えを想像することかなと思っていて、作品に描かれていること表現されていることを考えることはその人の考え方だったり視点みたいなものを知ることだと。県立美術館の展示とかもそうだけでも、滋賀県に住んでいる若いアーティストの作品が一堂に集まっていて、そういった関係の中から、それぞれの社会に対する視点や自分がいる実情、社会の中で起こっていることとかを多少なりとも意識しながら、それが作品に反映されたりするもので、展覧会を見ることは社会について考えることにも繋がっていくし、本当に多様化していく社会の中で、文化とか美術はただ楽しむだけではなくて、そういったことも考えるきっかけになる一つのことかなではないかなと。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・私たちアーティストが健全に活動できることや、広く県民の方があらゆる機会に文化芸術に触れ合う機会があることはすごく大切で、それはすごく意識されがちだが、必要不可欠なのはそれを支える機関だったり人たちではないかなと最近強く思っている。例えばキュレーターの方や、マネジメントする方、そういった立場の方がいることがそういう人と文化芸術をつないでいく上で、また社会と文化芸術をつないでいく上ですごく重要じゃないかなと。例えば、昨年滋賀県の次世代文化賞を受賞された堤さんは、アートマネジメントとかリレーションをする立場の方で、そういう方が評価されたのはすごく意義のあることだなど。ただ、やはりそういった立場の方や機関とかがまだまだ重要視されていない、そういった方が呼びにくい状況があるのかなと思っている。
- ・昨年、「びわ湖。アーティスト・みんぐる」という、びわ湖芸術文化財団が主催をされているプロジェクトでは、リレクションをする立場として作曲家の野村誠さんがゲストとして呼ばれていて、そこに野田智子さんという方とナゴミクさんっていう、コーディネートする方が2人介在されて、その方たちのおかげで、財団の方と私達アーティストのやりとりが円滑になったと感じた。と同時に、このイベントを外から一緒に運営したい人、メンバーを募集することもされていて、アートマネジメントと

かを経験のある人もない人も関わってということで10数名ぐらい集まって、イベントをより良くするための話し合いをしたりと、それはすごく良いことだなと思って見ていた。

- ・文化施設の職員として働いている中で感じていることは、やはり館の運営を健全化していくために、現状でも職員不足な面もあるが、1人職員が抜けても新しい人が入ってこない現状があったり、専門職員、音響とか照明とかの職員が、毎週イベントがある中で、1人が土日も含めてイベントを担当するとなると本当に休みが取れなかったり、イベントはいろんな時間帯にあるので、長い時間拘束されたりと、それを健全化するために専門職の方を外部委託して入れていく形を2年ほど前から思い切ってやっているが、かなり費用がかかるので、今までと同じような運営費ではなかなかできない。館を借りられる方に負担していただいたりいろんな形を模索しているが、前より高くなったと感じると使いにくくなったり、音響・照明さんを入れる必要性はなかなか利用者には感じられなかったりとか、館が健全に運営していきたいと思いと、ホールを使ってイベントをされたい思いがうまくいかない部分があったりする実情があって。
- ・今滋賀県では、「美の滋賀」の取り組みですとか、「滋賀をみんなの美術館に」とか、施設を使う時の補助金制度とか、「文化で滋賀を元気に」みたいな制度がいろいろあるが、申請が大変だったり間に合わなかったり、担当の方に相談すると教えてもらえるが、そこまで至らない状況があったり。県の文化政策として「美の滋賀」や「滋賀をみんなの美術館に」って本当にいい取組だなと思っていて、もらえる金額もかなり大きいし、実際に使われた方に聞くと、最後報告会とかがあって、いろんな事業担当されてる方と交流する場面もあってすごく勉強になったと仰っていたし、ただ県が示している条件と自分がやりたい事業の方向をすり合わせていくのが難しかったと。小さな団体とか個人とかに、まだまだリーチができていないのかなと、そういう情報をもっと知れるようになれば、いろんなことを諦めずに済むのかなって。
- ・滋賀県ってアーティストが移住してくることが結構多くて、ここ数年多分増えている。私の同世代の方も拠点を滋賀に移した方もおられ、物件が安く借りられたり、ちょっと広い面積の建物を借りれたり、京都とかへのアクセスもよかったり。湖西の方にもアーティストが多い。滋賀を選んで来ているアーティストとかもいるので、そういう方が、活動しやすい場になったらいいなと。
- ・今日お伝えしたいのが、「芸術準備室ハイセン」。去年だったか、新しく立ち上げられた。すごく新しい場というか動きだなと。もともと大学の演劇部だった人たちが、発表の場はあるけど創作の場が少ないということを思っていて、大津の保養所の施設を使って舞台美術を作る場だったり、どんなことでも使えるようにしていきたいということで、短期間でも長期間でも、どんな形でも対応できるように、何かを作りたい人が滞在してつくれる場所を立ち上げられた。制作室よりももっと柔軟性を持った場が自分たちの活動の場としてあったらいいなという構想があって昨年立ち上げられた場所。
- ・発表の場があっても、制作をする場、山中 suplex だったり、滋賀県にも共同アトリエが近年増えてきて、でもまた違うような形で、誰でも使える、長期滞在もできるし、モノづくりを始めたいビギナーの人から経験のある人まで、いろんな人に使って欲しいと広く開いておられるが、本当にこれまで滋賀県にはなかったところだなと。若い人がそういう問題意識を持って立ち上げられたのがすごく面白いし、いいことだなと。こういった情報とかも共有できていったらいいなって。
- ・あと、京都でいいなと思っていたのが、京都市文化芸術総合窓口があって、ここで芸術についてのあらゆることを相談できる。元明倫小学校という廃校の小学校を使った展覧会とか舞台芸術とかをするような施設があって、そこに窓口がある。これが京都市のHPにも掲載されていて、確定申告のこととかも相談できたり。
- ・滋賀県でもアーティストが一定数いるので、先輩に相談することはできるが、例えば確定申告のこととか個人的に聞いたら時間も割いてしまうし、こういう広く公に開かれた機関があると、相談しやすいなと。なかなか滋賀県でするのは難しいかもしれないし、京都は需要がたくさんあるから成立すると思うが、できていったら理想だなと。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・私が大学卒業した直後とかから比べると、滋賀県に同世代のアーティストがすごく増えてきているという感覚がある。これからアートを志す人や若いアーティストだけじゃなくて、アートマネジメントをやりたい人が、気軽に相談できたり、わかりやすく繋がりと、いろんな立場の人だったり、いろんな県民の方が文化に触れる機会も増えることにも繋がるし、もっと良い交流だったり、繋がりたいなものが今後できていくと、もっと健全に活動ができていくかなと思う。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（高力委員）

○ヒアリング日程

2022年6月7日（火）10時00分～11時00分 ZOOM

○委員

高力 容子さん（一般社団法人近畿健康管理センター 経営企画本部経営企画グループ
グループマネージャー）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・現在、経営企画グループで、会社全体の経営方針であるとか、それから健康診断だけじゃなくて、「見る健康からつくる健康」をテーマに、検査だけじゃなくて、その後の健康増進にも力を入れていきたいので、そのあたりの商品の開発を産官学連携でできないかと。
- ・私ども近畿健康管理センターも、コロナ禍の最初は本当に大きなダメージが。健診の受診率も下がって、ぐっと業績も落ちたタイミングがあった。ある程度落ち着いてきてからは業績も回復したので、他社様と比べると健診という業種柄、影響度は低かったかなと。
- ・逆にコロナの中で、基礎疾患があれば重症化するという情報も出たので、意識されてる方はより健康管理に意識が高まったと思う。
- ・ただ、感染リスクを下げるために、健診のスケジュール、1時間あたりの人数を減らすとか、消毒の徹底で、健診事業としては時間や手間ががよりかかるようになったり。DXとかIT化ということがあるので、それと絡めて進めていく必要があるかなと。
- ・私ども健診機関としてSDGsの推進も強くやっています。私たちができるSDGsというと、一つは健康の部分。より多くの方に健康になってもらうためにどうするかというところと、環境への影響ということで、二酸化炭素を減らしていくこと。バスの健診巡回でガソリンや軽油、電力も必要なので、蓄電池を搭載しているバスにシフトしたり、CO₂フリーの電力に切り換えていったりとか、ちょっとやりかけてるところ。あとは社内の会議もうまくWebを活用して、東京、名古屋、大阪にも事業部があるので、出張回数を減らすということも取組が開始してるかなと。
- ・DXをきっかけに、健診って紙で動いているけど、それをなくしていこうと、クラウドのシステムを健診全体に使おうと進めている。健診結果を年間70万件以上送ってるけど、それが全部クラウドで見られれば、紙も削減できるし、物流のコストも削減できるかなと。
- ・コロナの影響が健診結果で何か出てくるのは、これからかと思うが、テレワークが進んで従業員が集まる機会がなくなってメンタルヘルスのところが気になるという声は聞く。健康診断では集まるので、健診というのをみんなが会おうイベント的なものにできないかというご相談を受けることもある。テレワークが進むことで、働きやすくなる面もあると思うが、一方で自分の生活リズムを崩してしまう方も多くおられるので、一つ課題なのかなと。
- ・「気づいてつなぐはたちからの健康づくり」という大学生の健康づくりを、滋賀県の委託事業を受託して2年間していた。特設サイトをつくって大学生に意見をもらう形でやったら、自分の健康を意識して投稿してくる。若い人はどちらかという健康には関心低いかなと思っていたけど、意識を持っている方々は多いので、そういった方々にちゃんとアプローチする必要があるのかなと。
- ・コロナで、より健康志向が高まった層の方々もおられる。ただ二極化がちょっと進んでるんじゃないかなと。すごく意識が高くて、食事もお気をつけて、運動もやってという層と、おきざりになっているような層と、二極化がこれから進んでいくんじゃないかなと思うと、全体を底上げしていくことができないといけないのかなと。

2. 今後必要になると思うことについて

- ・地域の方々への健康啓発をやりたいと目標を掲げていて、健康という切り口じゃなくて、例えば美容とか、旅行、ヘルスツーリズムっていう切り口もあるかなど。
- ・1つすごく課題だと思っているのは、特定健診、特定保健指導には引っかからないけど、フレイルとかココモティブシンシンドロームとかサルコペニアとか、年齢によって筋力が落ちてきてしまって、将来寝たきりになるリスクが高くなるという人たちをどうフォローアップしていくのかと。筋力の低下は、気づくのが結局高齢になってからで、もっと若い、働き世代からちゃんと示していかないと、もっと早く知っておきたかったと思うんじゃないかなど。
- ・特に足腰の筋力の低下っていうのは、若い女性が、今大学の方でも課題になってると聞いたけど、低筋力で、握力測っても、体組成測っても、筋肉量が少ないと。本当は30代ぐらいまでがピークなんだけど、もともとのピークが低くなってしまくと、そこから筋力が落ちるの早くなってしまふ。そういうの方々に対してのアプローチは非常に重要じゃないかなど。
- ・運動習慣も一つ課題だけど、例えば女性で、家庭があって、仕事もフルタイムでという方はすごく睡眠時間も短くなって。睡眠に対しての満足度が一番低かったりする。そう思うと運動だけをやろうというのではなく、トータル的に健康で気持ちよく過ごして体も保てるみたいなのところが必要なんだろうなと。
- ・もう一つ、大きな課題だと思うのが、運動指導ってどうしてもボランティアに委ねるようなところがある。これだけ健康や運動の専門性を学んだ学生さんがいても、その専門性を生かして就職されてる方って本当に少ないと思う。運動の専門家が支援をすることで、その人が健康になっていって、そこにはちゃんと職業としての役割があるといいと常々思っている。
- ・私たちはので、健診やって、そのあとに改善ポイントを見つけて、ちょっとずつ改善に向かっていただく健康をつくっていくことが仕事であって、検査をやってその結果が生かされないのであれば、私たちの社会的な使命っていうのはあまり意味がないというところが大事だと思っている。そういう面でも、紙で結果返したら終わりじゃなくて、クラウドで、例えばアプリが何かにして、すぐに質問とか、二次検査やったほうがいいのか、欲しい情報が取れるとか、そういう支援をしていきたいと。自社開発だけでは難しいので、地域や大学、企業様と連携してできたらいいなど。
- ・学校の時の体育で、苦手だった人は結局そのまま大人になって健康教育をやったときに、やっぱり運動に対して苦手意識がある方がおられる。健康のためにやる運動っていうのは、別にバスケがうまいとかそういうのではないので、そこらへんをもっとつなげていけたらいいのかなって。食事面でも、学校では例えば時間内に早く食べましょうって、給食とかで教育されるけど、大人になったら早食いが良くて、ゆっくり食べましょうと。正しい情報とか知識を提供する繋ぎの部分がないのかなと思うので、何かアプローチしていけたらいいかなど。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・安全とか、安心して暮らせるところじゃないかなって。災害も非常に少ないし。あと食べ物がおいしいとか、安心安全で、お米なんかも作っておられるところが非常に多い。子育ても非常にしやすい。子どもを育ててきてずっと信頼できる先生方とも出会えてるし、非常にありがたいな、幸せだなと感じている。
- ・やっぱり働きたい時に働けるとか、そこらへんも一つなんだろうなと。近所の方々でも一旦子どもができて主婦になって、中学生とかになって働き出している方とかおられるが、正社員として地元の企業で働いている同世代の方もいるし、そういうのって幸せだなって、働きたい時に働けるってすごいいいことだなって思う。私どもの会社でも、正職員とパートナースタッフがいますが、例えば子どもが小さい時はパートナースタッフで、時間的に調整がきいて、そこから正職員になる方もいて、そういう制度がちゃんとあるのはその方々の生きがいとか働きがいにも繋がってくるので、すごく大事だなって。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（高橋啓子委員）

○ヒアリング日程

2022年6月7日（火）13時30分～14時45分 対面（1-C会議室）

○委員

高橋 啓子さん（元聖泉大学副学長、審議会会長）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・ カウンセリングという切り取った社会の断片なので、木を見て森を見ず的などころもあるが、感じることを率直にお話したい。
- ・ 以前、コロナの影響について予想を聞かれた時、「中高年男性の自殺が増えるのでは」と言った。実際は女性の自殺が増加傾向、子どもも同様の結果が報道され、ショックだった。以前から女性は労働の調節弁だと警告はされていたけれど、私は危機感が薄れ、なんとか回っていくのではないかと思うようになっていた。
- ・ 不安定雇用についても、「母子家庭にはなったけど、DVから解放されて2か所掛け持ちだけど、子どもとなんとかやっています」と聞かせていただき、笑顔に救われた。ところがコロナが深刻な影響を及ぼしはじめ、雇い主に「様子を見るので自宅で待ってて。また声かけるわ」という保障のない状態で、保育園も休園という現実の前に「じゃ、どうしたらいいのか」と。私は表面だけで甘くみていたと痛切に感じた。女性の貧困と子どもの連鎖。
- ・ コロナ禍の中で、あえて得たものを探すとすれば、テレワークをはじめとする働き方や学び方の方法。柔軟に考え、やろうとすれば可能になることが分かったこと。けれども「当たり前じゃない」。いい環境で通勤の時間もわずらわしさも気にせず、家族の時間も増えて・・・という人たちと、感染は怖くても、そこに行かないと仕事にならない人が二分された。千円足らずの時間給がもらえないと死活問題なのは学生も同じ。配信授業を始めると、家にWi-Fi環境がない、パソコンも家族共有でその時間は無理とか、子どもの貧困率を考えるとパソコンもあって当たり前じゃないことを痛感して、不公平にならないよう手当するのに必死だった。国と地方自治の役割についても考えさせられたし、結果的には会議や行事も、なくてもやっていけるものがあることにも気づかされた。嬉しかったのは、不登校で単位が不足していて無理かなと思っていた学生や生徒が、配信授業になったので無事卒業できたこと。教師もオンライン授業に工夫をこらしていた。このことは忘れないでおこう。不登校生徒〇〇人越え、なんていう中で、これからの「学び方」として真剣に開発できると助かると思う。
- ・ 医療現場の献身的な支えには、近くで仕事していて感謝、尊敬しかない。けれども、コロナ病棟に「行きます」と手をあげた人も「子どもも年寄りも同居で無理」と頭をさげて断った人も、それぞれの傷つきはあった。
- ・ 人間関係が希薄になる 言葉の重みを感じたのは、新しく入って来た職員さんが自死されたあとのサポートを依頼された時。過去、何度かしてきた仕事なのに、偶然とはいえ複数の職場に関わったのは言葉にできない思い。職場の同僚や上司のお話を聞かせていただき、ストレスチェックやフォローをする。「入ったばかりの人で、じれったいほど情報がない。飲み会でもあれば、絶対仲良くなっていた」と悔しい思いを話してくれた人。「正直、マスクの顔しか見たことがなかった。葬式で満面の笑顔のご遺影を見て、涙がこみあげてきた。自分を責めるしかない」とカウンセリング中もずっと泣いておられた。「なんで?」「もしかしたらあの時声かけしていたら」と。残った人たちの長い苦悩が少しでも和らげることが出来るならと思う一方、人はやはり人とつながっていることで、大切なものを育てている。職場に仲間がいて、学校に友だちがいて、家に帰ると居場所がある・・・なんでもない当たり前のことが当たり前ではなかった。
- ・ コロナ禍にあっては、子どもも教師も孤独。学校に行けない子どもたちと子どものいない教室にいる先生と、つなぐためのツールがもっと完備できるようになるだろうか。先生方の研修も配信に切り替わり、今年はアンケートや質問を共有する形に内容をシフトしてみた。「このやり方でいいのかわ不安。先輩のやり方を見たり教えてもらえると・・・」という心境から一変、学校が始まると超多忙。授業や生徒指導や保護者相談に部活指導に教育相談。学力アップ、いじめや虐待、家庭の相談その他。置いてきぼりにならないように、じっくり時間をかけて一人の子どもに教えてあげてほしい、間違ったらしっかりこころのうちの聞いて導いてほしい、命に係わるいじめを軽視したり見逃さないでほしい

い、家族の影響も大きいので、虐待や親のしんどさも相談にのってほしい。正直、スクールカウンセラーをしていた頃より、今の教育現場は忙しすぎるという感じがした。

- ・家の近くに公園があって、中学生5~6人が真剣に鬼ごっこ。数時間大声で名前を呼び合ったり、グループで見つからない子を探してチームワークよく手分けしていた。結構大きな子どもたちが日が暮れるまで遊んでいた。何が面白いのかな。探してもらって、仲間と力を合わせて目標を果たす、名前を大声で呼び合いながら。子どもも大人も所属出来て認められて役割を果たしたいのかももしれない。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・多職種、多機関によるネットワーク。一つの組織や機関で出来ることは限られていると思う。情報を共有しただけで「連携している」などと薄い情けじゃやっていけない。誰一人取り残さない覚悟で背負いあうしかない問題が社会にはあちこちあると思う。
- ・一つはヤングケアラーの問題。教育と福祉の連携はよく言われるけど、ここだけでも足りない。ケアラーというと、家族の病気や障害、下の兄弟の世話などが浮かぶ。心理的なヤングケアラーは潜在的に当たり前にいると思う。例えば、父親は他に好きな人がいて、本当は家族を捨てて離婚したいのだけど、母親が同意せず、怒りに任せて「お前はもう女じゃない」「顔を見ると食欲ない」「出て行ってくれ」など日常的なDVの中で子どもは育つ。小学校低学年の長男が、新しいエプロンをつけて台所で働く母親に「とても似合ってるよ」「お母さん可愛い」と声をかける。中学生の長女は「私はDVなどされてない」と抵抗する母親を引っ張ってやってくる。「カウンセラーさん、お母さんの話を聴いてやってください」とまっすぐに見上げる。ヤングケアラーという言葉がなぜか頭をよぎった。
- ・「カウンセラーは何が出来る？」ずっと問いかけてくる言葉。犯罪被害者のカウンセリングも、ハラスメント相談も。ハラスメントの被害に耐える人は、傾聴しかできない私にも「聞いてもらい元気が出たので、もう少し頑張ってみます」と言ってくれるけど、過酷な明日はまたすぐやってくる。人間には限界がある。メンタルな病で休職されるか退職決意されるか、私だけでは無力。ハラスメント防止委員会と両輪で頑張りたい。
- ・教育現場と社会の接続も大事。障害がある人は一人ひとり違うけど、学校出て介護の仕事が推奨されがち。ただ甘い仕事じゃないことはみんな理解している。「ここがダメ」「ここをしっかりと」と言われると、もともとない自信がもっとなくなり自尊心が疼く。そこにずっと入ってくる風俗関連の仕事。「きれい」「指名ナンバーワン」とほめてくれ、収入は大差。親が連れ戻しても、また出ていく。お母さんが「大切に育てた。性的搾取されるためじゃない」と泣かれた。選択肢が少ない職業選択。心理士も孤立しては「専門性」は生かせられない。
- ・母子二人きりで生きてきた母親、ある日突然重病が見つかり即刻入院、緊急大手術になったら？親も頼れずまずは子ども、その晩からどうする？母親は長期治療、解雇されたら？(治療と仕事の両立支援などの機関等)
- ・発達障害も就労支援は頑張っていたらいいと思うが、もっと選択肢あっていいかと思う。人によって本当に違う。以前、LDの子どもさんをととても頑張ってお母さんのカウンセリングをさせていただいた。ある日、「うちの子、今度給食当番するんです」ととても嬉しそうだった。次の相談日、「失敗して迷惑かけました。何も出来ない、無理です」としよげておられた。当番の日、カレーの鍋にお玉杓子がついてなかったので「誰か取りに行つて」と先生が声をかけると、彼が初めての当番で張り切って「ハイ!!!」とかけに行った。帰ってこず大騒ぎで給食どころでなかったそう。とても幸運なことに、かなり後、子どもさんから話を聞いた。「先生がお玉とって来て」と言った。ハイと言って走りながら「お玉」を考えたら、前に「親子料理教室」で行った所の壁にいろんな大きさのお玉がいっぱい並んでたのを思い出した。あそこでいくつか取って来ると何人かでカレーが早く配れる。そしたら早く遊びに行けると調理実習室に走つたらいい。当然鍵がかかっていた。うろろろするうち見つかって叱られたらしい。私はとても感動した。多くの子どもは給食の配膳室に行つて「お玉ください」と言うだろう。仮に配膳室に人がいなかったら、調理実習室を思いつく子は何人いるだろう。通常とは異なる思考回路や発想を「素晴らしい」と思う。発達障害という名のもとに「不正解」にしないでほしい。同じ場面に遭遇することで、きつとお互い学び合えると思う。勿論、現状はそう甘くないという声は虚心坦懐に受け止めたい。SDGsもそういう意味では発想や価値観の転換を必要としている。なんとか向かおうという心意気が実効になり成果もある。
- ・ひきこもりの相談は多い。なぜ一様にひきこもりと表現してしまうのか。食事を運んでくれる家族がいて成立するので、ある意味拒食と同じで「文化のバイヤス」が掛かっているが、引きこもって何を

しているのかと言うと、孤立はしてなくて、ネットを通して情報はいっぱい、対話する相手やゲームの中のアバターが活躍している場合さえある。どうしても、「ひきこもりの解決は本人の就労だ」というパターンから抜け出せないで焦ってしまう。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・「子どもが子どもとして生きる時代は大切」と河合隼雄先生がよく言っておられた。意味わかんないと思っていたけれど、いつまでが子どもかという、最近 MRI も進歩して胎児の様子も脳の様子も明瞭に映し出す。それによると、18歳くらいで完了と言われていた脳の成長変化は続いていて35歳頃まで、いやもっと、というところまで来ている。分かるが故に選択肢は増え、私たちの覚悟が問われる。被虐待児は親の保護を頼れず早く大人化して自分の生きる手立てに直面させられる。無邪気にわがまま、適当に自己中でいられる幸せな時期はとても「必要で大切」と河合先生は言っておられたのかも。少年法の改正も選挙権も、まだ成長途中の彼らに与えられた「責任」だとすれば、それを周囲が支援しなくてはならないと思う。容易ではない。多くの人たちのネットワークや他機関との信頼関係がなくては十分ではない。それがタッグを組めるとすれば、子どもたちの(シナプスが刈り込まれる以前)柔軟でシーリングのない力は、びっくりするくらいエネルギーを発揮できると思う。
- ・市町間でも「うちにあるからどうぞ」などの情報のつなぎを県が担って、なにもかも同じ装備でなくてもいい。
- ・社会が循環するとすれば、こんなに楽しい暮らしの場所はない。一人の力も無駄にしない・・・そんな雰囲気のある滋賀県にずっと住んで、おせっかいな人と言われたい。(すでに言われているかもしれないけど)

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（小坂委員）

○ヒアリング日程

2022年6月8日（水）9時15分～10時15分 ZOOM

○委員

小坂 真理さん（東海大学教養学部人間環境学科 特任準教授）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・コロナのことで言うと、大学に限らず、社会全体が遠隔にしようとする時期頑張った時があったけど、最近では遠隔はもうそんなに重要じゃなくて、対面でいいんじゃないって昔に戻りつつあるのを見て、非常にもったいないなって。テレワークに変える時に、ものすごい努力が必要だったと思う。機材などお金の面も、人々の意識も、一生懸命変えていって、遠隔なりテレワークでいったら「案外できなかったことが、両立できるような状態になった」っていう人が少なからずいたと思う。
- ・妊娠中や子どもが小さくて仕事復帰した場合や、不妊治療との両立など、仕事と家庭、仕事と治療の両立がテレワークで可能になるということもある。働くうえで遠隔でよかった点を今後洗いざらして、こういうふうな働き方が今後できるんじゃないかって企業なり団体なり組織なりがやっていくととても生きやすいんじゃないかなって。折角、遠隔というのがここまでできてきたのに、「こんな簡単に手放すのか」って私は最近思っているのが1点。
- ・他方で、大学生・高校生とかは、対面の時期が余りにも短すぎて、遠隔の良さを言ってもあんまり響かないんですよ。うまく対面との比較ができない。夢のあることを言っても、それがあまり夢として響かないというのを、すごい感じた。他方で、学校で対面授業が増えたけど、うちの大学の場合は、大学生は遠隔を好む。その点大学の先生もみんな「あれ？」ってなって。
- ・仕事以外では、子育て中だけど、コロナのせいで子育てがしにくいなどというのはなかった。ただ、私の場合は、夫と私の育児分担が、平等だって感じられるぐらいなので、全く影響は感じなかったのかなど。夫の立場にある人がどれだけ育児に参加できているかによって大きく変わるかなど。やっぱり新聞の報道でデータとか見ると、コロナ前とコロナ中でどう変わってきたかって、女性の家事育児労働も通常よりもやらないといけない仕事が増えたというデータが出ていたので、やはり女性は大変だったと思う。それは家の中で男性が頑張ればいかっていうと、多分それだけでもない。社会全体があって、男性が働いている企業自体も少し変わらないと。大きなループの中でどう変えていってということなんだと。
- ・ただ最近学生と話してびっくりするのが、最近の男子学生は「育休は取るつもりです。」とか「育児するつもりですよ。」っていう前提で話をする。もう認識自体が最近では変わってるんだろうなって。願わくば、彼らがどっか企業に入って、できるだけ意向が反映されればいって。

2. 今後、必要だと思うことについて

- ・資料に沿うと、1「人」の政策5「子どもをたくましく」のKPIを見ると、どちらかという、認知能力を見ているパターンが多いと思う。学習状況とか、それもすごい重要だと思うけど、加えて多様性を認めるってところが、子どもの時からの教育ですごく重要なのではないかなって。例えば性的マイノリティであったり、LGBTであったり、外国人の学生生徒さんだったり。2014、2015年以降にLGBTも日本でちゃんと光が当たるようになって、人々の認識が増えてきて、だけど、やはり小さい頃から多様性を認めるって教育がそんなにまだなされてないから、学校でもすごい生きづらさを抱える子どもも多いし。
- ・人権に関するところが経済のところでも重要になってくるのではないかと思う。人権やジェンダーの話はある程度大人になってしまっただけで価値感が固まった人に対する教育もすごい重要だと思う。ただ、そういう教育の機会ってそんなにない。大人って、古い概念をアップデートする機会がやっぱりない。それを生涯学習と言っていいのかわからないけど。意見の共有が必要になってくるのかなって。

3. その他の質問

Q. SDGsの動きについて

A. 最近よく言われることで私自身も非常に危惧しているの、どうしてもSDGs＝環境と取られてい

るところは非常に強い。或いはSDGs=キラキラした目標みたいな、SDGs=美しいみたいな、実際はそんなわけではない。SDGs採択されてから、もう7、8年、もう次の段階にいかないと。今意識向上のフェーズにいるのはちょっと遅いのではないかなって。

学生も、SDGs=ごみ拾い、脱プラとかフードロスとか。それも確かに入ってるけど、その背景にあるSDGsのもっと重要な部分だったのは、いかに取り残されたグループの人を、SDGsっていう概念なりその目標を使うことによって、少しでも生きやすい状態に持っていかれるかどうかっていうことなんだと。2030年までにどんだけそれができるか。それはなかなか一般には伝わってなくて、その点が今後非常に重要になってくる点ではないかな。

それは教育の面でもそうだし、ビジネス・経済の面でSDGsを考える時にも。やっぱり人権の側面。企業とSDGs、ビジネスとSDGsっていう時に人権の概念というのはポロって落ちていく。CSR報告書などでも環境面はすごい分厚い。目標もしっかり立ってる、時系列でデータも綺麗に出てる。他方で、人権の面はページがすごい少ないし、2030年の目標を立てているわけでもない。多分今後日本の企業が力を入れていかないといけないのは人権の部分ではないだろうかなって。

人権でも長時間労働とか、現在の奴隷制の話だとか、安全な環境にあるとか、ハラスメントであったりした部分が入ってくると思うけど、技能実習制度もありますよね。そこで結構現代の奴隷制度ではというような批判を他国から批判されたりというようなことがあるので、制度の見直しというか、現状認識は重要なんじゃないかなって。経済の政策のKPIの中にも何かしら人権に関するものがあるんじゃないかなと。

よく最近、中小企業にインタビューをするけど、先駆的な取組をしている企業に焦点を当ててきてるんですけど、SDGsは「ビジネスのネタとして使われていることが多い」とか「ここにバッチつけてはい終わり」というふうなことはよくおっしゃっている。今、中小企業って大きな役割を持つと思う。大企業がSDGsに取り組むって当然で。中小企業がサステナビリティに関する政策への関与を与えられているかっていうのを分析していると、結構いろんなところで、活動をされているなど。評価されている中小企業っていうのは、分野にとどまらない。例えばプラごみを減らそうとする企業があって、小型の燃焼ボイラーみたいなものを作って自分のところで燃やして効率もすごく高くして熱回収をするっていうことをされている企業が北海道にある。この企業が面白かったのは、それを自分のとこだけでなく、近畿ツーリストとかリコーとかと組んで、自分の機械を対馬に持って行って、対馬でエコツーリズムをやって、その時に自分のとこの機械を持って行って、海岸線にあるごみを取って、燃焼させてエネルギーに変えるっていうところ見せるという教育と観光と環境面を全部合わせようっていう作用を起こしてる。一つの中小企業、そんなに大きくない中小企業が。自分が他のところと合体して何ができるかって言うのをすごく考えている。そうやって地域の活性化をやっていこうと。環境も良くしながら自分のビジネスにもつなげながら、観光にも良い影響が与えられるようになって大きな視点で見て、非常におもしろい一例。

(行動を促す手法として) 企業とか団体なら、基準の導入とかありうる。いろんなタイプの基準があると思うけど。認証制度にもいろいろあって、行動変容を起こさなければ取れない認証っていうのもあるので、その部分の教育はある程度必要じゃないかなって。

大学で大学生にこの問題について、何ができるかっていうとみんな簡単なことしか言わない。「ごみを拾う」とか「ばい捨てをしない」とか。必ず私はそこで言うのは、「それは小学生が答えるレベル。あなた、大学生でしょ、情報理工学部にいるあなたは何かできるか。」って質問何回か繰り返して意見を導くようにすると、「僕ができるのは多分アプリを作ることだと思う」とか、情報系の人だとそういうレベルまでようやく行く。自分の能力をもって、自分の立ち位置をもってできることは何かっていうところまで人々の考えがまだ及んでないっていうのがあるなって。

女性の意思決定機関のレベルへの参画って非常に重要。でも必ずしも女性が、残りの女性の意見を代弁するわけではないなど。例えば今の女性の議員の発言を見て、それはそんなに残りの女性の意見を反映したものではないって思うときもある。やはり女性にもいろんな人がいるので、母数を増やすことは非常に重要なんだって最近感じる。前は女性の議員がいれば女性の意見が反映されると思って。でも必ずしもそうじゃないと思って。女性の中にも多様性があるので、いろんな意見を出してくれる人が意思決定の中に入るっていうのはやっぱり重要だなと。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（小玉委員）

○ヒアリング日程

2022年6月10日（金）11時15分～12時05分 ZOOM

○委員

小玉 恵さん（株式会社たねや 執行役員 経営本部 本部長）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・コロナ禍では、首都圏に出店も多くあったので、かなり運営をストップした。ラコリーナでも、約1ヶ月ほど店舗を閉めると事態で、経営的には非常に先行きが見えない中で不安な状態で、雇用調整助成金を活用させていただきながらやりくりしたというような流れ。
- ・販路をコープさんであったり宅配のところ、または首都圏から郊外に出たデパートのようなところへの出店に切り換えて、何とか持ち返したというようなところ。全体的な売り上げはコロナ前には戻ってないが、かなり社内でのコストコントロールをした。人件費は切っていないが、見直せるコストを絞って利益は戻っているような状況。全分野的に各コストに対する責任者を立てて、全部経費を洗い出して、いる、いらぬの必要性をすべてにおいてふるいにかけて。全体の目標値を決めて、コストコントロール委員会を定期的に関経経過報告含めて、他部署や全社に対して発信していくものであるかを調整しながら進めてきた。コストの可視化というところを、全所属長が見たうえで、かなり切り詰めて精査した。
- ・昨年の秋から徐々に持ち直してきて、浮き沈みはあるものの、私たちのモードはしっかりスピードアップに切り換えて進めている。今バームファクトリーをラコリーナの施設内に一つ作っていて、部材の調達で来年のオープンになりそうだが、設備投資を進めながらやっているという状況。
- ・（学校や保育園が休園になり女性に負担があったと言われているが）もともと女性が多いので耐性があり、リモートに切り換えたり、学校、育児優先でというところは風土として根づいているので、そこは難しくなかったかなど。
- ・先行きが見えないので採用等を絞っていたところがあった。コロナ後復活してきたときに、店舗自身が足りない、製造が追いつかないという閑繁のギャップに一時期対応しきれないことがあった。店舗内に残業が発生したりということは、一時的にあったかなど。

2. 今後、必要だと思うことについて

- ・弊社もグリーンディールには非常に取り組んでいて、環境経営という視点、ラコリーナのような景色を作っている。滋賀の最大の魅力は、それぞれの地域に根づいた文化であり、自然資本なのかなど。環境劣化対策、カーボンニュートラル、琵琶湖を有していることで水環境の保全であったりとか、弊社としては関心が高い。
- ・あとは食品。お菓子の製造なので、廃棄物の削減であったり。あと社内というウェルビーイング。今、女性活躍はもちろん大切にしているテーマではあるが、一方で介護という視点ですね。多様な人と一緒に働くところでは障害者の雇用の部分も含めて、窓口を作ったり、専任で置いたりを進めているので、滋賀県の取組で期待するのは、やはり環境と働きやすさの二点かなど。
- ・SDGsについては色々な取組をしているが、やはりインクルーシブなゴール設定があり、間接的な目標で世界共通の言語というところは、私たちができていること、できていないことを整理する一つのツールとしても、お客様も含めて、従業員に関心を持ってもらうきっかけとしても、非常に大切な位置付け。ただ、経営という視点で見たときには、やはりSDGsだけではなかなか不足かなど。課題の抽出ができにくかったりしますので、そういう意味では、やはりできていない部分とか、私たちの課題と地域の課題を含めた世界の課題という、そういったところをきっちり見た上で、私たちがお菓子の製造販売をしていく中で、やるべきこと、やらなければいけないことを今やっておかないと、あとで、大変なことになるという企業責任のもとで、グリーンディールを進めていくというような考え。
- ・どちらかという、お菓子を作り提供する原材料の調達から最終お客様の手元に届くまでというところを見ると、まだまだ課題がたくさん残されている。上流下流含めたいろんな意味で、私たちの商品が、あらゆるタイミングでネガティブなことがないかしっかりと見極めながら改善していくことが

必要で、それはSDGsとはあわせては考えているが、もっと別の深いところでやっていかなきゃいけない取組みかなど。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・幸せを感じやすい環境が滋賀にはたくさんあるなど思っているし、基本構想に「幸せ」という文字が入ることはすごく素晴らしいと本当に思っている。
- ・県外の方に魅力的に滋賀を発信するなら、琵琶湖の周りにあるようなアドベンチャーツーリズムとかアクティビティもそうだし、自然、ラコリーナの景色は、やはりビルの中でお菓子を売っていても、多分お客様これだけ来られないと思う。コロナ禍でもここに来られるのは、この地域の方が守ってくださっていた景色であり、生き物だったり、四季が織りなす景色の変化だったりとかで、近江八幡にかかわらず、滋賀にはそういうシーン、場所が地域の方が守られていてたくさんあると思うので、そういうところが最大の魅力かなって。

4. その他の質問

Q. 地域の方と一緒にされる取組は。

A. 私どもの取組の中で、竹林整備をさせていただいたり、地域のお祭りを施設内でしてもらったりとか、大学、小学校、中学校などと連携したり、実証実験の場にしていただいたり、まちづくりのフォーラムとか施設内でしていただいたり。そういう意味では地域の方に主役になっていただいて、私たちはプラットフォームになるようなイメージで、いろんなことをさらにこれからもやっていきたいと思う。

Q. ウェルビーイングや女性活躍の取組をもう少し詳しく教えてください。

A. 私の部署は独立した経営本部という部署で、社内外の幸せづくりと私たちのグループがこの地域にあってよかったなって思っていたけるようなところをやっている部署。部署の中に幸せ推進室というのがあり、その室長は保育士経験のある者で、その者が中心でウェルビーイングをやっている。

本当に細かなことと言えば、妊娠がわかったときの面談だったり、それをサポート、伴走するような役割にしていたり、社内の育休中の女性を含めたワークショップだったり、社内の中でのイベントを通じてコミュニケーションを取っていくところに地域の方も一緒にやっていくってということなども。メークアップ教室をやったりとか、健康診断の後の読み解きセミナー、給与明細をちゃんと説明するっていうことをやったり。

弊社は復帰率が非常に高く95%ぐらいかな。面談を所属長ではなく、幸せ推進室がやっているところに意味があって、妊娠がわかった時点で伴走担当者がついて、自分の働き方とか、妊娠中から復帰の後、手続き、子育てというようなところ。あとは忙しい部署ならなかなか言いにくいことがあったりするので、独立した本社の担当者が、それを聞いて本人の希望に合わせた形での復帰というところをサポートをしている。

Q. 健康という切り口では？

A. 健幸たねや、健幸クラブハリエを合言葉でプログラムをやっている。特に今本腰入れてやっているのはたばこ。たばこを辞めたいと言われる方に寄り添うような活動を今始めている。

健康づくりっていうところで、年に一回、チームを組んでエントリーをして目標達成したらご褒美があるよっていうようなチーム制での取組をゲーム感覚でやっている。

- ・ 県の報告書ではそれほど山の問題は深刻ではないという評価になっているが、同様の琵琶湖流域の評価を尋ねるアンケートを安曇川流域の住民を対象に実施したら、森林に関する課題をすごく感じておられた。森林に関しては、地域の人が考える課題と行政・専門家が見ている視点には少しギャップがあるんじゃないかなという印象を持った。
- ・ 琵琶湖流域の評価について、行政・専門家と住民の意識がちょっと違うなともう一つの点として、野洲川流域・安曇川流域の回答者はどちらも南湖の水質あんまり良くないと評価していたが、県の報告書では「悪くはない」となっている。主観的な感覚と専門家が見てる測定データにギャップがあるなら、そう言うことを論点に話ができるんじゃないかと思う。住んでいる人や利用者しかわからない現場の様子を把握して、それについて県の政策を検討していくというプロセスそのものが滋賀県らしさになってくる様に思う。
- ・ この審議会で医療関係者の方や子どもや障がい者に関わる方のお話を伺うと、人の命や日常生活に関わる分野のほうが環境より大事なのは自然なことだと思う（笑）。その中で環境の問題がどう扱われていくかはこれから考えなければいけないと思う。暮らしの周りにある環境として、どういう環境が心地よいかという暮らしと環境の繋がりが見えれば環境問題も置き去りにされない。長期的で暮らしに間接的な影響を与える環境課題と直接的な人や暮らしの課題をどううまく一緒に進めていけばいいのかなというのは難しい。
- ・ 環境活動は何かを我慢したり、特定の人がすごく一生懸命頑張るということではなく、活動を実施する個人が心地が良いということが大事。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・ 何に幸せを感じるか、幸せの考え方がすごく多様化していて、幸せを感じるメニューをたくさん出せるポテンシャルを滋賀県は持っているのではないかと思う。自然環境がいいのもそうだけど、人の繋がりとか、現場で対面で何かを感じ得るっていうことが多いように思う。また、誰かと一緒に何か行動したり遊んだりすることで感じられる幸せがたくさんあるような気がしている。
- ・ 私は歴史的な滋賀の魅力を感じる事があって、そういう文化的なものとか、暮らし方を感じられるのは、私としては心地良く、日常的なエネルギーになる。アナログの良さみたいなものが、滋賀県にはたくさんあるような気がするので、スマホの画面ばかり見るのではなく、そういう幸せを感じられる県って言えたら良いなと思っている。

4. その他の質問

Q. アンケート調査の項目立てについて

A. 行政でとるアンケートと、研究でとるアンケートは目的が違うので、参考になるかわからないが、研究で実施するアンケートの場合、設計段階が非常に重要で、まずは今までの先行研究の論文をたくさんみて、何がわかってるのかとか、どういう聞き方をしてるのかっていうのを参考に作る。影響要因（何が何かに関係してるのではないか）を検証したい場合が多いので、関係しそうな項目を全部挙げて尋ねたいけれど、回答者に負担を与えないように注意しなければいけない。私の調査ではほとんど6段階の尺度で尋ねる。

行政が実施するアンケートで、例えば、ほとんど実施することが決まっている政策があって、その必要性や満足度、課題を聞くものがあると思うが、アンケート設計する時はその後の分析方法まで踏まえて調査票を設計するとよいかももしれない。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（川口委員）

○ヒアリング日程

2022年6月14日（火）14時00分～15時00分 ZOOM

○委員

川口 洋美さん（ツールドラック代表取締役）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・ コロナがあって2年半ぐらい、仕事が本当に全然なくなった。私が懇意にしているインバウンド界隈の方は、なんとか耐え忍んでいる方がほとんど。やめるとか、業態替えするとか、いろんな助成金も出ているけどそれで業態をラジカルにかえることができる人ってそうそういない。みんなプライドもってベースもつくってやってきているので、またころっと何かを始めるってなかなかできることではない。
- ・ 私も同じで、インバウンド専門じゃなくて、他の観光客、日本人の方もお相手にするとか、そこから派生したような仕事もするとか考えたけど、やはり基本に立ち返ると、なぜこれをしたのかとか本当に色んなことを考えた結果、やっぱりこれをやり続けたいという気持ちがあって、やり続けられる方法を考えることと、また次の危機が訪れた時、南海トラフなど、どうするのかを踏まえて事業をやっていくこと。
- ・ 地域の方々、一緒に仕事をしていただいている農家さん、職人さん、お坊さんとかとお話しをするにつけ、このツアーに期待していただいている、お客様の再来を楽しみにしてくださっている方が本当に多かったので、期待にまた応えることができるように、この期間をなんとか乗り切っていくこと。
- ・ 去年は観光庁の事業に応募して採択していただいて、そのお金で何とか事業をできた。私たちは小さいツアーなので、限られた少数の人に、できるだけ消費単価をあげて単価の方で勝負していくこと、田舎ツアーでありつつハイクオリティのものを提供しようということ、やってもやっても完成という形には程遠いなど痛感しながらやっていた。それでも予算を使わせていただいて、何度もテストの機会を与えていただけたことは本当にありがたかった。
- ・ 今年になってようやくツアーが解禁されたが、個人旅行者はまだ先、あと少し我慢で、ビューローさんのご支援なども受けながら回復するまで乗り切っていきたいと思っている。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・ 中小企業は、大きな会社さんと同じお客さんをとりにいたり、同じようなやり方で事業は到底できないので、それぞれがユニークさを追求していくというか、他の方には簡単にまねができないことをやるのが一番大事なことなんだなと。
- ・ 苦しい現状になると、目先のお金を稼がないと思う人が多いと思うが、それがももとの事業のコアの部分であればいいが、うちはそうではないので、そこを曲げてしまうと、事業のコンセプト自体が変わってきてしまったり、思いのところが、何のためにというところが変わってきてしまうので、絶対避けなければと。例えばととりばやく、オンラインツアーをしようとか、それが決してだめとは言わないけどですけど、ものになるかなと。それが結果的に技術の進歩につながったり、その次につながることはあるので否定はしないが、目先のことを追い求めようとしてそこに走るのには私はやらなかった。支援していただいているからには、目先のことでもやっていかないといけないかなとすごく悩んだけど、そうなるともそのスタンスが変わってきてしまう。今まで来ていただいたお客さんの期待や信頼を裏切るようことはいけないなと。
- ・ ただ大事だなと思うのは、さらに色んな方が、観光業に進出してくると思う。競争は激化していく一方じゃないかな。たくさんのお金も人も動く産業になるんだろうなって。だからこそ守っていかないといけないものがあるって思う。滋賀ならではのユニークさは、マスでは追求できないものだと思うている。
- ・ 良いのは、人がいなくて人が来ないからいい。観光の人には本当に申し訳ないが、たくさん来てしまったら興ざめ。そこが矛盾というか、いつもうちのお客さんが喜ぶのが自分以外に外国人がその場にはいないこと。たぶんこれはいろんな人が同じように思いつつ、事業は継続させていかないといけないので、そのバランスをどうしていったらいいのかっていうことだと。その意味では、なんでもかんで

もオープンにしないでほしいなっていうのはある。英語で「Hidden gem」、隠された宝。この地域がまさに「Hidden gem」。そのへんのバランスを絶妙にコントロールしていかないといけないと思う。

・だからこそ私は客単価にこだわりたいっていうのがあって、少ない人でも充分稼ぎが得られるようになっていくべきだと思っている。それである一定の仕事と環境が保たれるのであれば幸せで、その方が何かあった時にリカバリーするスピードも速いんじゃないかな。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

・地域自体がありえないぐらい貴重な場所。ツアーをやっているから特にひしひしと感じる。すごいところに住ませてもらっているんだなど。特に湖西の地域は、今でいうパワースポット。それ自体がとても幸せだなど。言い過ぎかもしれないが山紫水明の地。そういう自然に恵まれたところが一番ありがたい。

4. その他の質問

Q. 大きな災害などリスクへの備えとしてお考えのことは。

A. 答えにならないかもしれないが、今、比叡山で修行された阿闍梨様と歩こうツアーをやっているが、なぜやろうと思ったかという、危機になった時人はどういうことを考えるのかなと。日本人の根底に、目に見えないものに対してすがる、祈るというものが残っている。むしろ危機的な状況で、人間の力では及ばないところへすがっていきたいという気持ちがあって、これからも続くんじゃないかなって。そういうベシックなところが一番じゃないかなと気づいた。ツアーという形で提供するのがどうなのかまだ見いだせないが、何かしらそこに拠り所を求めたい方たちに提供できるサービスを持っていれば、それが事業の糧になるんじゃないかと感じた。

Q. 中小企業への支援としてこうしたものがあるといいなと思われることは。

A. これは難しい。私は中小企業診断士としていつも人から支援してもらうことを前提に事業計画を考えたらいけない、という勉強をしている。

例えば、みなし法人みたいな方たちへの支援が全然なかったという話を聞いた。実体はあるのに格がないがために支援が得られなかったっていう方がいらっやってすごく残念だと思って。

それと、何かが起こった時は、おぼれている状況をまず救ってほしいという感じ。次の事業に対しての支援金っていうのが出ていたと思うが、次のことなんてとても考えられない、今おぼれているんだから助けてっていうところがあって、それがタイムリーに出てくるとありがたかったんだろうなど。自分のところで内部留保していれば頼らなくても済んだだろうけど、中小企業でそういう余裕があるところってなかなかないと思う。

専門家の方は、たくさんおられるが、もう少し伴走型の支援がそういう時にできたらよかったのかな。コンサルタントに相談するのは躊躇してできなかったりした。今の事業にこだわるべきか新しいことをすべきか、観光事業者ならみんなそうだと思うが悩んだ。そんな時に、ちょっとしたメンタルサポートでも身近にあったら、もうちょっとラクに乗り越えられたのかなって。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（高須委員）

○ヒアリング日程

2022年6月14日（火）16時00分～17時00分 対面

○委員

高須 海地さん（嘉田由紀子事務所所属、Friday for future 滋賀、ウーバーイーツ）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・大学を卒業、4月から東京に移り住んで、嘉田由紀子さんの私設秘書として研究したり、被選挙権年齢の引き下げとかのレポートまとめたりとか、ウーバーイーツもたまにしながら。それ以外の活動で教育アクションって言って教育をこういうふうに変えていこうということを若者中心でやっていく団体を立ち上げて、夏から本格的に始めようと。月に1～2回滋賀県に帰ってきて、活動している。Fridays For Future（FFF 滋賀）も代表は他の子に移したけど、メンバーで活動はしている。
- ・コロナになって滋賀の大学から一旦地元に戻って、ずっと家にはいたけど、ZOOM とかをを使って毎日、友達と一日中課題をやったり、読んだ本を紹介し合ったり、いろんな企画やイベントに参加したことで、コロナ前よりも知り合いが増えたりして、4ヶ月の自粛期間が今の活動に繋がっているなど。一方で ZOOM とかを使わない人は孤独になってしまったり。本当に対極に分かれたのが、ZOOM とか使える人と使えない人。使えないと寂しさを感じるようになったと、友達と話していても感じることもある。
- ・いつも関わっている人達から聞く情報で学校や子どもたちのことで、コロナ禍になって給食の食べ方とかが負担になっていたり、友達と顔を見て話さないことがしんどくなってきたり、不登校の数が今まで以上に増えているっていうのを聞いている。データでも毎年過去最高を更新しているような。僕たちの頃よりも確実に子どもたちが生きづらさ、居づらさを感じざるを得ない。全然楽しくないっていうところ、そこは解決していけたらってすごく思う。
- ・マスクつけさせたくない親御さんが「なしでいいよ」って言ったら、いじめとか受けちゃうみたいで、そういうのでも顕在化した部分もあるのかな。
- ・フリースクールをやっていた友達が、「子どもたちがフリースクールとかに行ける選択肢を持てるような仕組みを作っていく必要があるんじゃないか」と。例えば佐賀県のある自治体ではフリースクール奨学金を月2～4万円ぐらい支給をして。フリースクールは実費になっちゃうので、サポートをして教育を受ける選択肢を増やす取組はすごい参考になるかなって。
- ・僕の生活の変化は、社会に出て仕送りがなくなって、光熱費や移動のお金も自分で稼がなきゃいけないのと同時に、社会課題を解決するために行動していると、あまりお金にならないことがあって、大学生のときよりも体力、気力を使わなきゃいけないなって変化した。

2. 今後必要になると思うことについて

- ・女性の自殺者がすごく増えてしまった。止められない社会課題の一つだと思うが、僕が活動している根底にあるのは自分が生きていきやすい社会を作るにはどうすればいいかということ。それとこの社会に生まれてきてよかったって思えるには、どういう教育や経済、総合的にどんな社会にすればいいかというのをよく考えるけど、その社会の対極にある人達、「何で生まれてきてしまったんだろう？」とか「生きているのが辛い」って思う人たちが、最終的にやってしまうことって、やっぱり自殺だと思う。
- ・年々その数が増えるのは、年々生きづらさが増していて、特に若者の死亡割合で一番多いのが事故とか病気とかでもなくて、自殺になってしまっている。将来を引っ張っていく宝である若者たちが生きづらさを抱えたまま、死を選んでしまっている状況が、コロナになってから女性の自殺者数が増えたということからも、ここをどうにかしたいな。自殺対策は本当にいろいろあると思うが、教育のこともそうだと思うし、何かできたらいいなって思う。
- ・僕が行ったインターンシップで、デモクラティックスクールっていう「自分たちのことは自分たちで決める」をコンセプトに子どもたちが決めることに介入しないっていうのをやっている学校があって、中学1年生の子が朝からずっとゲームをしてたと思ったら、昼から開いたパソコンの画面を見ると、大学生が入っている ZOOM に入っていて。「何しているの？」って聞いたら、「留学説明会を

自分で調べて自分でやっている」と。そういう自分で考える力を育めるような教育、公教育がそうなるといいけど、ちょっと時間がかかると思うので、率先してやっているフリースクールに行きたいに行かせられる支援をするっていうのは大事じゃないかなって。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・いっぱいある。愛知から滋賀に来てそう思ったし、滋賀から東京に移り住んでより一層素晴らしいところだなって。まず友達が滋賀に遊びに来てくれたら、100%その友達を楽しませられる自信があって、信楽を紹介したり、夏は琵琶湖で泳いだり、季節問わず、キャンプをして、そういう場所があったり。僕は彦根市の割と人口が密集しているところに住んでたけど、そんなところでも5分歩いたら琵琶湖があって、すぐ前には広い土地があって、友達とキャッチボールとかバット振ったりしてもボールがどこにも飛んでいかないような場所がある。そういう生活の余裕をもたらしてくれるのがまず滋賀の一番の魅力。移動は自転車だったけど、琵琶湖の湖岸を走ることがあって、東京に行って感じたのが、そういう場所があんまりない。余裕とかがなくて、広告や音がすごくて常にどこかが刺激されていて、いろんな人に会えるのは一つの東京の魅力かもしれないけど、僕のこれからの人生の土台になるのは本当に滋賀で過ごした4年間だなど。
- ・他にもいろいろ滋賀の魅力はあって、琵琶湖があるからこその政治の姿勢とか環境に対する考え方とかは、他県で請願書を出してきた経験からも全く違う。本当に意識が高いのはすごくいいなって

4. その他の質問

Q. 教育アクションの話をもう少し詳しく教えてください。

A. まずは自分たちがおかしいなと思ってた教育に対する違和感を炙り出すことと、教育を受けている当事者である学生とかに対して調査をして、おかしいと思っているところを一般化してわかりやすくする。それに基づいて、自治体の教育委員会とか、議会とかに対して、選挙権を持っていなくても、意思表示できる請願書とか、陳情書とかを使って声を上げると同時に、社会に対しても訴えかけていきたいなど。

具体的には東京で今年から撤廃されたいいくつかのブラック校則があるが、他の自治体でも、不合理な校則とか、不当に自由を奪う観点からも「やめて欲しい」と声を上げることとか、先生の業務量と、逆に生徒の課題の量も膨大になってきているので、今、両方から余裕が失われてしまっている。

子ども時代、青年時代に必要なのは余裕とその余裕の時間を応用して実際の世界を見たりすることだけど、忙殺されていると、実世界のことが見えてきづらくなる。自分の感性をもっと活かせるような教育に変えていくのをこれからの時代のスタンダードにしたいなって。

教職員の離職率は一般職に比べて結構高くなっていて、それ人間関係とか、業務量の多さ。部活ぐらいは外部から講師を呼んで、そこに予算をつけて、先生が余裕を持てるようにするとか。人間関係のいざこぎも心に余裕がないときに起こったりすると思うので、まずは先生の業務量とか余裕をもつてできるようにするっていうことを変えていきたいなって。

Q. 声なき声を聴くことについて

A. 多分「声なき声」を持っている人たちは、行政側が「こういう声募集しています」って言っても、そもそも辿り着けなかったりと思う。僕もよく考えるけど、例えば僕が、教育のこととかで、子どもたちのもたに行き行って調査したいなと思っても、やっぱり生活があるので、その調査ばかりしてたら、あんまりお金を稼げなくなってしまって、結局自分の生活が危うくなるっていうところもあったりして。でも審議会の委員として、県政と滋賀県に住んでる人たちのつなぎ役になれると思うので、子ども食堂とかにも大学時代毎回行っていたりしていたので、そういうところの声を拾って届けるっていう。もしかしたら僕の方が役割が重要なんじゃないかなって思ったりすることがある。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（酒井委員）

○ヒアリング日程

2022年6月15日（水）10時00分～11時00分 ZOOM

○委員

酒井 道さん（滋賀県立大学地域ひと・モノ・未来情報研究センター長）

○ヒアリング議事

1. 現状について/2. 今後必要だと思うことについて

- ・ 前がどういう基本構想だったかを一応読んだ。その中ではデジタル化とか、ICTという内容や文言っているのは、ごくごく少なくて。それに比べたら今の基本構想はかなりICTの部分が入ってきてるなど。今後の実施計画の中でさらにということであれば、もちろん世の中全体としてもその流れは重要なわけだけど、役目としても重大だなど。
- ・ 前回の基本構想の議論の時に、すごく感じたが、デジタルデバイドの問題はすごく大きくて。この審議会は各会の代表の委員というより、高校生や大学生の人も入ったり、本当に県民の各層から満遍なく出るといって進められてきている。そうすると如実に現れてきて、ICTの言葉が出てきたら、正直何だそれって方も何人もいらっしやる。わかりやすく書こうというところで、じゃあどうDXの部分を本当に県民の方の正直な目線で見たと時に施策に反映させるかってところはギャップがまだすごい大きい。手も入れなきゃいけないし努力もしないといけないなど。
- ・ 議論としては難しくなったと思うのは学校でタブレット導入っていう、ギガスクール構想とかでやると学校の現場では、1人1台タブレット導入できた、やれやれと思ってたら、なんかみんな休み時間ずっとタブレット見てると。話もせず外にもいかずに、それでいいのかっていう素朴だけど鋭い指摘が先日もあった。
- ・ こういうDXからのデメリットっていうのは絶対あると思う。これコロナで顕在化した話でもある。以前からそういう指摘はあって、結局ICTっていうのが、何をどうよくするのかっていうのを考えたときに、2つの軸で捉えていて、縦軸が均質化。田舎でも都会でも同じようなQOLが確保できるようにっていう、一方で、横軸は多様性の確保だと思う。日本の地域全体同じような地域ばかりになったら面白くないし、個性もなくなるので意味がないので、地域の独自性をいかに強めるかというところで、ICT化、DX。この両方の軸にDX化はすごい役に立つので、それはいい意味で本当に推進したいなというふうになる。
- ・ それで、それぞれの施策がどっちを狙ってるのかというのは認識して打たないといけないと思う。県民の皆さん全体にももちろん役に立つっていうのは結果としてはそれでいいけど、でも施策としたらどっちの方向向いて或いは両方両睨みで狙うというところは、必要だろうと。ICT化、或いはDX化って、やっぱり良いことも悪いことも必ずあるんで、その議論も避けては通れないだろうと思う。
- ・ 例えば第二次産業の場合、新たな付加価値を生み出す。車の自動運転考えたらすぐわかる。多分路線バスの自動運転とかはすごい良い。ところが一般の車体に搭載すると恩恵を享受している人に格差が必ず出てくる。100万円ちょっとの軽自動車を買う人にプラス100万円で車の自動運転システムつけようと言われてもなかなか買えない。でも1,000万の車に乗る方はあと100万プラスってそんなに難しくない。でも車メーカーは付加価値をつけるのは強い話なんで、そういう方向でいきたい。産業育成っていうのはすごい重要。
- ・ それから低価格化は工場の自動化で人件費削減なんかで、本当に一般の人に対してもラッキーですばらしいけど、ビジネスではやりたくない。利幅がすごく下がってしまう。工場の或いは第二次産業のICT・DX化っていうのを考えても、こういう点は指摘できる。
- ・ 基本構想を考える上で重要なのはさっきのDXの推進ってところに関して、両軸があること。経済性が良い、それから公共性として必要、儲かる儲からないとか。どこに位置付けてやるかがすごく重要で、それから、ICT化とかDX化は、誰のためにするか、何のためにするか、どこまで使うかっていうのが施策としてすごい重要。
- ・ 思わぬ悪影響はないか、想定外になったらブレーキを、規制を掛けますか、どうしますかっていうようなところは覚悟を持って行わないといけないと思う。
- ・ みんなのためなのか、特定世代のためなのか、でも後者も必要。ベンチャー企業育成とか。その人たちしか得しないように見えるかもしれないけど、最終的には幅広く広がっていくという観点がある。

- 他の県の戦略との違いみたいなものを出すとしたら、滋賀県はそういう意味でより一歩深くDX化なりICT化なり考えますよというアピールができれば、また基本構想の意味としては高まるかなど。
- ・例えば広告業界とかはかなり変わったんじゃないかなど。大学生でもお小遣い足らないと、ちょっと大学入試の対策でもネット上に上げて、広告でお金儲けしようかななんて、そういう時代。
 - ・第二次産業系のことですと、工場の中の議論というのは、そんなにICT、DXはまだ進んでるという感じではない。1980年1990年くらいまで進んだファクトリーオートメーションの延長線上だっているのが私の理解なので、特に中小の工場なんかの中でのDX化はあんまり進んでいるとはまだ感じない。でもGAFとか、広告分野はドラスティックに変わったところだろうと。
 - ・コロナの状況下で人と人との関わりがネット上のものに幾らか置き換わるっていうことの意味合いは、社会科学的な意味合いになると思うが、ぜひ他の委員の方のご意見をお聞きしたいし、教育分野はすごく影響が大きい話で、ボディブローのように効いてくるので、政治家、議員の先生方とか、知事でさえ自分の任期が終わってから影響が出てくるようなことを今やるっていうことになるので、すごい大きな話だと思う。広い視野で検討するという体制を滋賀県として作れば素晴らしいなど。
 - ・ICT・DXの人材育成っていう意味では、1項目として書くことができないかとあって、でも、若い方、Z世代とかそれより下の人達は、我々と全く違う感覚で使いこなしている。そこは注視しながら、でも専門家育成というところもまだまだ足りない。大学教育のところ、高等教育のところ足らないと思っているので、引き続き頑張りたいなど。
 - ・高専で、情報分野を強く取り入れようというところも、1学年120名とかではあるけど、やっぱり地道に頑張るって数を増やすのは、絶対その方向だと思う。良いところも悪いところも含めて、それが分かる専門家を育成するのは、滋賀県として手を抜かずにやっていくのは大賛成だと思う。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・個人的には、すごく満足してるというか、うれしくて東京には住みたくない。東京は溪流釣りの釣り場まで遠い。滋賀は湖西も鈴鹿のほうもすぐ行ける。大学来て仕事した後、帰りに永源寺の方に寄って、竿振って帰ると非常にリフレッシュする。そういうチャンスは滋賀県、自然の地政学的にすごい本当に恵まれてラッキー。歴史の面でも素晴らしい。それから日本酒、本当においしい。江戸時代に彦根藩があって、お金がかなり落ちて日本一の米どころであったと。それからいい水があるのはすごく効いてる。
- ・そういうところ、もちろん甘えることなく、うまく生かせるような施策というのは多面的にいろいろあると思っている。

4. その他の質問

Q. 例えば高齢者など、ICT利用の環境等が充分でない方への対応についてのお考えをお聞かせください。

A. 手間がかかる話だけど、いろんなやり方があると思う。我々の大学で社会人のリカレント教育もやっている。本当にその分野、お得意でもっと伸ばしたいって方にはご興味に沿ってテーマ設定をある程度して、機器の整備とかアドバイスをさしてあげればすごく進む。一方、一から勉強させてもらいたいという方は確かに難しいが、意欲さえあれば、いわば手取り足取りやればできる。

やっぱり年齢重ねて経験を積まれていることに私は尊敬の念を持っていて、手取り足取り教えて差し上げて、使いこなせるようになった時にはその方の経験がすごく生きる、他の分野での。

なのでお荷物と考えず、デジタルデバイドの問題をいかに解決するかっていうことが進めば、地域としても県としても大きな財産に、今までその人の知見が埋もれようとしていたものが、新たなICTとかDXがプラスされることで、また違った形で生かされるという可能性はあるなど。

人生経験豊富な方へのICTとかDXってところの教育というか、身に着けていただく機会のご提供は、すごい価値あることだと思っている。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（今井委員）

○ヒアリング日程

2022年6月15日（水）14時00分～15時00分 ZOOM

○委員

今井 崇人さん（魚重産業株式会社）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・このコロナの2年間で今までの価値観が皆さん変わってきたので、事業をするでも会社で仕事をするでも、今まで通りのやり方、セオリーがなくなってきたというか、ウィズコロナに対応したような仕事や事業でをやらないといけないというところが変わったところ。
- ・うちの業界では、お客さんの流れというか、今までは結構海外のお客さんが来られていて、観光地とかは賑わってはいたけど、この2年間はそれが全くなかった。ただ、インバウンドは確かに経済を回すにはよかったかなと思うけど、逆にせっかく日本に住んでいるのに、日本のよさを知らない人たちが最近多かったんで、それを見直すきっかけというか、日本人が日本を楽しんでもらえるような、観光とか桜とかでも、改めて見てもらえたりしたのは逆によかったです。
- ・現状は、コロナ前とまではいかないけど、7割8割ぐらいは仕事も戻ってきているのかなど。
- ・雇用調整を使わせてもらって、この2年間はどう頑張っても売りに上げに繋げることができなかったので、従業員さんにはシフト調整してもらいながら。それから単純にコロナのせいというより、最近こういう現場の仕事はあまり皆さん好まれないので、働いてくれる方は募集かけてもなかなか来ないというのはある。
- ・コロナになってからネットショッピングを充実させてやりだした。あとはふるさと納税も。登録するの面倒くさいなどか思いながら渋ってたのをやり出したりとかで、意外とやったらやったでそっちの方が結構順調に動き出したり。あとYouTubeを始めたりとかね。ネット関係の仕事であったり、そういう使い方を勉強したり。
- ・僕は商工会議所とかやっているので、同世代の若い経営者の方とかとしゃべって、ほんまに酒のつまみの話の延長線上で、YouTubeをやったりとか、ふるさと納税とかもそういう感じでやってみようかなって思ったりとか。
- ・商工会議所の集まりはこの2年はほとんどZOOM。やっと今年度に入って実際に集まることができるよう。ZOOMで対応できることはやったりとか、試行錯誤しながらやっていたけど、実際に集まれるようになってから、やっぱり集まってやるのが一番いいなって。コロナや台風のない時は夏祭りを浜大津で毎年やっていたり、地域の方も参加できるような講演したり。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・業界でいうと、やっぱり琵琶湖の魚をもっと全体的にPRしてくれる場が増えて欲しいなって。お酒とか近江牛とかお茶とかその辺は他県でも結構有名だけど、他県に行くと「琵琶湖って食べられる魚あるの？」っていうのが現状なんで。僕らも琵琶湖の魚はいっぱい食べられるものもあるって発信していかんとあかんっていうのは思っている。
- ・滋賀県のアンテナショップ、東京とかでもいろいろやったりというのは見ているんで、その辺は続けてもらいたいなって。東京とか都心部に限らず、九州の方とかは意外と川魚を食べる文化があったりとか、そういう地方の営業みたいなこと、イベントみたいなことやったら受けがいいっていうのも聞いたんで、都心部だけじゃなくてちょっと外れたところでもやってもらうのもいいのかなって。
- ・漁師も後継者がいないというか、継がせないって言った方が正しいみたいで。儲けにならないとかで。県の方でも、漁師をバックアップしようと新規の漁師になる方に補助を当ててっていう事業も取り組んでるけど、どうしても仕事が特殊なんで、なかなかうまいこといってないみたいで。そこも業界としてはこれからの課題かなと。
- ・生活面で言ったら道路整備を何とかしてもらいたいと思うことはある。車が不便、渋滞も含めて。
- ・働き方の意識に関しては、僕たちも仕事の現場が今の時代にあったような内容になっていないっていうところは課題ではある。YouTuberで稼げる時代とかってそういうところに興味がいってしまうとは思いますが、結局そういう仕事って一時のブームと言うか、一瞬はよくても一握りの人しか残って

いけないわけで。リモートワークとかでも、1人2人会社にいたら人数がいなくてもできる仕事っていうことになってくるんで、そこに自分らがうまいことはまるかって言ったら、そこまでの技術を持ってなければ雇ってもらえないやろうっていうところが、現実を知ってもらえると嬉しいなど。僕らみたいな現場仕事に入るとは、入って欲しいけど、そこまで考えろとも思わないけど、自分がほんまに何がしたいのかっていうのをちゃんと考えて、それについて働いてもらいたいという思いはある。

- ・ブランドの件は、湖魚とか近江八珍とか言ってブランドを作ったりはしてるけど、なかなか周知するのが難しいのかなって。滋賀県の飲食店は必ず一品ぐらいい琵琶湖の魚を使ったものを出してもらうようにしたら補助を出しますよ、とかしてもらおうと、もっと周知されたりとかするかなと。お肉やお米に比べるとインパクトが魚って付きにくいので、マグロとかじゃないんで。川魚ってちょっと高級魚っていうイメージがあるし、一般のお客さんに興味を持ってもらえないところがあるので、その辺をどういうふうにしたらいいのか。あえてもうむちゃくちゃ高級なんですよって言って富裕層向けを狙うか、と業界の仲間じゃべっていたりはしてるんですけど(笑) そういうブランドに関しては、僕らもいろいろ考えなあかんのかなって。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・仕事でいろんな県に行ったけど、(滋賀は) 住みやすい街、住みやすい県というところ。子どもが育てやすいという点もありますし、自然もあるし、車がないと不便だけど、何も無いっていうわけでもない県なんで、暮らすっていう部分に関しては、他の県よりはすごくいいのかなと。立地もいいので京都、大阪にもアクセスしやすいし、関東の方に行くにも、京都から新幹線に乗ったら2時間ちょっとぐらいで着けるっていう立地条件もあって、暮らしやすい街っていう幸せはあるのかなと。

4. その他の質問

Q. 人材確保の面での苦労などは？

A. 業界全体で人手不足の問題は常ある。求人募集しても応募がない、問い合わせすらないとか。今いろんな仕事が増えた中で、現場の水場作業というのが不人気というか、しんどいし時間も拘束されるしっていうのがついてくるんで、誰も選ばれないというか。今はネットワークみたいな仕事もできるようになって、座って在宅でできるような仕事を探される方が多いみたいで。

入ってこられる方は、興味を持って入られるわけじゃなくて、現場仕事をするちょっと違うなっていうことで、すぐやめられたりとかっていうのがある。でも正直、仕事って変えられない部分があるんで。理想ばかりでやれるようなことじゃないんで。

Q. 環境面で変わってきたとお感じになることは？

A. 変わっている。僕の子どもの頃はまだぎりぎり浜大津でも琵琶湖に飛び込んで遊んだりできたぐらいの水質環境だったし、近場の川とかでもいろんな魚とか生きものがいたりしていたけど、今は水自体も少ないし、生きものとか生存してない。琵琶湖も湖北の方に行かないと泳げなかったりで、そういう面では、琵琶湖だけの環境についても全然違う。

あとはマンションがたくさん建ってきて、自然の部分が僕の近所でも少なくなったかなって。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（宇都宮委員）

○ヒアリング日程

2022年6月16日（木）15時00分～16時00分 ZOOM

○委員

宇都宮 浄人さん（関西大学経済学部教授）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・コロナとの絡みでは、もちろん非常に大きなインパクトがあるし、書かざるを得ないことはわかるが、例えば交通が私の専門だけど、コロナだから維持しなければいけないとか、何かコロナのために感染拡大防止の取組支援などを入れてある資料を前に見たが、感染防止なんかはある意味当たり前で、基本構想なんかではそういう話に振られすぎない方がいいと思う。
- ・とはいいつつ、こうやってオンラインの打ち合わせで済んでいるとか、家で仕事ができるケースが増えている社会状況の変化はもちろん基本構想に組み込んでいく必要があるから、滋賀県は一定の広い家とか、豊かな自然とか、そういうものとミックスした形で、近畿圏の中で新たなテレワーク対応には適した土地であろうと思うので、ポテンシャルをうまく生かすということはもちろんあっていいだろうなど。
- ・そのためにも、車に頼らざるを得ないような生活様式ではなく、車がなくてもある程度暮らせるような仕組み、人々の選択肢という意味でもそうだと思うが、交通も含めた地域社会に人を呼び込むための重要なインフラというの発想としてしっかり出していただきたい。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・この間の変化でコロナプラス大きかったのは脱炭素への大きな切り換えであって、（計画に）チョロツと書くのではなく、もっともっと主張していただいていいんじゃないかな。基本構想自体「健康しが」で、健康に目をつけられたのは非常にいいことだと思っていて、交通なんかの議論でも重要な健康って話をよくしてきたので、プラス脱炭素っていうのがもう少し前面に出てもいいのではないかな。
- ・改めて基本構想の資料を読み返して、例えば道路が足りない、なぜなら渋滞しているから、みたいな文言は常に出てくるが、これはたぶんこの何十年ずっと言い続けてこられたんじゃないかと。渋滞を全て放置していいとは思わないが、経済学の理論だと道路をつくれればつくるほど車が流入してくるとい、そういうもの。だから渋滞が発生しているから解消が求められるみたいな50年言い続けたことは、基本構想レベルではもう言わないみたいな切り換えがあってもいいのかな。
- ・脱炭素って考えると少し切り換えて、通過交通がスムーズに流れることではなくて、むしろ街に滞在してもらうための道づくりも含めて、もう少し総花的ではなく今後の道路のあり方一つも、人々が脱炭素社会で幸せに暮らせる道ってどんなんだろう、むしろ歩ける方がいいのではみたいな観点を出していただく方がいいのかな。
- ・公共交通については維持しなければという話はずっと出てくるが、とりあえずあるものを維持するのではなく、もっと脱炭素時代においてかつ人々が健康に暮らすうえで、公共交通も含めてそれを活用していく健康しがみたいな発想が欲しいなという気がする。滋賀県の場合10人のうち7～8割は車。そのうちの1人が公共交通でいこうと思うと、公共交通の利用者は単純計算で2倍になる。車を否定するわけじゃないが、しっかり公共交通が使える状態になれば社会的なインパクトもある。
- ・それから滋賀県ではビワイチ、自転車も強調されているが、自転車と徒歩を「アクティブモビリティ」という。車を運転せず、公共交通をベースとしつつ、あとラストワンマイルどうするのっていう話になったときに、健康な人であれば歩く、または自転車に乗るという形にする。そのかわり自転車レーンをしっかりつくるといことが最も化石燃料を使わず、しかも健康にいいということで、ヨーロッパをはじめ、どこでもアクティブモビリティが一つ注目されているので、そういうキーワードも入れていただくと、特に自転車に力を入れている滋賀ではいいのかな。
- ・ただしそのためには、車の車線を削ってでも、自転車道にしないよとか、ある程度腹を据えなきゃいけない部分はある。
- ・目標ということでいえば交通事故。例えばノルウェーの首都のオスロでは、「歩行者交通事故死者ゼロ」を目指して2019年には達成している。交通事故が減ったねじゃなくて、歩行者事故はゼロにするぐら

い言ってもいいのではと。事故が減ってるけど、日本は歩行者の事故率が高い。歩行者の事故をゼロにするぐらいのことを言うとインパクトがあるし、数字を見たけど夢物語ではなくて、できるんじゃないかなと思ったりする。

- ・今ヨーロッパで、サステイナブルアーバンモビリティプラン（SUMP、サンプ）というのを、EUが指針として出している。結構、滋賀県なんかと似ていることが書いてある。人や健康に焦点をあてなきゃいけないとか。1つの計画サイクルを例にすると12のステップがあって、重要なのは、現状の分析の中で、どのような都市にしたいかと、マイルストーンとしてビジョン、目的目標値が設定されていて、ここに力が入ってる。総花になると何をやっていいかわからなくなるんで、ある程度絞り込みつつ、そのゴールに対してバックキャストで、いつまでに何をやるっていうことを徹底している。
- ・やっぱり公共交通は公共サービスであると。今の日本の立て付けは、公共交通事業がいわゆるビジネスとしての立て付け。基本的には収益を出して、あなたが設備管理しなさいと。滋賀県では交通税や近江鉄道の上分離のこともあって、公共交通というものを公共サービスと考えておられると思う。だから税金に広く薄く負担をする、受益というのを、単にそこで走ってる電車はそこに乗ってる人たちの運賃で、その瞬間乗ってる人だけのためじゃないわけで。広く地域に住んでる人、今は乗ってないけど将来乗るかもしれない人、自分は今乗ってないけど、子どもが乗るかもしれない人。いろんな人に交通ってものは効果を持ってるわけなので、そこは意識しておく必要がある。それぐらい交通が社会の、公共サービスの的なものであるということは、次の基本構想でうたえるのであれば、もうちょっと強調してもいいのかなど。
- ・交通というのはもちろん一義的には基礎自治体であったとしても、広域のところで初めて交通圏域ができ上がる。そこを調整し、最適解を求めるためには、やはり広域を管轄するオーソリティである県って役割は私は非常に大きいと思っている。
- ・どちらかというといかにコストを下げるかみたいな議論が先走ってしまって、健康しがなりウェルビーイングなり、最後のゴールを忘れてしまいがち。SDGsでも11.2に公共交通のアクセスははっきり書いてある。そのへんは意識していただければと思う。
- ・交通事故の話でいうと、今、パリやブリュッセルなんかも、ゾーン20、制限するようなゾーンを広げてる。各論で言えば、歩車分離みたいな発想より、もう少し新しい発想をしたほうがいいかなど。
- ・選ばれる滋賀を目指し、適度な疎と以前の資料にあったが、コロナの議論の疎・密と地域の疎・密というのは乱暴な議論な気がする。適度な疎、じゃあコンパクトシティは駄目じゃんみたいなことを真面目に考える人が多いので、1メートルのところでマスクせずにしゃべることのリスクの話と、滋賀がコロナをきっかけに分散社会で疎だからってという話は、言葉の使い方を気を付けた方がいいかなど思った。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・やっぱり大都市圏に近く、大都市的な暮らしができつつ、湖あり山ありという自然がすぐれていという地理的条件、プラス歴史的な意味での文化の深さ。それから文化でいうと、歴史の方が重要視されているが、びわ湖ホールみたいな立派なオペラ劇場を持っている、あれをもっと発信していいと思う。ただじゃあ滋賀に住めって言われると、車の運転を当面していないので、車を運転する生活はやっぱり嫌だなという気はする。車なしですべてが片づくようなところであって欲しいという気がする。

4. その他の質問

Q. DX推進が言われていて交通の分野も期待が高いと思うが？

A. DXについて気をつけなきゃと思うのは、DXがどう生きるか。DX化が目的じゃないということ。公共交通でいうとMa a Sとかいう言葉が飛び交っているが、Ma a Sが目的じゃない。公健康しかなら健康しがつくるために公共交通が重要だということがみんなわかれば、その一つの使い勝手のよさとして、Ma a Sが使えるかもしれない、でもMa a Sよりもっと使い勝手がいいものも僕はあるような気もする。

DXは、非常に大きな変化だが、それが目的ではなく、DXは何のためにあるのかを、多くの人に知ってもらふ必要があるんだろうなという気がする。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（清水委員）

○ヒアリング日程

2022年6月20日（月）10時00分～11時00分 ZOOM

○委員

清水 貴之さん（日伸工業株式会社 代表取締役社長）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・ 基本構想は非常に全体的なことをカバーされているがやっぱり総花的になってるんで、その中で特にどういうことを進めていくんだという優先順位は少し絞っていかねばいけないのかなと。今コロナがまだその渦中であって、そういう中で少し絞っていかねばいけないかなと。
- ・ まず仕事のことで、一般的に言われているようにリモートのお話、平気で今、皆さんやって普段の事業活動やるようになってきたということは、これ大きな変化。当社でも、海外工場が5つほどあるけど、これまで現地の役員・社長と顔合わせてというのは年に1回ぐらいしかできなかったが、毎月の役員経営会議の中で顔合わせて話をするようになったと、非常に大きな技術が進んで大きいなど。
- ・ 一方で、お客さんとのコミュニケーション、具体的なサブジェクトの裏にある話とか、もう少し雑談的にコミュニケーション取ってやったほうがいいだろうとか、日本国内3工場あるけどそれぞれ苦労してることを、気持ちを伝え合うとか、そういうところはちょっと希薄になったかなと。
- ・ そういうコミュニケーションは不足をしてきたとともに、逆に仕事そのものの本質をより頻度を上げた議論ができるようになってきた、両極端だけど、このバランスが非常によく見えてきた気がする。会議なんか非常に効率よく、毎月やれなかった海外の責任者ともお互いに顔見ながら全工場で議論ができるようになったということは、効率が上がって問題点を把握するのが非常に良くなってきているという、事業環境としては逆にその技術は非常に上がったなということがある一方で、いわゆる昔で言う飲み会にケーションみたいなことをどう図るのか、バランスが非常に大事だなと。
- ・ そこで見えてきたのは、本当の大事なことは何なんだろうかと、事業を推進していく上で、本当の課題は何だろうかということ是非常によく見えてきたなという気がする。仕事をする上で、逆に言うところごまかしがきかなくなってきたらというか、本当に大事なことが何かという仕事をしていかねばということが非常によく見えてきた。
- ・ うちはもともと家電6品を作ってたけど、15年ぐらい前から自動車の部品、日本でプリウスのハイブリッドが出てきた辺りから新しい需要がすごく出てきて、毎年車の電動化にまつわる部品の開発で色々忙しかった。今、需要増減ということかというと、実際は今現在足元では車がつくれなくなって、足元の販売はすごい減ってる。だけど電動化の流れはウクライナのこともあったりいろんなことでカーボンニュートラルのスピードは少しブレーキがかかっているのかなという気はするものの、長い目で見ると、エネルギー問題、CO₂の問題は必ず進めていかねばいけないので、開発案件はたくさん見えてる。少しずつ後ろ倒しにはなっているが、基本的なカーボンニュートラルのテーマというのはあって、新しく部品をお客さんと一緒に作っていくこと。だから足元はすごく需要が減ってるんだけど、将来への開発に向けての活動というのは非常にたくさんのテーマが来ていて、世界レベルで対応していかねばいけない。そういう意味では、コロナ前までは目の前のお客さんとの会話の中で何をどうしてと考えるながら仕事をしてたが、コロナが来て、ウクライナの戦争が始まって、いろんなことが世界中の事が見えてきて、私たちの仕事が増えたり減ったりしているということが非常によく見えるようになってきたと。
- ・ 今はウェブのテクノロジーも相まって世界中の情勢を見ながら、自分たちでこれから何をやっていったらいいのかを考えながら仕事をしなければいけないというふうに、一部品屋としても考えていかないといけないなど。
- ・ これまでこんなことはなかった。自動車業界は需要があれば必ず供給をしたらいいということで、多分戦後70年間日本はやってきたと思うが、今車の世界ではバックオーダーをすごい抱えてる中で作りさえしたら売れるという中でつくれないという、その状況の中で私たちはどういう仕事をしていったらいいのかという状況にあるなど。
- ・ 車の部品というのはゼロデフェクトというか一個でも不良があったら駄目だっという文化の中で仕事をするので、検査体制は非常に大変だった。仕事が増える分検査人員を増やしてもすごい人数で検

査をしてきた。これじゃ駄目だと思いつつ、電動化の波が急だったので、忙しくてその改善が図られなかったが、ちょっと変な話、コロナ禍で一気に仕事が半減して供給量が減ったので、その機会に本来やりたかった検査の自動化とか、そういうことに大きく舵を切ることができたという、そういう良いこともあった。コロナ禍で一旦仕事が減った時に、自動検査機などの技術を導入することができて、去年の秋ぐらいから仕事は戻りつつあったけど人を増やさずに、いわゆるスマートファクトリー化を進めることができたなど。

- ・カーボンニュートラルの話は、コロナ後の対応と相まって、スピードアップしてる感じがすごくあったが、ただこれは実はヨーロッパの戦略もあって、日本の産業界との競争を有利にするためにカーボンニュートラルを加速しようという施策がすごく出ていて、ちょっと困ったなと思ってたけど、今回のウクライナのことで、本当の話が出てきてるというか、それどころかエネルギーが足りないと。本当は今どうしなければいけないのかが見えてきたのかなということが、カーボンニュートラルに少しブレーキがかかって、とにかくビジネスを作るためのカーボンニュートラルに動こうとしてたのが、少し足元を見た、実際の対応、エネルギー政策に変わってきているのかなと。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・私ももう高齢者で、団塊の世代が増えてくる時に、濃厚接触者、保健所の問題もそうだけど、1回目のワクチンを受ける時のあの騒動、私なんかICTに弱いところがあるけど、会社にいるんで、社員が助けてくれたけど、ご自宅で過ごしておられる高齢者の方で大変だったんだろうと。その辺のシステムも、もう少しシンプルな形でできるようにならないかなと。
- ・もう一つ滋賀県の大きな問題として、象徴的なことは大津市民病院の問題。ああいうことが起こってしまうということをどうコントロールしていくのかなと。健康しがということで、安心して滋賀県で暮らす中で、医療体制をどう確保していくのか、そこへのアクセス、どう対応していくのかを、もう少し突っ込んでやっていかないといけないのかなと。
- ・一つ滋賀県のいい話をご紹介します。自動車の部品屋に15年前から変わってきた時に経産省のいろいろなご支援が非常に有難かった。近畿経済産業局、県の商労部のネットワークが非常に助けになって。サポーターインダストリーといって、インダストリーを中小企業をどうサポートするかっていう10数年前に経産省の施策として出てきて、3年間で1億円の補助が出る。研究開発をテーマを上げて認められたら、研究開発進めてくださいって予算がつく。それを一番困った時から3年間ずつ継続して受けさせてもらってる。今年、中小企業庁からサポインをどのように変えていったらいいかという諮問委員に指名されて、関西から私が代表で出させてもらった時に驚いたことは、滋賀県のサポートが素晴らしいということ。産業界から関西から私と東京からもう1社出ておられたが、話をしたらそんなありがたい県があるのかと。産業支援プラザで、私たちは非常に丁寧な指導を受けて、まず近畿経済産業局にレポート出したら、初め全く通らなかった。滋賀県でちゃんと指導してもらいなさいと言われて聞いたら県に産業支援プラザがあると。非常に厳しいけど丁寧な指導していただいて、一緒に考えながらやっていただいた。各都道府県にやってるかと思ってたんで、もっと充実したらいいねという話をしたら、そんなことやってる県があるのかと。それはすごい県だと成功例、非常に良い事例だということになって、中小企業庁の中でも情報共有していただくと、なかなか他の県ではできていないと。県の直轄の組織でそういうことをやってるといって都道府県はどこもないということになった。滋賀県の中小企業に対する支援制度、教育システムという意味でも厚い。
- ・今回もコロナ禍でスマートファクトリー化しましょうみたいなことで、デジタルトランスフォーメーションの話が出てきたが、IoT化もどういう技術を持ち込んだらいいんだということ、中小企業を集めて勉強会やったり、非常に熱心にやられている。その補助金も県から出されたり。
- ・この取組は産業、製造業の滋賀県だと言われるところで非常に素晴らしいところで。ぜひここは滋賀県の方自身ももっと認識していただければ。人が変わったりすると駄目になる可能性もあるので、しっかりと継続してやっていただきたいなど。
- ・私たち中小企業は人材育成は最大のテーマ。どれだけの人材を伸ばすことができるかで、企業の価値、将来が決まると。会社としてはいろいろ技能者を育てるということで、直接の仕事関係なくてもいいから、やや近いものを国家試験なんでもいいから受けてくれと。それに対する費用は全部会社で補助をして受けてもらう。通れば報償費を出すことをやってる。これは毎年計画的に。プラス、海外工場も多いので、各工場毎週ネイティブの先生に来ていただいて英会話、これも全部無償で受けられるように、とにかく継続して何か勉強していかないと、部品屋といっても世界の中で戦っていける部品

屋にならないとだめなので、世界情勢の勉強も営業的には必要だし、技術的には幅広い基本的な勉強をいつもしていくことは非常に大事なんではないかなと。それも産業支援プラザに大きな後押しをしていただいている。

- ・これまで日本の中はやや下請け企業ピラミッド的なところがあって、お客様のいうことだけ聞いてやればよいというふうな構造で、家電で日本の戦後復興してきたということもあった。それがコロナ禍を通じて特に世界情勢を通じて本物志向にすごく動いていると思う。カーボンニュートラルの話がありSDGsがあり、無駄なことをやらない、環境に悪いことしない、人はちゃんと自分たちで育てて、いい仕事をやっていこうという流れに大きく変わってきてるんじゃないかな。
- ・ものづくりの基本、理屈をわかってものをつくれる人を育てていかなければと。金属を加工するというのはどういうことなのか、分子・原子のところから理解しながらものづくりをやっていこうとか。これまではどっちかという検査設備を作る専門家さんが外にいて、頼めば何とかできるとかだったがそうではないなど。作業者の人たちが培ったこれまでのアナログ的なノウハウをITに乗っけていく、そういう検査設備を作っていかなければいけないなど。その延長線上でないと本当の意味の合理化された工場、スマートファクトリーに近づくことができないんだろうなど。
- ・非常に心配してるのが、滋賀県内にたくさんの大学が来たけど、卒業して滋賀県に就職する人が5パーとか6パーとかしかいない。もっと若い人にここで住んで働きたいという環境を整えないといけないと思うし、我々も中小企業の価値を高めてここで働きたいという会社を作っていかなければいけないんだろうなど、それは我々の責務かなと。今回、高専ができるということは非常に期待も大きい。滋賀県立の高専で勉強して、滋賀県で働くというルーティンができると、大変大きな力になると思うし、ぜひ私たちも来て欲しいなど。
- ・授業の中でどんどん企業も出てきてもらって親しみを持って、ここで働きたいって、逆にそういう会社ができてもらわないといけないということ。ここは産業界と高専と一体の仕組みを作っていけばすごくいい取組になると大きな期待をしている。
- ・年齢を下げて考えたときに、私実は発明協会もさせてもらっている。少年少女発明クラブというのが県内に五つ六つ今あるけどこの活動はなかなか上手く行かない。皆受ける生徒が金出すんですが、滋賀県の子どもたちが、県の中でそういう勉強させてもらった経験って結構大事なんじゃないかなと。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

・琵琶湖を中心とする環境が綺麗で、文化財が京都と比べても引けを取らないだけ揃ってる。こういうところは子どもの頃から地域で勉強して理解して、誇りを持って、産業界に入ってそれぞれ活躍して欲しいなど。そういうふうにつなげていくことが滋賀県で生まれ育った人の幸せになればいいなど。中小企業に対する支援が滋賀県は非常にしっかりしてるので、それを認識して継続してやっていただいて、この綺麗な環境、文化財というものの中でプライドを持った中で産業界でも活躍してもらえると、そういう姿にするのがここで生まれた人の幸せになるのかなと。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（高橋佳奈 委員）

○ヒアリング日程

2022年6月20日（月）16時00分～17時00分 ZOOM

○委員

高橋 佳奈さん（みのり農園）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・私たちはカラフルな野菜を無農薬でつくって、販売先をある程度飲食店さん向けに絞って販売をしている農園だけど、コロナが流行りだしてから、売上げが激減して、補助金で助けられたりもしているが、今後もコロナはずっと付き合っていかなければいけない中で、販路を広げていかないということで、2年前から個人販売向けのYahoo!ショッピングでの野菜セット販売を開始し、昨年からは、近隣の直売所への出荷も始めた。それだけではなく土日限定の農家レストランをやっている、夫婦2人だけでやっていたが、そうすると直売所に出荷する時間が取れなくて、かつ飲食事業での販売ももう少し増やしたくて、レストラン営業を金土日を増やして、アルバイトを雇用して、土日はアルバイトさんが来てくれるので、土日に直売所への出荷を増やした。農家レストラン事業の方も、去年よりは売上げを伸ばしつつ、アルバイトさんを雇ったことで、土日の直売場への出荷も可能になったというふうな状況。
- ・Yahoo!ショッピングでいうと、配達料金がすごく高くなっていて、前は一律関東まで450円で荷物を出せてたのが、今は1,500円ぐらいになってる。かつ野菜なので全部チルドにしている、そうするとプラス600円かかる。中身が2,000円とか3,000円のもので、プラス配送料金が2000円とか、とんでもない価格になってしまうことがあって、一時、滋賀県の方でもキャンペーンとかしてもらった時はすごく売れるけど、なくなると一気に配送料の問題があって、困ってしまうので、配送の料金をある程度こっちで負担して送らないと注文が入らないというような状況。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・コロナや戦争で、今、化学肥料とか、輸入資材、建築資材とかもそうだし、海外から何かを輸入する時の資材がなかなか手に入らなくて、値段もかなり高騰してる現状もあるし、今後も世界的情勢の不安定さもあるので、できるだけ国内で収まっていくような循環型の環境になっていくと、より好ましいのかなど。金額的な面も含めると、今まで有機農業とかにも関心のなかった人たちも、こんなに肥料や飼料が高騰していると、そういったものを地域の中で全部リサイクルできるような仕組みができてくるといなど考えている。エネルギー、肥料とかを地域循環でできるような仕組みができてもいいのかなって。

3. 滋賀に暮らす・関わる「幸せ」

- ・笑顔が多い、人がピリピリしていない。都会と田舎っていうだけじゃないと思うけど、何か県民性としてあたりがすごくいい。
- ・あとはおいしいもの、野菜やお肉、湖魚があつたり、新鮮でおいしいものが近くにあつて、それを皆で家に持って帰って食べて家でも幸せに暮らせるような。それって都会に住んでいた者からすると、すごく贅沢なこと。都会は全部外から買ってる。新鮮なものも食べられないし、新鮮なものを買おうと思うとお金で買うしかない。ちょっと行けばおいしいものを自分で作ったり買ったりってできるし、それが滋賀の幸せなところかなど。

4. その他の質問

Q. 農業をされていて魅力と難しさを感じる場所は？

A. 魅力はやっぱり働き方が自分で選べるところ。私たちは少量多品目で農家レストランもやってっていうような形だけど、知り合いには、大型の農業で機械に乗ってやりたいっていう方や、ハウスで細かく管理して研究者的なタイプの人もあるし、自分の好きなジャンルを自分で選べるところが魅力。

辛いのはやっぱりお金。わりと順調に伸びていい感じだなと思ったところで、大雨で夏の作物がほとんど駄目になったりとか、大雪があつたりとか、気象条件もあり、この2年はコロナで、安定したなあとと思ったところでガンと来たので、金銭的な部分が不安なところは非常に大きい。

Q. 高島に移住された時の受け入れ体制などは？

A. 私が高島の泰山寺というところを選んだのは、土がいいから。とはいえ、結構高島は移住者が多いようなイメージを持っているが、ただ高島市自身は転出の方がたぶん多くて毎年人口が減ってるような地域かなど。移住の時、高島市や滋賀県の方は、親切に皆さんいろいろ教えてくださるので、人がギスギスしてないというか、みんなやさしい地域だなと。市の受け入れ体制的では、移住相談窓口みたいなものがある、そのときの担当だった方は皆さん優しくしてくれて、いろんな地元の方を紹介してくれたりとか、人との結びつきみたいなものを手伝ってくれたりもした。泰山寺は農業地帯で、農家さん数が10軒ぐらい、そこでも組合みたいな感じで農家協議会を持って、皆さんでマルシェをしたりとか、望地の付近の知り合いってというのは、非常にありがたいと思う。

Q. 異常気象などの対策で工夫されていることは。

A. 一番問題なのが作物がうまく作れないとか、台風でつる系作物が全部飛んでいくとか、ゲリラ豪雨が連続して集中して数日間続くのがここ数年あって、そういったときに水が畑にたまって、畑にたまると根腐れを起こしてしまうので、支柱を買い替えしたりと資金的に非常に厳しい状況になる。支柱の強化もして、できるだけ倒れないようにしたり、ただその分の手間と資金がかかるので、非常に金銭的にも厳しいなど。あとは作物をだいたい変えて、葉物、サラダ野菜は全部やめたり、もっと夏に強そうな葉物野菜、つるむらさきとかを売るようにしたり。

Q. 首都圏も含めて色々移住されているが、交通の便などお感じになることは？

A. 今まで車はほとんど乗らなくても大丈夫なところにと住んでいたけど、高島市に来て、やっぱり車社会。高齢者になって自動車免許の返還という話が出ているけど、絶対返還できないような場所に住んでる方も多数おられて、正直ちょっと街中の交通ルールがすごく怖い。市で乗り合いタクシーの補助とか、高齢者向けの補助事業みたいなものもしておられるけど、軽トラに乗っている高齢者が非常に多いので、ずっと車社会でこられた方を切り換えるのは、現実的にかなり厳しいなって感じる。

それから湖西バイパスは特に土日やお盆は恐ろしいぐらいの混雑で、通常だと山科から高島まで車で1時間ぐらいなのに、よく私たちのレストランのお客様も、3~4時間かかってこられて、混雑して間に合わないのでキャンセルされる場合とか、帰り道も、高島から山科まで5時間かかったとか聞くので、できるだけバイパスを早く2車線にしてもらいたいなって切実に思っている。

Q. JAS認証などの認証事業で何かお感じになることは？

A. 国では有機JAS認証があるが、以前勤めていた農場では認証を受けてたが、そこに対する管理作業の手間を考えると、とても個人でやるには厳しい仕組みになっている。金額的な負担はもちろん、書類業務が非常に増えるし、認証を受ける検査にも平日時間がとられるので。

そういう事情もあって、有機農業をやっているけど、JAS認証をとっていない農家さんが多くなっていて、そこらへんも問題だと思われていて、去年ぐらいから、国の方でも有機JAS認証の補助事業を開始している。今後は取得される農家さんも増えてくるのかなと。

Q. 農業の始め方や始める方へお話しされることは？

A. 非常に多くの方を見てきたが本当に皆さんバラバラ。いきなり作り始める方もいるし、親方みたいなところで農業法人に就職をされて勉強してから独立される方もいるし、家庭菜園も延長線上で始めたり、県立の農業学校とかで学ばれて独立される方、国とかの農業インターンシップ制度を活用されて、研修を受けてから独立される方とか。

農業に興味があるけど何をしたいかわからないという方が相談にこられたりすることもあるけど、農業について、野菜や米を栽培するところに観点を持っておられる方が非常に多いが、販売するところに観点を持っている方が圧倒的に少なく、自分が何を作ってどういうふう販売していくかということ意識してくださいっていつもお話をします。農業は野菜を栽培するより、販売する方に時間も必要だし、売れなければただの趣味になってしまうので、そこら辺を考えましょうという話をする。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（相川委員）

○ヒアリング日程

2022年6月21日（火）10時00分～11時00分 ZOOM

○委員

相川 康子さん（NPO 政策研究所 専務理事）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・コロナの影響は大きい。私は地域自治の仕組みづくりとかをあちこちでやっているが、面識社会をつくる仕組みが、ほぼ今できなくなっている。それが戻るものと戻らないものがあるような気がして、地域コミュニティ自身も大きく変わっていくだろうと。やめになったものの中には、やめてもいいもの、ICTでカバーできるものもあれば、駄目なものもあって、その見極めを今やっているところ。
- ・社会の状況が変わっていくので、自助・共助・公助のバランスがもうガタガタになっている。一人暮らしの人がこれほど増えるとか、生涯未婚がこれほど増えるっていうのは、多分想定していなかったと思う。世帯単位で組み立ててきた施策っていうのが、全部個人の対応に戻していかないといけない。統計リテラシーというか、そういうものが必要なのかなど。
- ・変える変わるっていうことに関して抵抗もあれば恐れもある。どうやってわかってもらうかという意味でも、統計データとかは非常に大事だと思っている。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・成長産業、ICT、ハイテクみたいなことを書く自治体が結構多くて確かに大事だけど、一方他の分野、例えば中山間地域での暮らしを支えるとかだと、むしろローテクで雇用を産み出した方がいいようなこともあるので、そこができていくかどうかっていうのが気になるところ。
- ・一時期、半農半Xっていう生き方が流行って、今、まちづくり系のコンサルの中では、そういういろいろな仕事をローテクも含めてやって、何とか生活がなりたてばいいやと提唱する人が増えてきている。自分のこともやりながら、空いた時間にお年寄り向けの宅配をすとか、今まではボランティアでやっていた話で、産業・経済とは全然結びついてなかったが、ちゃんとローテクの仕事、むしろ雇用を動かすとか、地域で若者にいてもらうための戦略としてあってもいいのかなって。
- ・言い方が誤解を受けそうで難しいが、私自身、「自分らしい生き方」ってこれまで使ってきたが、少し注意して使わないと、自分で変わるチャンスを奪ってしまうことになりかねないなど。今の学生さんは本当に議論をしない。感性を大事にっていうところで変わろうとしない。他の人の意見を聞こうともしないし、自分の意見が変わることに過度に抵抗がある。それが自分らしさでいいって人が多いが、ちょっと違うんじゃないのかなど。変わるチャンスであったり生涯学習であったり、そうしないと自分らしさっていうのが、差別も偏見も固定化したようなところの価値観に結びついてしまうとしんどいのかなど。自分の将来を描ける十分な情報提供、熟議、それがないと、少し怖いフレーズだなって。
- ・私も数年前までそう言ってきたけど、そこにシビック教育みたいなものがないと。少し違うものをに入れていかないと、自分らしいっていうのを決める際の決定の仕方が心配だと。
- ・大学生もレポートじゃなくて作文、一方的な価値観で。最近は必ず賛否両論をちゃんと書いてそこから論述してと変えさせている。そういうトレーニングを本当は学校教育でやっていかなきゃいけないが、まちづくりの議論の場でもいろいろ組み込まれているといいかなという気はする。
- ・参画とか協働が理念として薄れているという気がしている。参画や協働がブームになった第一次ブームを見てきている世代だが、その頃の熱い思いに比べると、面倒くさいことみたいな感じで受け取られている職員さんが増えてきたかなど。確かに協働って面倒くさいんだけど。
- ・遊びがあんまりなくなった。首長の考え方で差がでてくるが、外の集まり、学会、研究会、地域活動とかどんどん出ていきなさい、それが人事にもプラス評価になるとか、神戸みたいに副業OKと打ち出している自治体もあれば、そんな暇があるなら仕事しろというところもあって。ユニークな公務員の方って、いろいろ顔を出されてネットワークを広げていくが、そういうことができなくなっている。
- ・あと協働のところで、民間に頼りすぎ。指定管理なんかも問題になっているがいろいろとほころびが出てきている。老朽化している施設なのに20年間同じ仕様書でやってきているとか、そこが避難所になるのに全然クリアしてない仕様書とか、民間に仕事を出すってことに対してもうちょっと丁寧にや

らないと怖いなど。地域で政策を作る前に対話とか、ある程度、ヒアリングみたいなのをきちんとしてやっているのか、とても怖いと思う。

- ・防災もかなり変わってきて、今までのような全員が避難所に行くことに焦点を当てた防災活動はもうあまり意味がない。コロナで分散避難という形にもなっている。もう少しトータルに防災は見ないといけないなど。他の政策分野に防災をもっと埋め込んでいかないと、発災当日だけの防災になってしまう。本当の意味での減災という、普段の福祉活動とか、家事シェア、みんな家事ができるようにしておかないと災害が起こったときに困っちゃうんだよとか、いろんなことを含めて、本当に安全・安心、人権が守られるようにしておく。そういう意味では防災をいろんな分野にちりばめていく。2030年のライフスタイルとして、なるべく公助に頼らないやり方を伝えておく必要があるのかなと。
- ・地域で人材を良くも悪くも育ててきた仕組みは、年代ごとに押しえつけられながら反発しながら、でも調和を学んでいくみたいな仕組みはもうなくなっている。別のやり方がないとまちづくり協議会とかも回らないと。例えば自主防災組織も核になる人材は絶対数人はいるけど、子ども向けの啓発事業だったらやるよとか、広報紙出すならやるよってところで人を巻き込むとか。地域活動の人材も変えていかないと多分無理かなと思う。
- ・難しいですね。今までの地縁団体が持っていたすごろく的な人材養成システムに代わるものってない。だから、いろんなセーフティネットをとりあえず組んで、濃い人は濃いし薄い人は薄いけど、一つはネットにひっかかるみたいなメニューをつくっていくしかないのかなと。がっちりした飲み会で繋がるのが好きな人もいるし嫌いな人もいる。そこだけに頼ってしまうのはダメだとしても、じゃあネットだけで繋がりましたよとなると漏れる人が出てくる。いろいろ試してどこかに引っかかればいいぐらいの感覚でないと多分もたないのかなと。

3. 滋賀で暮らす・関わる幸せ

- ・自然環境とのつき合い方、わきまえ方、多分それがあるから外来種駆除に関してもどこの人達よりも理解は早いと思う。琵琶湖とのつき合いをずっとされてきた滋賀県民には、煩わしさの中の調和みたいなものが体得されている方が多いのかなと。自然とのつき合い方、煩わしさも含めて自分の思い通りにはいかないと、そういうふうなところがあるのかなと。
- ・提案を非常に素直に受け入れてくれるところはあるのかなと。これは言っちゃいけない発言みたいな決まりがあるんだと思うけど、破った新参者に対しても結構やさしい。そこが役所の中の文化として感じる。柔軟に外の知恵も受け入れてやるのが滋賀県のいいところというか、懐の深さだと思う。

4. その他

Q. 計画の見直し、指標の立て方や達成度などについて

- A. ・気になっているのが、指標の立て方や達成度が、本当にエビデンスベースなのかなと。むしろエビデンスベースというところに圧力を感じすぎて、低めの目標、達成度がAでないと駄目、みたいな感じに呪縛があるような気がして。良くしていくための計画は、途中で柔軟に変えていく仕組みとか、それから総合計画以外にいろんな計画があるので、実施計画のところでは動かせる中間のメソの仕組みがないと、なかなか上手く回らないんじゃないかって。
- ・コロナで色んな事業ができていないはずなので、はじめに立てた指標は守れていないのが普通の姿だと思うけど、結構A評価になっていて、これはいかがなものかと。意図的に目標を低くしてAが達成できるようになっているとも見えてしまう。審議会や議会もそうだと思うが、何かAでなければ駄目で、BとかCだと何でできないんだって詰め寄るような進行になっている。ある意味、B評価が当たり前、逆にできすぎていると、なんでそうなのかと話をちゃんと聞き取れるような、そんな丁寧な進行管理がないとなかなかうまく回らないではないかなと。Bが標準で、進行管理はできていないところの尻叩きではなく、本当にうまくいくような調整をしていくところだ、みたいな文化が作れば、他の個別計画にも良い影響があるのかなと。
 - ・メソ（中間）の計画というのは、年度の目標が段階的に上がっていくわけではない。10%ずつアップみたいなものもあれば、初めにやってしまって、あとは現状維持、あるいはダウンっていうもの、途中でインパクトがあって一気に伸びる、2年ぐらい仕込みをして、3年目4年目で一気に伸ばす、というのもあると思う。そこを加味して目標の設定とか進行管理ができていくのかは気になっている。
 - ・大きな計画と個別の進行管理のところでは調整会議みたいなものがないと、うまくいかないんじゃないかな。大きな計画は実施計画に落とし込んでいく時の調整の仕組みがないとうまく動かない。

〈概要版〉基本構想審議会委員ヒアリング（渡部委員）

○ヒアリング日程

2022年6月23日（木）15時30分～16時30分 ZOOM

○委員

渡部 玉蘭さん（浜大津あすこクリニック院長）

○ヒアリング議事

1. 現状について

- ・クリニックで感じてたのは、動きはコロナ前に戻りつつあるが、大人も子どもみんなマスクをしていて、感染症が減っている。全国データ的にもそうだと思うが、何もはやってない、辛うじて胃腸風邪ぐらいかな。ただ、感染症が減る一方でアレルギーの患者さんもあったり、あとは世の中の変動に対する不安が強いという子どもも大人もそうで、学校行ったりご飯食べると、お腹が痛いとか、下痢や便秘したり、そういう障害が多くなって。
- ・人の笑顔を見て安心するものが、マスクで表情が見えないので、将来的に赤ちゃんから子どもまでどうなるのかなというのと、今度自分がマスクを外すとすると、他人にどう見られているかっていう不安が非常に強くなってきているのではないかな。
- ・ある程度大人とかは、しゃべらないときは率先的にマスクを外してとか、あるいはマスクをしてもなくても、その子その子の安心度によって対応してもらいたいのかなと。一概に今度は外さないと仲間外れにするとか、しないと仲間外れにするとかじゃなくて一人一人にあったマスクの付け方でもいいかなと思う。そういうのが、近々の将来になってくるものかなと。一人一人の笑顔で安心する部分があるので、マスクは外す方向でいってほしい気はするけど、無理して不安の中でマスクを絶対外さなあかんはなく、一人一人に合ったやり方でいいんじゃないかなって。

2. 今後必要だと思うことについて

- ・教育にしても、いろんな遊びにしても、一人一人にあったような教育環境と過ごし方があるので、それぞれ強要しない、外圧的なことにならないことが大事じゃないかなと。その子その子の勉強を、読み書きそろばんだけではなく、運動面のことに関しても。パソコン・スマホを使うときに気をつけないといけないものが、SNSでの発信とかのマナーとか。外国の方のいろんな多文化のことも、みんなあるレベルまでは認識していただける取組を、学校の中でも、生活の中でも、取り組んでいけたらなど。
- ・滋賀県は琵琶湖もあって、山も豊かな自然もあるので、それを守りつつ、自分は自然の中の一員であるということも教育の中で教えていただいて、多様な教育ができる県になっていけたらなど。
- ・やはり子どもたちが最優先、少子化になっていく中で、できるだけ最優先にしていけたらなど。育児のなかで、お母さんお父さんは、もう24時間365日毎日当直しているようなもの。今回コロナ禍で病児保育も預けられなかったりとかあったけど、病児保育の充実とかも、例えば、大病院に附属して病児を預けたい時に預けられるようにできるようなシステムがあったりするのがいいかなと。
- ・共存って非常に難しく、要はお互いの利害関係。これはお互いに譲歩をするという大前提の上で、共存するしかない。常に相手の立場に立って、それこそ、滋賀県の三方よしが生きてくるんじゃないかな。

3. 滋賀で暮らす・関わる「幸せ」

- ・滋賀の人間、人がすごくいい。みんな真面目だし、きちんとしているし。誠実と善良。本当に関わってて、びくびくするような状況はなくて、本当に皆さんやさしい方ばかりで非常に安心していい人々、それが一番うれしいっていうか大事。
- ・琵琶湖や自然風景があったり、お米が美味しかったりするのはもちろんですけども、人が一番いい。本当に滋賀県に住める最大の幸せだと思う。お互いに大事にそこらへんを強調して生きていけたらいいなと思う。

4. その他の質問

Q. コロナ禍で外国籍の方からの相談や困りごとを見聞きされたことは？

A. 支援が届いてないとかはあんまりない。ワクチンも皆さん言葉わからないながらも、市に来てもらったりとか。忘れ物があったらみんなでバックアップするとか、うちの1階に保健所と対策室もあるので対応していた。相談に来られない方はそこまで掘り出してはいないが。

ただ、(言葉がわからない方も)たぶん誰かと連絡を取って会っているの、助けられたりとか、情報をもらったりはしてるんじゃないかなって。ワクチンに来た時も、誰かしら予約を入れたり、友達がいったりしているので、つながりの中で助け合ったりされているんだと思う。

Q. 感染症との共存の段階に入るのかとも思うが、どうお考えになるか？

A. 共存というのは、物事はメリットデメリットっていう表裏は必ずある。感染症がなくなる分、感染症による悪性腫瘍とかは減少する良い面もあれば、これからもしまた違うパンデミックがあると、みんなまた免疫がないの重症化したりすることもあると思う。常に物事メリットデメリットがあるのでそれぞれの人の中でバランスをとりながら、100%安心安全っていうのはおそらくあり得ないので、そういう意識改革っていうか。相談しながら共存していく上で一番大事なのは、おそらく受け入れるっていうことかな。マイナスの面も受け入れながらの調整をしていくっていうのは非常に大事になってくと思う。

Q. コロナ禍では日々対応も変わったと思うが、情報は的確に届いていたと感じるか？

A. そうですね。一つは医師会からのメール、SNSの広場、保健所とも電話とメールのやりとりがあるので今のところ困ってはいないかなと。非常に、県も市も頑張っておられている。最後の方はロックダウンしていなかったところも、何とかバランスよく大きな問題なくこられたんじゃないかな。

Q. リモートでの診察の可能性や難しさについて

A. 電話の相談は多かったりする。今後について画面だけで診察っていうのは、小児科に関しては難しいかなと思う。いつも触って、お子さんの体温とか皮膚の状態、お腹に便が触れたり腫瘍が触れたりしないかを診るので。コロナだから仕方ないっていうことで熱覚ましやせき止めを出すとか、その程度はできるけど、診察っていう意味ではなかなか難しいかなと。

Q. 外国ルーツの方が今滋賀県では3万人おられるが、今後の課題や取組について思われることは

A. 私がアメリカに行ったときは、それぞれの国の方たちっていうのは、コミュニティーという、それぞれの団体的なところがある。そのコミュニティーにできれば行政も、例えばブラジルだったらブラジルの方で長く日本、滋賀県に住んでおられる人と連携、何か繋がりを持ったりとか、中国の方なら、中国の方だけ長く滋賀県に暮らして人脈のある方とか、そういうコミュニティーのヘッドと連絡、繋がりを持っていただければ、おそらくその国、もし困られている方がいれば、その方に相談することもあるかと思うんで、そういう繋がりをたくさん持っていたいただければやりやすいかなとは思う。